

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第705集

こじらほま
小白浜遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第705集

小白浜遺跡発掘調査報告書

2019

国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

2019

国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
（公財）岩手県文化振興事業団

小白浜遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発に当たっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査記録を保存する措置をとってまいりました。

本書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して平成27・28・29年度に行われた釜石市小白浜遺跡の発掘調査成果報告書です。今回の調査により、縄文時代中期後葉の集落が見つかりました。釜石市唐丹湾に位置する小白浜遺跡は、周知の遺跡として著名で数度に渡る発掘調査が行われております。調査の結果、居住施設と考えられる竪穴建物跡が複数確認され、当時の人々が、唐丹湾の海産資源と、背後に広がる山地から恵みを巧みに利用していたことが判明しました。今後、本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成31年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野 洋樹

例 言

- 1 本報告書は、岩手県釜石市唐丹町字小白浜385ほかに所在する小白浜遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、「三陸沿岸道路建設事業」に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の調査成果の概略は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集「平成27年度発掘調査報告書」・同676集「平成28年度発掘調査報告書」・同692集「平成29年度発掘調査報告書」に公表しているが、本書の内容を優先するものとする。
- 4 本遺跡の岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡コード番号並びに遺跡略号は、以下の通りである。
番号：MG92-0133 略号：KH-15、KH-16、KH-17
- 5 各遺跡の調査期間・調査面積（調査対象面積）・担当者は、以下のとおりである。

野外調査

年度	野外調査期間	調査面積	担当者
平成27年度	平成27年4月16日～平成27年5月29日	1,000㎡	米田 寛、佐藤直紀、酒井野々子
平成28年度	平成28年11月16日～平成28年12月21日	350㎡	北村忠昭、瀧浩二郎、酒井野々子
平成29年度	平成29年4月10日～平成29年6月6日	1,142㎡	北村忠昭、川村 英

室内整理

年度	室内整理期間	担当者
平成27年度	平成27年1月1日～平成28年3月31日	米田 寛
平成28年度	平成29年2月16日～平成29年2月28日	北村忠昭
平成29年度	平成29年6月16日～平成29年1月31日	米田 寛、川村 英

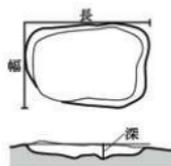
- 6 野外調査での遺構写真撮影は調査担当者、遺物写真撮影は当センター写真撮影を専門とする期限付職員が担当した。
- 7 本報告書の執筆は、第1章第1節を国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所が、その他を米田が執筆し、編集は米田が担当した。
- 8 出土遺物の鑑定・分析は以下の機関に委託した。
種子・炭化物同定分析……………古代の森研究所
- 9 石器実測・トレース作業の一部を（株）ラングに委託した。
- 10 本遺跡の調査及び本書作成に際し、以下の方々の協力を得た（敬称略、順不同）。
手塚新太・森 一欽・加藤幹樹・高橋 岳（釜石市教育委員会）
- 11 本書で用いた地図は以下の通りである。
国土交通省国土地理院1:50,000地形図「釜石」(N J-54-14-1)
国土交通省国土地理院1:25,000地形図「平田」(N J-54-14-1-2)
国土交通省国土地理院1:25,000地形図「小白浜」(N J-54-14-1-4)
- 12 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

遺構図凡例

長 (m) : 長軸計測値
幅 (m) : 短軸計測値
深 (cm) : 検出面からの深さ

■ 炉石範囲
■ 赤褐色焼土



遺物凡例

■ 赤色顔料付着範囲
■ 石器：明瞭な磨面
■ 石器：微弱な磨面

目 次

I	調査に至る経過	
1	調査経緯	1
2	調査経過	2
II	立地と環境	
1	遺跡の位置	3
2	地理的環境	3
3	歴史的環境	3
4	基本層序	10
III	調査・整理の方法	
1	野外調査	12
2	室内整理	12
	(1) 遺構名称の変更	12
	(2) 注記記載事項	14
	(3) 遺物番号	14
	(4) 遺物観察表の記載	14
	(5) 土器の分類	14
	(6) 石器の分類	15
IV	平成27年度調査	
1	概要	17
2	検出遺構	17
	(1) 竪穴建物	17
3	遺構外出土遺物	38
	(1) 縄文土器	38
	(2) 石器	47
V	平成28・29年度調査	
1	概要	48
2	検出遺構	48
	(1) 竪穴建物	48
	(2) 埋設土器	73
	(3) 土坑	73
	(4) 焼土	74

3 遺構外出土遺物	
(1) 縄文土器	74
(2) 石・素材礫	74
VI 自然科学分析	
1 小白浜遺跡から出土した炭化種実	89
2 分析結果所見	90
VII 総括	
1 調査成果概要	91
2 遺構	91
(1) 竪穴建物	91
3 出土遺物	
(1) 縄文土器	91
(2) 石器	91
報告書抄録	137

図版目次

<II章>		第16図	2・3号竪穴建物出土遺物(1)	30	
第1図	遺跡位置図(1)	4	第17図	3号竪穴建物出土遺物(2)	31
第2図	遺跡位置図(2)	5	第18図	4号竪穴建物(1)	32
第3図	遺跡周辺地形図	6	第19図	4号竪穴建物(2)	33
第4図	遺跡周辺地質図	7	第20図	4号竪穴建物(3)	34
第5図	周辺遺跡分布図	8	第21図	4号竪穴建物出土遺物	35
第6図	基本土層図	11	第22図	5号竪穴建物	37
			第23図	5号竪穴建物出土遺物	38
<III章>			第24図	27年度遺構外出土遺物(1)	39
第7図	遺構配置図	13	第25図	27年度遺構外出土遺物(2)	40
			第26図	27年度遺構外出土遺物(3)	41
<IV章>			第27図	27年度遺構外出土遺物(4)	42
第8図	1号竪穴建物(1)	18	第28図	27年度遺構外出土遺物(5)	43
第9図	1号竪穴建物(2)	19	<V章>		
第10図	1号竪穴建物出土遺物(1)	21	第29図	6号竪穴建物(1)	49
第11図	1号竪穴建物出土遺物(2)	22	第30図	6号竪穴建物(2)	51
第12図	2号竪穴建物	24	第31図	6号竪穴建物出土遺物(1)	52
第13図	2号竪穴建物出土遺物	26	第32図	6号竪穴建物出土遺物(2)	53
第14図	3号竪穴建物(1)	27	第33図	6号竪穴建物出土遺物(3)	54
第15図	3号竪穴建物(2)	28	第34図	7号竪穴建物	56

第35図	8号堅穴建物	57	第47図	10号堅穴建物出土遺物(2)、 11・12号堅穴建物出土遺物	71
第36図	7号堅穴建物、 8号堅穴建物出土遺物(1)	59	第48図	12号堅穴建物	72
第37図	8号堅穴建物出土遺物(2)	60	第49図	1号埋設土器遺構	73
第38図	8号堅穴建物出土遺物(3)	61	第50図	1号土坑、1号焼土	75
第39図	9号堅穴建物(1)	62	第51図	1号埋設土器、1号土坑、 28・29年度遺構外出土遺物(1)	76
第40図	9号堅穴建物(2)	63	第52図	28・29年度遺構外出土遺物(2)	77
第41図	9号堅穴建物出土遺物(1)	64	第53図	28・29年度遺構外出土遺物(3)	78
第42図	9号堅穴建物出土遺物(2)	65	第54図	28・29年度遺構外出土遺物(4)	79
第43図	10号堅穴建物(1)	66	第55図	28・29年度遺構外出土遺物(5)	80
第44図	10号堅穴建物(2)	67	第56図	28・29年度遺構外出土遺物(6)	81
第45図	11号堅穴建物	69			
第46図	10号堅穴建物出土遺物(1)	70			

目 次

<II章>

第1表	周辺の遺跡一覧	9
第2表	基本土層	11

<III章>

第3表	遺構名対応表	14
-----	--------	----

<IV章>

第4表	1号堅穴建物土層観察表	20
第5表	1号堅穴建物ビット計測表	20
第6表	2号堅穴建物土層観察表	25
第7表	2号堅穴建物ビット計測表	25
第8表	3号堅穴建物土層観察表	28
第9表	3号堅穴建物ビット計測表	29
第10表	4号堅穴建物土層観察表	33
第11表	4号堅穴建物ビット計測表	34
第12表	5号堅穴建物土層観察表	38
第13表	5号堅穴建物ビット計測表	38
第14表	土器観察表(平成27年度)	44
第15表	石器観察表(平成27年度)	47

<V章>

第16表	6号堅穴建物土層観察表	50
第17表	6号堅穴建物aビット計測表	51
第18表	6号堅穴建物bビット計測表	51
第19表	7号堅穴建物ビット計測表	56
第20表	7号堅穴建物土層観察表	56
第21表	8号堅穴建物土層観察表	58
第22表	8号堅穴建物ビット計測表	58
第23表	9号堅穴建物土層観察表	63
第24表	9号堅穴建物ビット計測表	63
第25表	10号堅穴建物土層観察表	66
第26表	10号堅穴建物ビット計測表	67
第27表	11号堅穴建物土層観察表	69
第28表	11号堅穴建物ビット計測表	69
第29表	12号堅穴建物土層観察表	72
第30表	12号堅穴建物ビット計測表	72
第31表	1号埋設土器土層観察表	73
第32表	1号土坑土層観察表	75
第33表	1号焼土遺構土層観察表	75
第34表	土器観察表(平成28・29年度)	82
第35表	石器観察表(平成28・29年度)	87

写真図版目次

<平成27年度調査>

写真図版1	遺跡遠景……………	93
写真図版2	調査区全景、基本層序、 調査区完掘……………	94
写真図版3	27年度調査区の遺構……………	95
写真図版4	1号堅穴建物(1)……………	96
写真図版5	1号堅穴建物(2)……………	97
写真図版6	2号堅穴建物……………	98
写真図版7	3号堅穴建物(1)……………	99
写真図版8	3号堅穴建物(2)……………	100
写真図版9	4号堅穴建物(1)……………	101
写真図版10	4号堅穴建物(2)……………	102
写真図版11	5号堅穴建物……………	103
写真図版12	1号堅穴建物出土遺物(1)……………	104
写真図版13	1号堅穴建物(2)、 2・3号堅穴建物出土遺物……………	105
写真図版14	3号堅穴建物出土遺物……………	106
写真図版15	4・5号堅穴建物、 27年度遺構外出土遺物(1)……………	107
写真図版16	27年度遺構外出土遺物(2)……………	108
写真図版17	27年度遺構外出土遺物(3)……………	109
写真図版18	27年度遺構外出土遺物(4)……………	110

<平成28・29年度調査>

写真図版19	29年度航空写真……………	111
写真図版20	航空写真、その他……………	112
写真図版21	6号堅穴建物(1)……………	113
写真図版22	6号堅穴建物(2)……………	114

写真図版23	7号堅穴建物……………	115
写真図版24	8号堅穴建物……………	116
写真図版25	9号堅穴建物……………	117
写真図版26	10号堅穴建物……………	118
写真図版27	11号堅穴建物……………	119
写真図版28	12号堅穴建物……………	120
写真図版29	1号埋設土器、1号土坑、 1号焼土……………	121
写真図版30	調査区内完掘状況、作業状況……………	122
写真図版31	6号堅穴建物出土遺物(1)……………	123
写真図版32	6号堅穴建物出土遺物(2)……………	124
写真図版33	6号堅穴建物出土遺物(3)……………	125
写真図版34	6号堅穴建物(4)、7号堅穴建物、 8号堅穴建物出土遺物……………	126
写真図版35	8号堅穴建物出土遺物(2)……………	127
写真図版36	8号堅穴建物出土遺物(3)……………	128
写真図版37	8号堅穴建物(4)、 9号堅穴建物出土遺物(1)……………	129
写真図版38	9号堅穴建物出土遺物(2)……………	130
写真図版39	10号堅穴建物・ 11号堅穴建物出土遺物(1)……………	131
写真図版40	11号堅穴建物(2)、 12号堅穴建物、1号土坑、 28・29年度遺構外出土遺物(1)……………	132
写真図版41	28・29年度遺構外出土遺物(2)……………	133
写真図版42	28・29年度遺構外出土遺物(3)……………	134
写真図版43	28・29年度遺構外出土遺物(4)……………	135
写真図版44	28・29年度遺構外出土遺物(5)……………	136

I 調査に至る経過

1 調査経緯

小白浜遺跡は、三陸沿岸道路「吉浜釜石道路」の道路改築事業に伴い、その事業域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路「吉浜釜石道路」は、岩手県大船渡市三陸町吉浜（吉浜IC）から岩手県釜石市甲子町第13地割（釜石JCT（仮））を結ぶ延長約14kmの自動車専用道路であり、平成23年度より事業化している。

また、釜石JCT（仮）において東北横断自動車道釜石秋田線（釜石～花巻）と連結している。

当該道路は、東日本大震災以降新たに事業化が決定された復興道路であり、東日本大震災のような大規模災害時には、救助・救援や支援物資の輸送など「命の道」として機能されるほか、東日本大震災からの早期復興への貢献、現道の隘路解消、交通混雑の緩和、交通安全の確保及び走行性、利便性の向上により地域間交流の促進や拠点間の連携強化、物流の効率化、定時制・速達性の確保により地域の産業・経済・観光等への貢献が期待されている。

さらに救急医療施設への救急搬送時間の短縮や医療施設間の連携強化、災害時の救助・救援活動の支援により地域の安全・安心の確保に資するものである。

また、「いのちを守り海と大地と共に生きる ふるさと岩手・三陸の創造」を目指す姿とする「岩手県東日本大震災津波復興計画」の3つの原則のひとつ「安全の確保」においても、「災害時の確実な緊急輸送や代替機能を確保した信頼性の高い道路ネットワーク」を構築する幹線道路ネットワークとして位置づけられている重要な社会基盤である。

当該道路事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成26年11月25日付け国東整南陸調品確第88号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課あて試掘調査の依頼を行った。岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課では、平成26年12月10日から平成26年12月11日の間において試掘調査を実施し、平成26年12月25日付け教生第1405号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により埋蔵文化財が確認されたことから発掘調査が必要となるので、工事に先立ちその取扱いについて岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と協議するように回答があった。その回答を受けて南三陸国道事務所では、発掘調査を依頼したところである。

平成27年度の埋蔵文化財の発掘調査については、岩手県教育委員会事務局と協議を重ね、岩手県教育委員会教育長から平成27年2月24日付けで（公財）岩手県文化振興事業団と発掘調査の契約事務を執り進めるように通知があり、平成27年4月13日付け（国の暫定予算成立後）で発掘調査に係る委託契約を締結、調査を開始するに至った。

本遺跡に関しては調査が数年度に及ぶこととなり、平成28年度においては岩手県教育委員会教育長から平成28年2月26日付け教生第1771号「平成28年度埋蔵文化財発掘調査事業について」により、平成29年度においては、平成29年3月1日付け教生第1703号により、（公財）岩手県文化振興事業団から提出された計画書に基づき協議及び契約事務を取り進めるように通知があったことから、（公財）岩手県文化振興事業団と協議を経て平成28年4月1日付け及び平成29年度4月1日付けで発掘調査に係る委託契約を締結、調査を実施した。

（国土交通省東北地方整備局 南三陸国道事務所）

2 調査経過

小白浜遺跡は周知の遺跡として知られ、平成16年には釜石市教育委員会による本格的な発掘調査が行われている。平成16年度調査区は、本報告調査範囲より西側に位置する標高80～85m地点の水田範囲を対象とし、堅穴状遺構、土坑、溝状遺構、ピット、縄文土器（早期～後期）、石器類が出土している。

平成16年度調査の成果を受けて、より唐丹湾に近い標高50～55m地点である本調査区においても、縄文時代早期～後期の遺構・遺物の検出が期待され、特に明確な居住施設の存在を明らかにすることが望まれた。平成26年度に実施された岩手県教育委員会生涯学習文化課による試掘調査では、上・下2段に分かれる水田造成範囲のうち、下段では遺構未検出、上段で3棟の建物跡と縄文土器を検出した。

平成27年度調査は、平成27年4月16日から調査を開始した。下段田面の残土量が非常に多く、下段範囲を終了してから上段範囲を調査する方針とした。下段範囲は削平が進み、造成時の厚い客土内から摩耗の著しい縄文土器片が微量出土したが、遺構は見つからなかった。下段部の調査を終えた後に、上段部の調査に取り掛かった。水田耕作土よりも下位の地層には人頭大の礫が多量に含まれる地層があり、これを重機によって除去し遺構検出作業を行った。途中、北側の沢跡と隣接する範囲の試掘調査のため、県生涯学習文化課委託の重機通行路を残しながら調査を行った。上段範囲では、縄文時代堅穴建物跡5棟を調査した。これらの遺構は上段範囲の北側に分布し、南側は縄文土器が微量分布するものの、遺構は確認できなかった。5月14日に県生涯学習文化課による終了確認検査を受け、平成27年5月29日に撤収し野外調査を終了した。室内整理は平成28年1月4日より開始し、平成28年3月31日に室内整理作業を終了した。

平成28年度調査はボックスカルバート建設を先行させるため、11月16日より急遽調査を行った。350㎡の範囲を調査し、微量の縄文土器が出土した。室内整理は遺物洗浄と登録作業が平成29年2月16日より行われ、2月28日に終了した。

平成29年度調査は、4月10日より野外調査が行われ、宅地跡を中心とした範囲を調査し、平成27年度調査区に隣接する範囲に堅穴建物群が確認された。室内整理は、野外調査終了後に6月1日より開始し、平成30年1月31日に終了した。

(米田)

Ⅱ 立地と環境

1 遺跡の位置

小白浜遺跡は、釜石市唐丹町字小白浜地内に所在する。釜石市は岩手県沿岸中部に位置し、東側には三陸海岸を擁し太平洋が広がる。平成27年12月末現在、市域面積440.3km²、人口35,846人である。釜石市は、北の上閉伊郡大槌町、西の遠野市、南の大船渡市と気仙郡住田町と境界を接する。

釜石市は古くから太平洋上の海上交通や水産業、鉄鋼業で栄え、現在も幾多の港が存在しており、各種船舶が入り出している。しかし、三陸海岸に面するため津波の被害にも悩まされてきた過去があり、2011年3月11日の東日本大震災においても、港湾施設はもとより市街地を中心に甚大な被害を被っている。

釜石市は、海産物資源に恵まれ岩手県における水産加工の拠点として重要な位置を占めているが、「鉄の町」として全国的に有名であり、新日鐵住金釜石製鉄所が現在も操業している。また2019年開催予定のラグビーワールドカップ開催地となっており、多くの観光客が訪れると予想される。

遺跡は、三陸鉄道南リアス線唐丹駅から北へ約1.1kmの斜面地に位置する。その位置は国土地理院発行の地形図1/50,000「釜石」(NJ-54-14-1) 図幅に含まれており、北緯39度12分39秒、東経141度51分51秒付近〔世界測地系〕である。遺跡両側を背後の丘陵から続く尾根線に挟まれており、調査区北側に唐丹湾へ注ぐ沢が東流する。調査区現況は水田造成地で、2面の水田が上・下段に分かれており、特に下段の水田で地形改変が進んでいた。眺望環境として、遺跡からは東方向に唐丹湾を良好に臨むことができる。また、岩手県沿岸地方特有のヤマセによる霧は、この眺望環境の変化により可視的に感じることができる。

なお、小白浜遺跡の立地と環境については釜石市埋蔵文化財調査報告書第9集『小白浜遺跡発掘調査報告書（釜石市教育委員会2006）』に詳細が記載されているので参照されたい。

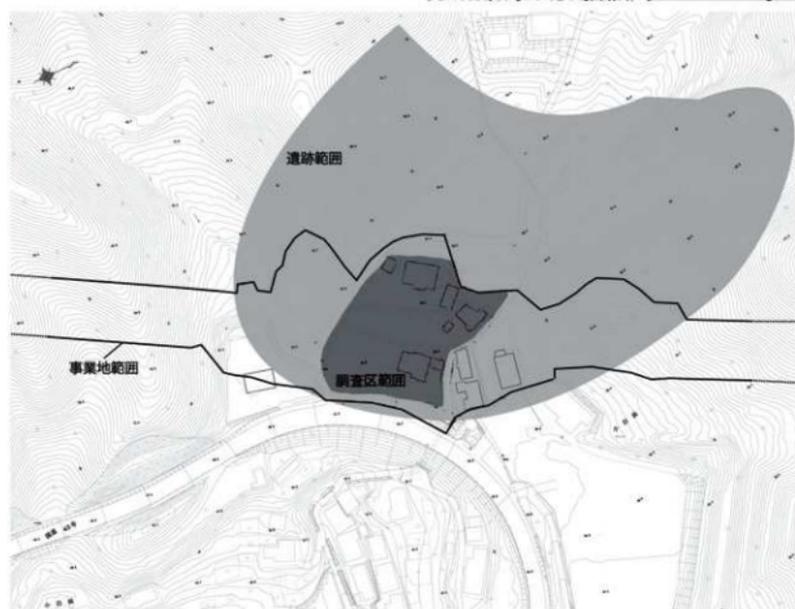
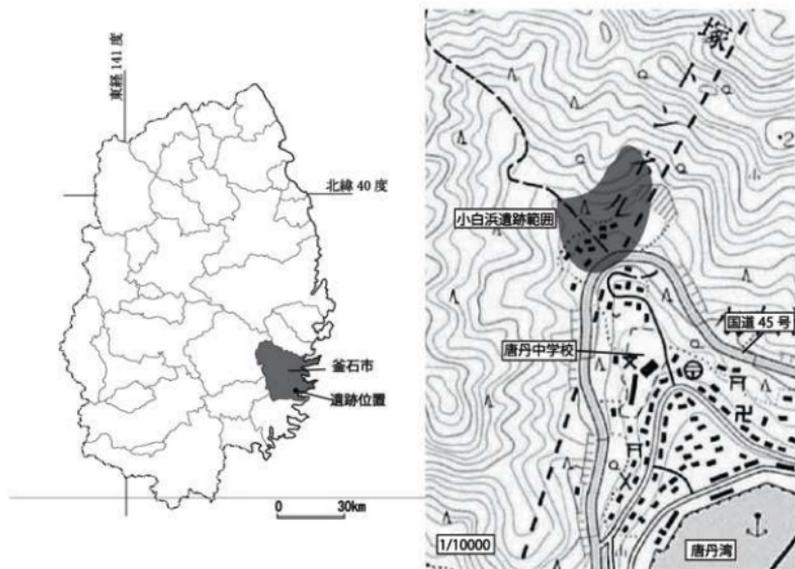
2 地理的環境

釜石市市街地は西部に広がる山地を南北に分断する甲子川流域を中心に形成されている。しかし、市街地の平野部は狭く、有史以来人々は生活の場を求めて平野部から丘陵地、さらには山地にまで進出している。本遺跡の所在する唐丹地区は、釜石市市街地からは離れており市街地南部に位置する平田地区から石塚トンネルを通過して大船渡市方面へ向かい唐丹湾に至る。また釜石市唐丹地区は大船渡市の市境に位置し、江戸期には気仙郡であったため現在でも気仙地方との交流が活発である。

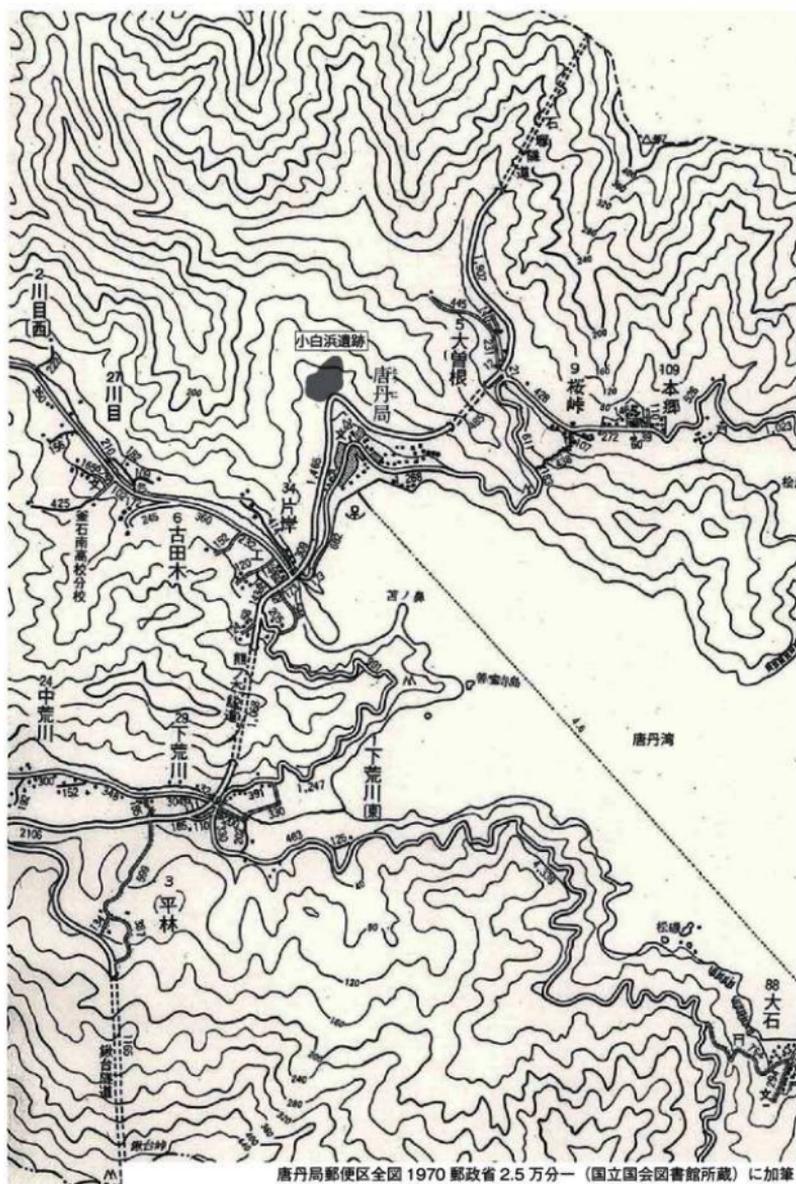
唐丹湾には片岸川が注ぐ。背後の急峻な山地との比高差が大きく、狭い緩斜面地に宅地が広がっている。このうち小白浜地区では、背後の山地の珉岩質頁岩・泥岩からなる基盤層の崩落によって砂礫が供給され、谷底状の緩斜面地が形成されている。本遺跡は地質上で泥岩と珉岩質頁岩の境界付近に位置しているが、27年度調査区では泥岩・粘板岩の堆積が確認された。本遺跡では石器が他の縄文時代遺跡に比べて少ないが、石器石材として使用可能な石材が遺跡周辺で少なかった可能性がある。

3 歴史的環境

主に発掘調査が行われた釜石市南部の遺跡について取り上げる。

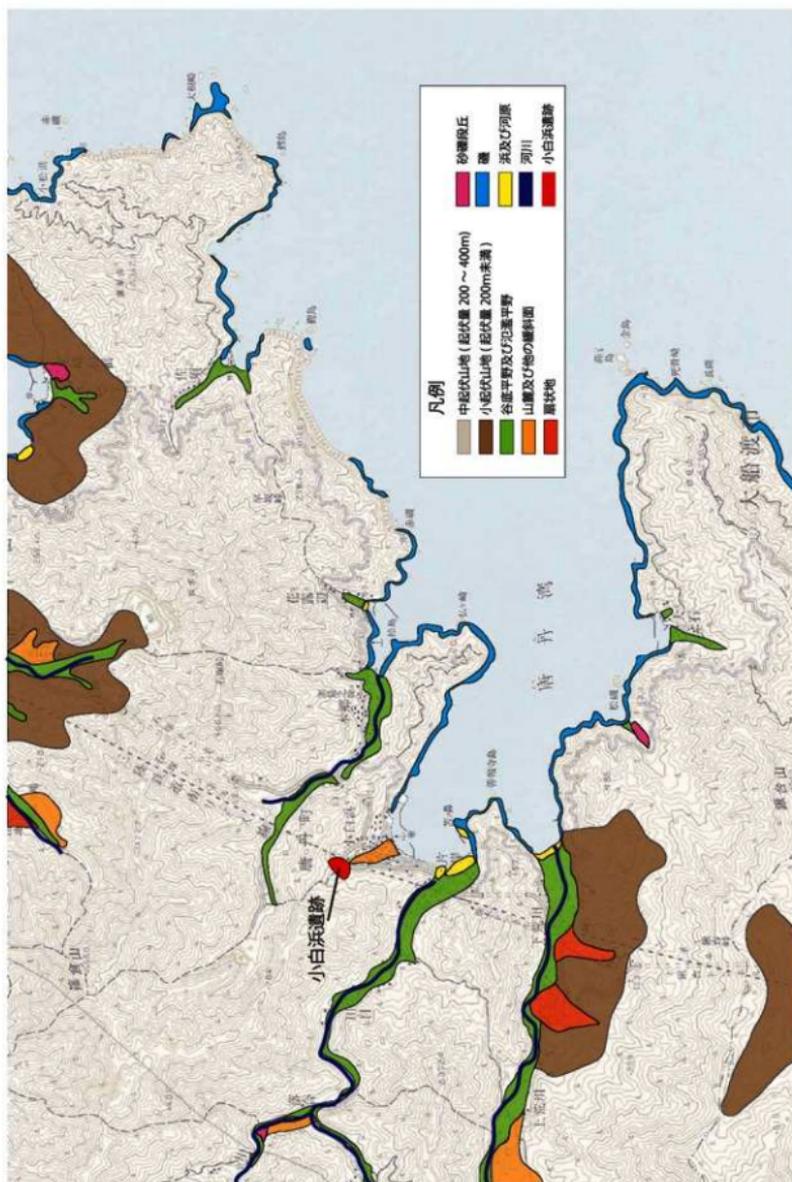


第1図 遺跡位置図(1)

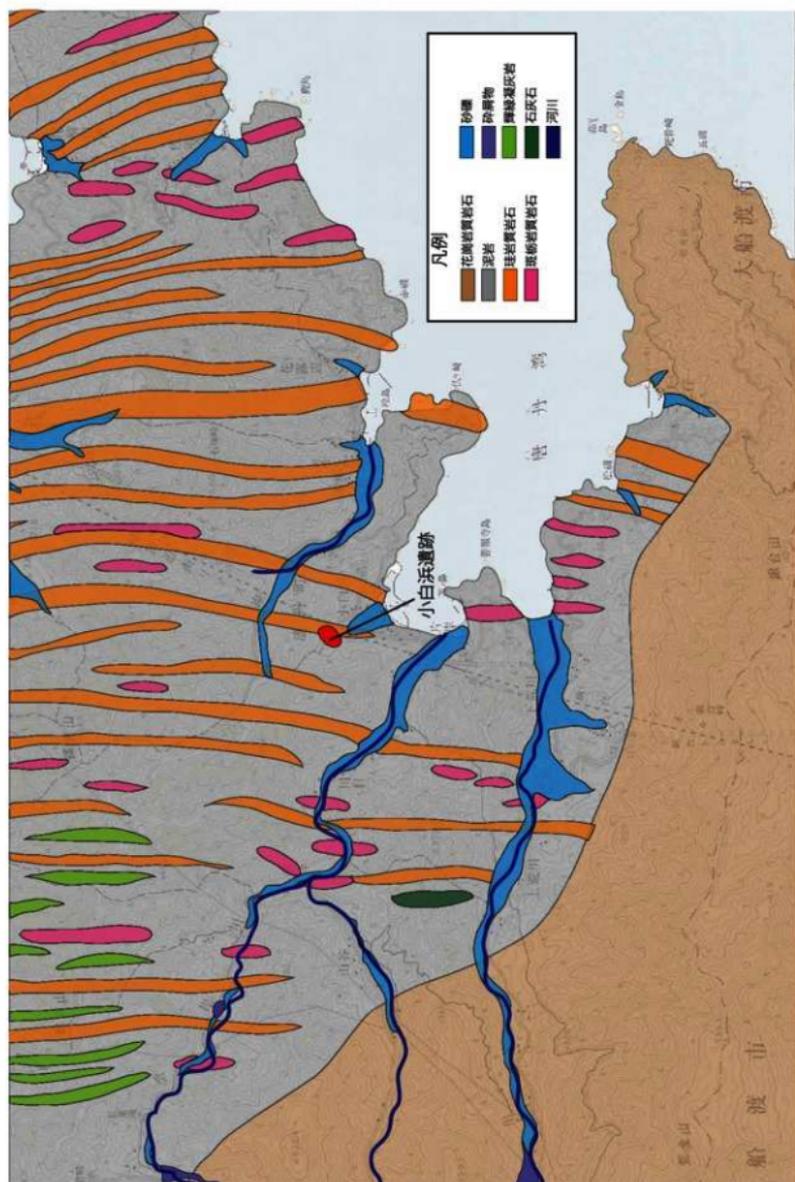


唐丹局郵便区全図 1970 郵政省 2.5 万分一 (国立国会図書館所蔵) に加筆

第2図 遺跡位置図(2)



第3図 遺跡周辺地形図



第4図 遺跡周辺地質図



第5図 周辺遺跡分布図

弥生時代では、小白浜遺跡、屋形遺跡で弥生土器が出土している。

古代

古代の痕跡は、釜石市市街地でも少なく、唐丹地区でも屋形遺跡で9世紀代の土師器が採集されている程度である。上閉伊郡では大槌町内に8世紀の赤彩窓が出土した夏本遺跡や9世紀の遺物が出土した釜石市鶴住居地区の麓山遺跡がある。また鶴住居地区では12世紀のかわらけが出土した川原遺跡が調査されている。

中世・近世

中世では、城館跡が確認・調査されている。これら中世の城館跡は広範囲に点在し、それぞれ防御的施設を有し、おもに阿曾沼氏・葛西氏家臣の關係とされている。唐丹地区では小白浜遺跡の南に隣接する伝城跡が遺跡登録されており、平場、空堀2条、土塁、曲輪等が岩手県教育委員会による中世城館分布調査によって確認されている。

なお、上閉伊郡で15世紀前半に国人一揆が起こっている。釜石市教育委員会の小白浜遺跡報告書(釜石市教委2006)に記載があり再録するが、『聞老遺事』では応永19(1410)年、『阿曾沼家乗』では永享9(1437)年とする国人一揆で、気仙郡浜田城主千葉安房に対して家臣の岳波太郎と唐嶽崎四朗が反乱を起こす。この反乱に上閉伊郡の有力国人の遠野盆地を掌握する横田城主阿曾沼秀氏は呼応せず、大槌城主大槌孫三郎が加勢し千葉安房を攻めた。しかし、千葉が葛西氏に窮状を訴えたため、葛西との紛争を避けて大槌孫三郎は矛先を阿曾沼氏の遠野横田城へ向けた。阿曾沼秀氏は南部守行に加勢を要請し、南部守行は援軍として横田城を解放し、その後大槌城の包囲を行うが、この大槌城攻防戦で南部守行は流れ矢にあたって戦死する。なお、南部家の文書にはこの大槌城の記載は残されていない。

近世では、唐丹地区に伊能忠敬の測量事業とその功績を称えて測量之碑と星座石が建立されており、設置は文化11(1814)年に唐丹の天文暦学者、葛西晶丞が行った。

東日本大震災と津軽石地区浸水域

2011年3月11日の東日本大震災の被害は、沿岸南部では特に甚大で、数多くの家屋が倒壊・浸水した。釜石市役所ホームページ等で、被害状況の一部を把握可能なので参照されたい。唐丹地区においても小白浜集落の多くが被災し、港湾施設はもとより家屋の流失と人的被害の影響は計り知れない。三陸沿岸部は幾度となく津波の被害にあっている。2011年以外でも、昭和のチリ沖地震、明治の三陸大津波、近世初頭の2度の大津波、平安時代の貞観の大津波などがあり、その都度、被害を受けたと想定される。

4 基本層序

遺跡周辺は、古生代の地層上にあり、泥岩帯を南北に筋状に走る珪岩質岩石帯が広がる。今回の調査範囲は、珪岩質岩石帯上に位置し、堆積層内には頁岩、粘板岩等の礫が大量に含まれる地層が存在する。河川流路から遠ざかるにつれ、表土の土壌層は薄く、傾斜地では頁岩や粘板岩の風化層あるいは岩塊層が見ることが多い。

小白浜遺跡は、遺跡背後の山地から続く尾根に挟まれた、谷状地形の緩斜面地に位置する。このような地形の特徴は、雨水や沢の蛇行による尾根範囲の岩盤浸食によって大小様々なサイズの礫が大量に供給されることにある。本遺跡の基本層序を5層に大別し、さらに各大別層内を細別しているが、破碎礫の混入しない地層は皆無である。大別層はローマ数字表記、細別層はアルファベット小文字表記している。

I層は盛土と水田耕作土を主体とする黒色土を一括した。

II層は水田造成面より下位に位置する。IIa層には水田造成時の盛土が一部混入する層である。摩

耗の著しい縄文土器と石器を包含する。やや締りの悪い地層で混入礫の多くは寝た状態であることから、堆積層の形成速度が比較的緩やかであったと考えられる。調査区内の上・下段田面のうち、下段田面では削平されている。

III層は 締りが密で、崖礫性堆積物が多量に含まれる。混入礫の多くは立った状態であることから、堆積層の形成速度が比較的速かったと考えられる。褐色土が混入しており、基盤層に近い土壤が斜面

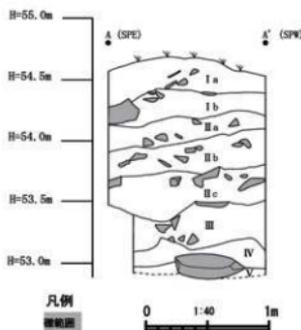
第2表 基本土層

層名	土色・土性	粘性	締	混入物等	備考
I	75YR2/1 黒色土	弱	密	礫φ 5-30cm多量	水田耕作土と盛土
II a	10YR2/1 黒色土	弱	やや密	礫φ 10cm 10%	
II b	10YR2/1 黒色土	弱	やや粗	礫φ 10cm 10%	
II c	10YR1/7 黒色土	弱	やや粗	礫φ 5-30cm 7%、縄文土器微量	混入礫は寝た状態が主体
III	10YR3/1 灰褐色土～ 10YR3/3 褐色土	やや強	密	礫φ 5-30cm 7%、褐色土 10%、縄文土器少量	混入礫は立った状態が主体
IV	10YR4/2 灰黄褐色土	やや強	密	礫φ 1cm微量、縄文土器多量、褐色土 5%	
V	10YR4/4 褐色粘土	強	密	にぶい黄褐色土 10%	

上方から流入したと考えられる。遺物包含層である。

IV層は灰黄褐色土層である。調査区北端のIV層相当層の色調は灰黄褐色～褐色土である。水分を含み、粘土の混入量も多い。一方で、混入礫の粒径はI～III層に比べて小さくなっている。遺物包含層で、縄文土器と石器が出土している。遺構プランはIV層下部掘削時に検出している。

V層は褐色粘土層で無遺物層である。上面を最終遺構検出面とした。調査区内にトレンチを数カ所設定してV層以下の遺構・遺物の有無を確認したが、見つからなかった。



第6図 基本土層図

参考・引用文献

釜石市教育委員会 2006『小白浜遺跡発掘調査報告書』釜石市埋蔵文化財調査報告書第9集

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

緯度と経度はGPS測量による電子基準点から算出した。打設した3級基準点をもとに、世界測地系座標(座標系X)にしたがって測量業務を行った。設置した基準点は以下のとおりである。

(27年度)

3級基準点

基 1 : X=-87093.442m, Y=89024.825m, H=55.183m
基 2 : X=-87099.785m, Y=89066.688m, H=52.064m

区画点

補 1 : X=-87080.000m, Y=89026.000m, H=53.902m
補 2 : X=-87060.000m, Y=89040.000m, H=54.017m

(29年度)

3級基準点

基 1 : X=-87048.151m, Y=89003.540m, H=61.331m
基 2 : X=-87023.477m, Y=89017.832m, H=61.175m

区画点

補 1 : X=-87040.000m, Y=89036.000m, H=56.496m
補 2 : X=-87046.000m, Y=89042.000m, H=55.737m
補 3 : X=-87032.000m, Y=89032.000m, H=57.363m
補 4 : X=-87064.000m, Y=89008.000m, H=58.579m

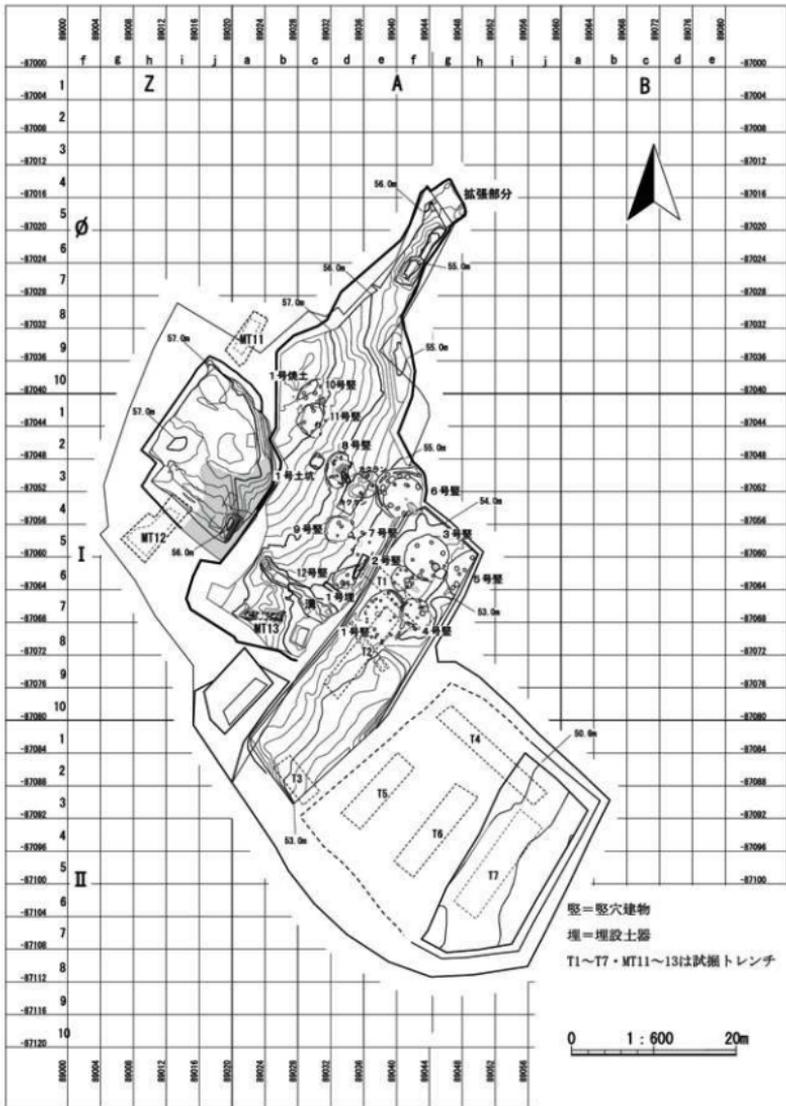
遺構はレベル水準器、光波測量器と電子平板システム(Cubic社製実測支援システム「遺構くん」)を用いて図化した。遺構外出土遺物の取り上げは、小グリッド4×4mを基準として、層位ごとに取り上げた。グリッドは平成27年度に大グリッド40m(縦軸Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、横軸A・B・C)、小グリッド4m(縦軸1・2・3～10、横軸a・b・c～j)単位で設定した。平成28・29年度調査区では、当初の調査予定範囲よりも北西方向に遺物の分布が確認され、新たに「0」グリッドを設定して対応した。

2 室内整理

遺構図面は電子データを加工して、版下を作成した。遺物は洗浄、接合、復元作業を経て実測、計測、実測図トレースを行い、図版の作成を行った。図化は出土遺物のうち、遺構内出土遺物を優先し、その中でも口径推定可能な資料を優先したが、適宜破片資料も掲載した。

(1) 遺構名称の変更

野外調査時は堅穴建物跡=SIの各略号で登録し、室内整理作業に置いて、第3表のとおり名称変更を行った。なお、本書の堅穴建物の概念は、堅穴を構築し、その中で何らかの構築物が存在したと認識可能な建物である。構成要素としては、壁溝、柱穴、貯蔵穴、炉などが該当する。既存の堅穴住居跡、堅穴住居状遺構はこの概念に含まれる。



第7図 遺構配置図

第3表 遺構名対応表

野外調査時		報告書掲載名
SI01	→	1号壑穴建物
SI02	→	2号壑穴建物
SI03	→	3号壑穴建物
SI04	→	4号壑穴建物
SI05	→	5号壑穴建物

野外調査時		報告書掲載名
SI21a	→	6号壑穴建物 a
SI21b	→	6号壑穴建物 b
SI22	→	7号壑穴建物
SI23	→	8号壑穴建物
SI24	→	9号壑穴建物
SI25	→	10号壑穴建物

野外調査時		報告書掲載名
SI26	→	11号壑穴建物
SI27	→	12号壑穴建物
SK11	→	1号土坑
SL01	→	1号焼土
SR01	→	1号埋設土器

(2) 注記記載事項

色 調：小山正忠・竹原秀雄編 2006『新版 標準土色帖 2006年度版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に基づいた。

形成要因：判断可能な限り、備考欄に記載した。例えば「地下構造」、「人為堆積」等。

粘 性：強 = 5、やや強 = 4、やや弱 = 3、弱 = 2、微 = 1、無 = 0の6段階で区分し、観察表には数値を記載した。例えば砂層では「無」と「微」が、粘土層では「強」と「やや強」の区分が多くなる。

しまり：密 = 4、やや密 = 3、やや粗 = 2、粗 = 1の4段階に区分した。地層の含水量によって少なからず左右されるが、粘土層や細粒の砂では「密」や「やや密」に、粗粒の砂や土では「やや粗」や「粗」の区分が多くなる。

包 含 物：炭化物、焼土、遺物、礫、植物根、火山灰、ベースとなる土壌以外の混入土壌・砂・粘土等の量と形状を記載した。混入量等の記載にあたっては、上記の『新版 標準土色帖 2006年度版』に従った。

(3) 遺物番号

図版・写真図版の各遺物番号は対応している。

(4) 遺物観察表の記載

() 内の数値は推定値、[] 内の数値は残存値を示す。

(5) 土器の分類

縄文土器を以下のとおり分類した。今回の調査範囲では出土していない時期の土器についても今後隣接地で出土する可能性を考慮し、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ群を設定し、それぞれ細分した。

Ⅰ群 縄文時代早期の土器。本調査区では早期中葉の貝殻沈線文系土器が出土した。

Ⅱ群 縄文時代前期の土器

Ⅲ群 縄文時代中期の土器

ⅢA類 大木7a式土器。

ⅢB群 大木7b式土器。

ⅢC群 大木8a～8b式土器。

ⅢD群古 大木9式土器古段階。縦位区画縄文帯の成立する段階で、渦巻文と区画帯が連結する。

ⅢD群新 大木9式土器新段階。縦位区画縄文帯の渦巻文と区画帯が分離する段階で、区画が逆U字状、H字状となる。

III E群 大木 10 式土器。横位区画縄文帯の成立する段階

IV群 縄文時代後期

IVA群 初頭～前葉（十腰内 I 式）。

IVB群 中葉（宝ヶ峰式相当）。

IVC群 後葉。

V群 縄文時代晩期

VA群 前葉（大洞 B～BC 式）。

VB群 中葉（大洞 C 1～C 2 式）。

VC群 後葉（大洞 A 1～A 2 式）。

VD群 末葉（大洞 A' 式）。

(6) 石器の分類

石 鏃 矢の先に取り付けられて鏃として機能したと考えられる形態と重量の尖頭状石器。楡先形尖頭器とは便宜的に長さ 4.5cm 前後で分離した。

尖頭器 楡先に装着したと考えられるサイズの尖頭状狩猟具。

石 匙 摘部を持つスクレイパー。刃部は搔器や削器の機能を持ち、ナイフの用途が想定される。

搔削器 スクレイパーのうち、搔き取る、押し搔く、削る等の機能を意図した刃部を持つもの。

搔器 スクレイパーのうち、搔き取る、押し搔く機能を意図した刃部を持つもの。搔く作業による磨減痕や衝撃剥離痕があるものも含む。大半が素材剥片の長軸端部を刃部とする。削器よりも刃部角度が鈍角。通常、石筈とされるものも本分類に含めた。

削器 スクレイパーのうち、削る機能を意図した刃部を持つもの。刃部角度が鋭角で、削る作業による磨減痕や衝撃剥離痕があるものも含む。搔器と比べて刃部角が鋭角。

石 錐 ドリルの機能を持つと考えられる形状の石器。機能部に特徴的な磨減痕や衝撃剥離痕があるものも含む。摘部をもつもの、棒状のもの、機能部の長・短など形態差が認められる。

二次加工のある剥片 調整痕のある剥片。

微細剥離痕のある剥片 使用痕と考えられる剥離痕の配列を持つ剥片。

両極剥片 両極打撃技術により、製作された剥片。

楔形石核 両極打撃技術で素材剥片の製作が行われた石核・残核。両端部がネガ面に覆われた資料で、楔形石器とされるものを含む。

石 核 最終剥離面がネガ面で、素材剥片製作を目的として調整された石器。残核形状のものも含む。

打製石斧 斧の刃部をもつ石斧のうち、打撃調整で完形品に仕上げられたと考えられる石器。

磨製石斧 斧の刃部をもつ石斧のうち、研磨で完形品に仕上げられたと考えられる石器。

石斧未成品 調整段階で、石斧製作を意図したと考えられる形状のもの。磨製石斧未成品の敲打調整段階の資料を含む。

礫 器 厚手の刃部を持ち、石斧刃部や石核調整段階と見なし難い刃部形状のもの。

敲磨石 素材礫に敲打痕と磨面をもつもので、長時間手持ち可能な重量のもの。

磨石 素材礫に磨面をもつもので、長時間手持ち可能な重量のもの。

特殊磨石 磨石のうち、断面三角形素材礫の端部に磨面をもつもの。

敲石 ハンマーとしての用途をもつもので、長時間手持ち可能な重量のもの。素材礫に敲打痕をもつものやトチ剥き石を含む。

台石 台として使用されたと考えられる重量と用途が想定されるもの。敲石・磨石と分類可能なものうち、長時間手持ちが困難な重量のものを本類に含めた。

石 皿 扁平な素材面を持ち、台として使用したと考えられるもので、中央部が面的に窪むものを含む。磨面や敲打痕を伴うことがある。

参考文献

- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2018 「田屋遺跡発掘調査報告書」第704集
森 幸彦 2008 「大木9・10式土器」『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

IV 平成27年度調査

1 概 要

調査区は1,000㎡である。検出遺構は堅穴建物5棟である。これらは、縄文時代中期後葉で、ⅢD群(大木9式土器)期が主体である。ⅢD群の堅穴建物内設置炉の形態は、岩手県内の調査事例から複式炉であることが多いが、本遺跡でもその特徴が確認された。平成27年度調査では5棟の堅穴建物が確認され、うち4棟で炉の形態が判別可能であり、2～4号堅穴建物設置炉は複式炉であった。出土遺物は、縄文土器(早期、中期後葉)、磨石、剥片である。各堅穴建物内設置炉堆積土の焼土サンプルを分析委託し、サンプル内から炭化種子を回収している(Ⅵ章参照)。

2 検 出 遺 構

(1) 堅 穴 建 物

5棟の調査を行った。帰属時期は縄文時代中期後葉である。

1号堅穴建物(第8～11図、写真図版3～5・12・13)

(検出状況) I A7e・8eグリッド、X = -87068、Y = 89036付近に位置する。Ⅲ・Ⅳ層掘削時に平成26年度試掘調査で確認された北東部のプランを検出した。プランが不鮮明なため、野外調査中、SI01をSI01A、SI04をSI01Bと認識して調査を進めた。堅穴範囲内掘削が進むにつれ、これらが明確に2棟に分離できたので、SI01(本遺構)とSI04(4号堅穴建物)に登録した。

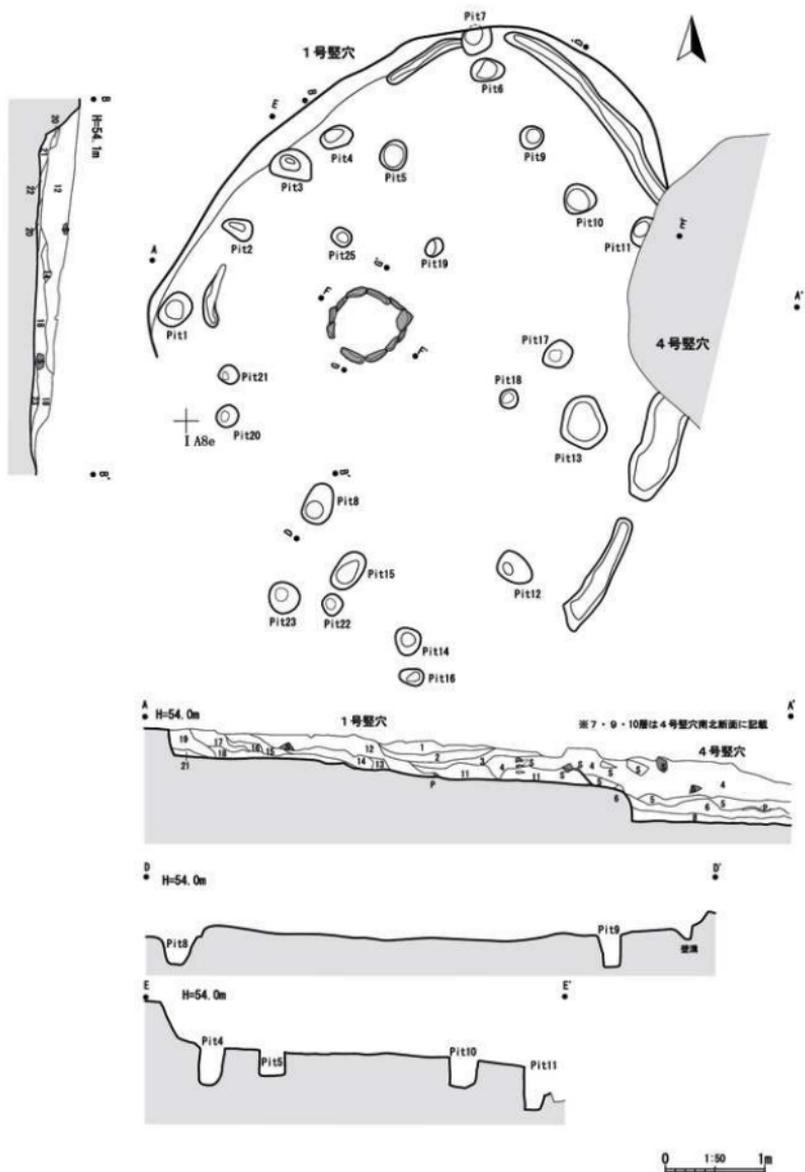
(規模・形状) 南側は消失している。残存規模は6.44×5.45mで平面形は楕円形である。残存床面積は22.9㎡である。床面はV層まで掘り込まれて構築されている。

(堆積土) 東側は4号堅穴建物と重複しこれに切られる。1・4号堅穴建物堆積土を23層に区分した。1～10層が4号堅穴建物廃絶後の堆積層、11～23層が1号堅穴建物堆積土である。1～5層は1号堅穴建物範囲にも分布している。主に調査区西側の斜面地上方からの流れ込みによって形成された自然堆積層で構成される。19・21層は埋没過程初期段階の壁際の堆積層である。11層は1号堅穴建物炉1から流出した焼土を包含するが、5層に切られる。1～5層は混入礫の長軸が立位・斜位が主体であり、短期間に形成された可能性がある。11層内には一部40cmの崖錐礫や土器が混入する。5層が4号堅穴建物堆積土に含まれることから、新旧関係は1号堅穴→4号堅穴である。

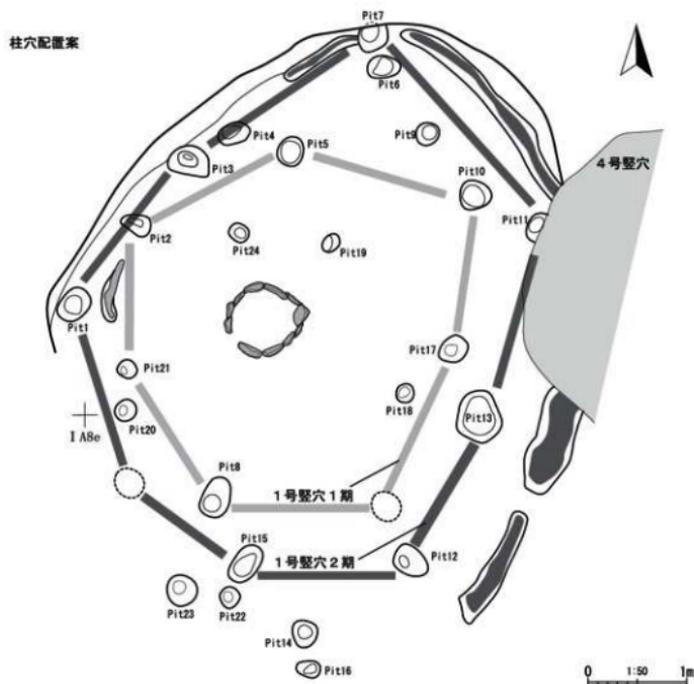
(構成要素・付属施設) 建物構成要素はピット24個と壁溝、付属施設は石囲炉1基を有する。ピットは主に壁際に分布しており、建物中央部には少ない。壁溝は消失している南部を除いて断続的に廻り、特に北東部が深めに掘り込まれている。

(ピット) 建物内壁際に多く分布するが、北側でやや内側にも分布する。明確な痕跡を見いだせていないが、当初はPit 2・5・10・17・8・21を主柱穴とする建物の中央に炉が設置されていたが、その後建物を拡張し、壁際のPit 1・3・4・6・7・11・13・12・15を設置したと想定される。

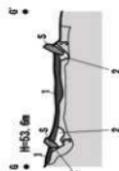
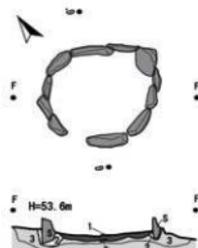
(炉1) 1.10×1.12mの石囲炉である。炉内や炉周辺にはⅢD群土器が出土している。炉構築にあたっては炉石設置範囲を深く、炉範囲全体を土坑状に浅く掘り込んでいる。炉石は基盤層の頁岩・粘板岩が使用され、板状礫を横長に立てて円形に配置している。炉底面の赤化は弱く、炉内の上部堆積



第8図 1号壑穴建物(1)



炉 1 石圍部



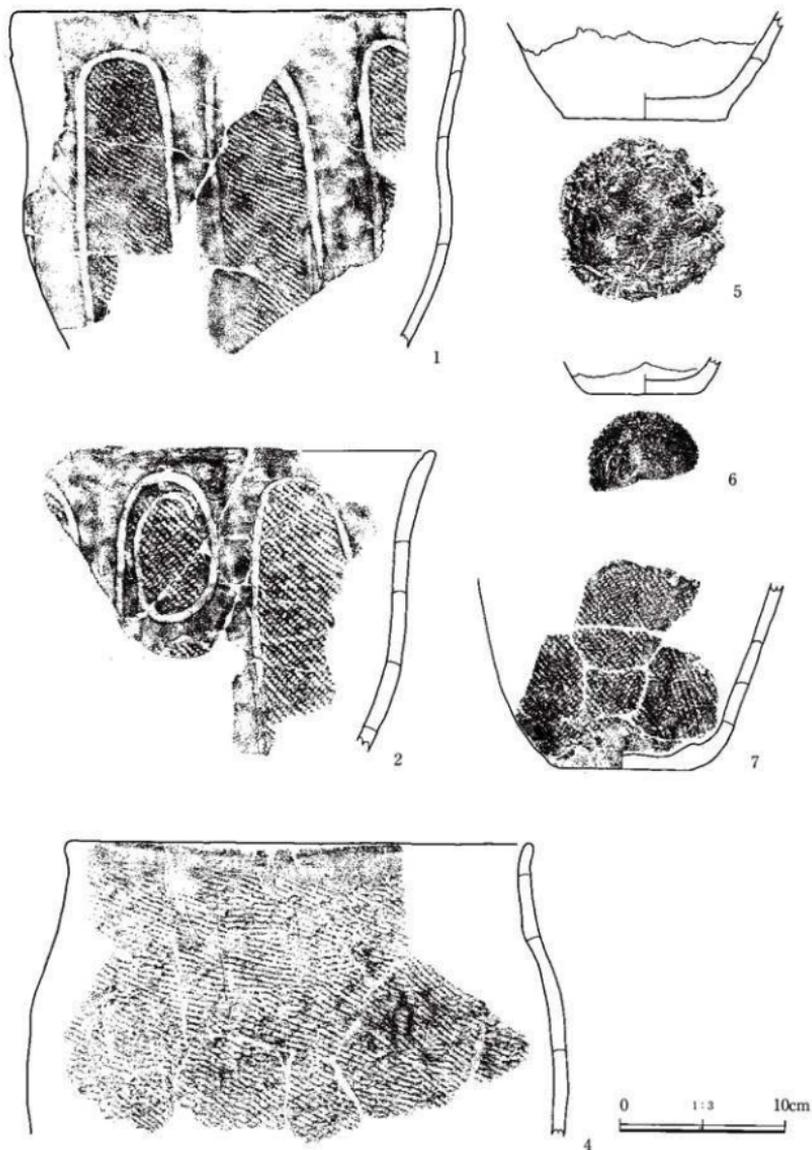
第9図 1号壁穴建物(2)

第4表 1号竪穴建物土層観察表

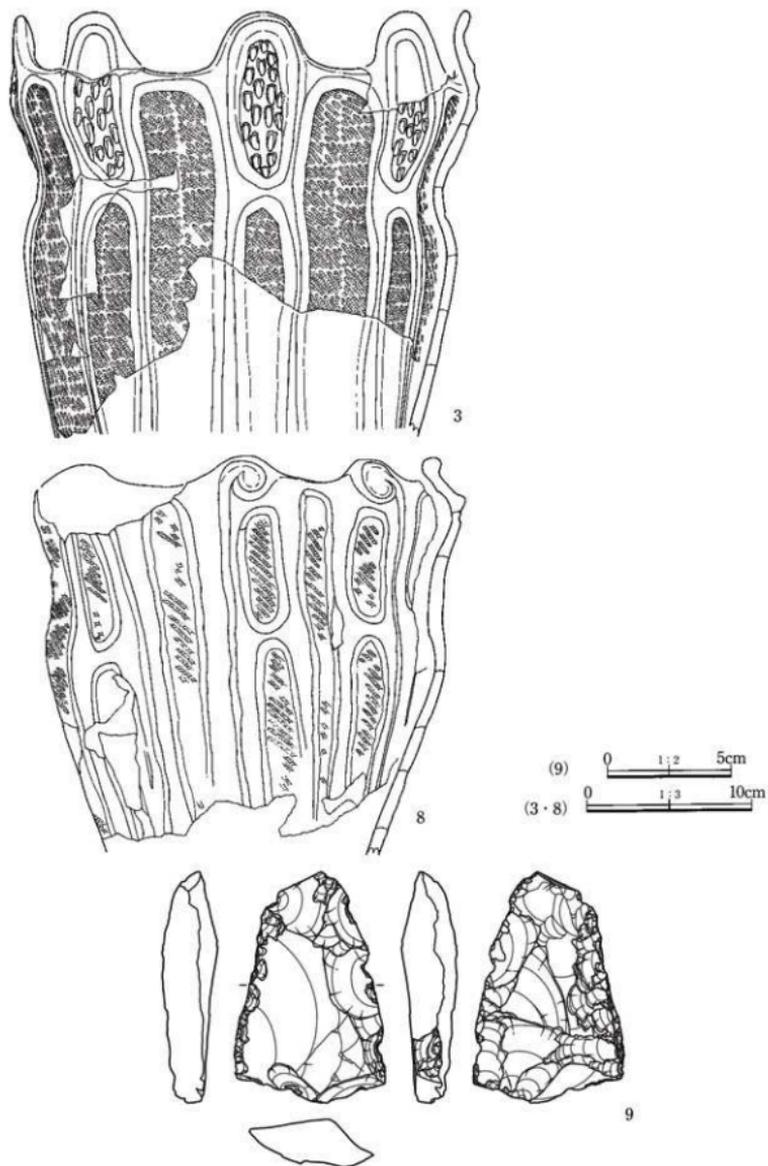
遺構名	層位	色	調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
1・4号 竪穴	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	2	1	φ1～3cm炭性土層20%	斜面上方からの流入土
	2	10YR2/2	黒褐色	シルト	3		φ1～3cm炭性土層1%が水平堆積、炭化物粒3%	斜面上方からの流入土
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	4	3	φ1cm炭性土層5%	斜面上方からの流入土
	4	10YR3/2	黒褐色	シルト	1	2	φ10～15cm炭性土層20%、炭化物粒1%	斜面上方からの流入土
4号竪穴	5	10YR3/2	黒褐色	シルト	4	1	炭性土層?	
	6	10YR2/3	黒褐色	シルト	3	2	炭性土層?、炭化物粒1%、遺物包含	
	7	10YR2/2	黒褐色	シルト	3	1	炭性土層?、炭化物粒1%、焼土粒1%	第18図参照
	8	10YR2/3	黒褐色	シルト	3	1	φ1cm炭性土層3%、黄褐色土粒10%	第18図参照
1号竪穴	9	10YR3/2	黒褐色	シルト	3	1	φ10～15cm炭性土層2点(斜位)	床面直上の堆積土
	10	10YR2/2	黒褐色	シルト	3	3	φ1～3cm炭性土層1%、φ5cm黄褐色土ブロック1ヶ所	第18図参照
	11	10YR3/3	暗褐色	シルト	2	2	φ3cm炭性土層1%(斜位)、5YR4/4にぶい赤褐色焼土10%、土層包含	中の焼土の流出
	12	10YR2/3	黒褐色	シルト	3	2	φ3～5cm炭性土層10%(斜位)	
	13	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	2	4	φ1cm炭性土層3%(斜位)	V層崩落層か
	14	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	2	4	φ1～3cm炭性土層50%(斜位)	V層崩落層か
	15	10YR2/3	黒褐色	シルト	3	3	炭性土層?、炭化物粒1%	
	16	10YR3/4	暗褐色	シルト	4	3	炭性土層?、炭化物粒3%	
	17	10YR3/2	黒褐色	シルト	4	3	炭性土層?、炭化物粒5%	
	18	10YR3/3	暗褐色	シルト	4	3	φ1cm炭性土層5%、炭化物粒3%、焼土粒3%	
	19	10YR2/3	黒褐色	シルト	4	2	φ1cm炭性土層3%	
	20	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	2	2		
	21	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	1	3	φ1～5cm炭性土層40%	
22	10YR2/3	黒褐色	シルト	3	2			
23	10YR2/2	黒褐色	シルト	3	2			
1号竪穴 部1	1	5YR3/4	暗赤褐色	シルト	3	3	φ1～2cm炭化物3%	焼土層
	2	10YR2/3	黒褐色	シルト	3	2	焼土粒1%	炉石の設置痕
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	3	4		V層

第5表 1号竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径(m)	底面標高(m)	構成	番号	開口部径(m)	底面標高(m)	構成
Pit1	0.38 × 0.28	52.92	2期	Pit13	0.55 × 0.47	53.09	2期
Pit2	0.31 × 0.22	53.32	1期	Pit14	0.28 × 0.24	53.02	
Pit3	0.41 × 0.37	53.30	2期	Pit15	0.42 × 0.26	53.11	2期
Pit4	0.33 × 0.22	53.10		Pit16	0.25 × 0.24	53.09	
Pit5	0.30 × 0.29	53.18	1期	Pit17	0.33 × 0.28	52.96	
Pit6	0.33 × 0.23	53.05		Pit18	0.19 × 0.18	52.93	
Pit7	0.32 × 0.32	53.11	2期	Pit19	0.21 × 0.19	53.13	
Pit8	0.44 × 0.28	52.86	1期	Pit20	0.23 × 0.22	53.30	
Pit9	0.25 × 0.24	53.08		Pit21	0.21 × 0.19	53.29	1期
Pit10	0.33 × 0.31	53.06	1期	Pit22	0.23 × 0.21	53.14	
Pit11	0.32 × 0.14	52.84	2期	Pit23	0.33 × 0.32	53.13	
Pit12	0.39 × 0.28	52.87	2期	Pit24	0.22 × 0.19	53.33	



第10図 1号竪穴建物出土遺物(1)



第11図 1号竪穴建物出土遺物(2)

土のほうが明赤褐色土を包含している。床面傾斜方向と建物内堆積物の堆積方向から、炉1から東方向へ焼土と炭化物が流出し、床面直上に堆積している11層を形成したと考えられる。

〈重複関係〉4号堅穴建物と重複し、これに切られる。

〈遺物分布〉堆積土下部～床面で、立体復元可能な個体が分布している。主に炉1周辺と建物東側で遺物出土量が多い。西壁付近の堆積土から削器1点が出土している。

〈遺物〉ⅢD群土器、石器が出土した。

【縄文土器】1～8の深鉢を図示した。1～3・8はⅢD群土器新段階で逆U字・H字状区画帯を特徴とする。区画帯内は縄文・刺突文が配置される。床面出土の8は波状口縁部に渦巻文を有し、渦巻から底部に向かって沈線が垂下する。1～8の胎土は大型深鉢では砂粒が粗く、小型では細かい。

〈遺構の性格〉石囲炉を伴い床面積も十分な広さがあることから居住施設と考えられる。

〈時期〉遺構の特徴と床面出土遺物から縄文時代中期後葉の大大9式土器期である。

2号堅穴建物（第12・13・16図、写真図版6・13・14）

〈検出状況〉I A 6e・I A 6 f グリッド、X = 87064、Y = 89040付近に位置する。Ⅲ・Ⅳ層掘削時に平成26年度試掘調査で確認されたプランを検出した。

〈規模・形状〉残存規模は290×286mで平面形は不整形円形、残存床面積は4.47㎡である。床面はV層まで掘り込まれて構築されている。複式炉前庭部が建物外に張り出している。

〈堆積土〉1・3・4号堅穴建物との重複関係を堆積土からは判断できなかった。3号堅穴建物とは壁が接している。堆積土を1～5層に区分した。2層は人為層と考えられる。1層は西方向から流入してきた崖錐性礫を含む。2・4号堅穴建物の上部に堆積している。2層は堆積土上部にあり、赤褐色焼土を包含する。別の建物の炉跡と認識できる根拠がなく、廃棄焼土と捉えた。3層は堆積土中部～上部に堆積する。4層は堆積土下部～床面にあり、炉を覆う。南東側では建物範囲外へ流出し、4号堅穴建物に切られる。

〈構成要素・付属施設〉構成要素はピット7個、付属施設は石囲部+前庭部を有する複式炉1基がある。ピットは壁際に分布しており、建物中央部にはない。

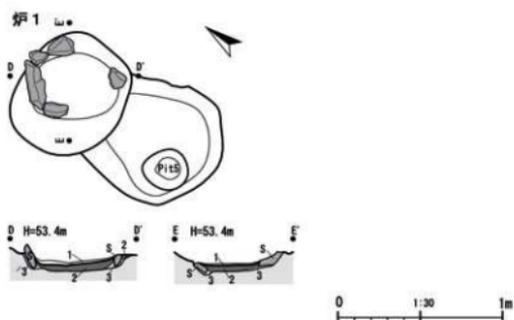
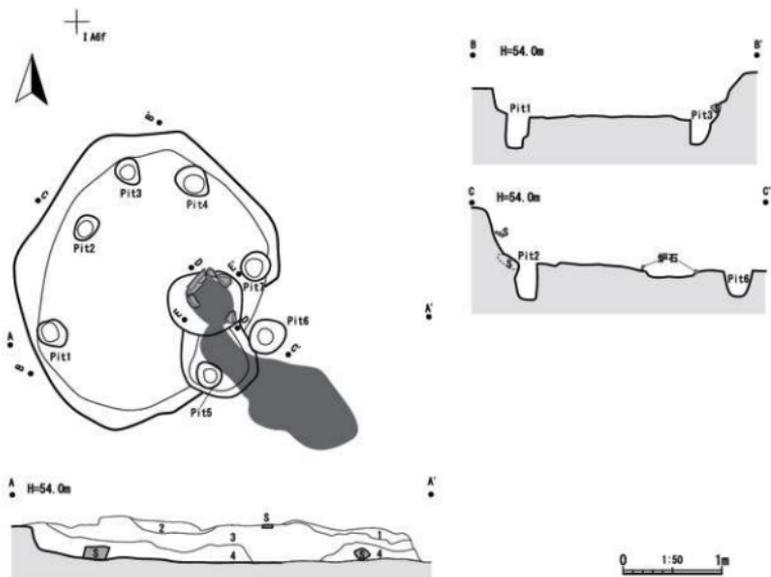
〈ピット〉7個のピットが建物内壁際に分布する。

〈炉1〉石囲部+前庭部を有する複式炉である。規模は石囲部0.92×0.76m、前庭部1.10×1.12mである。焼土が炉内から南東方向の建物外へ流出している。炉構築にあたっては石囲部全体を土坑状に深く掘り込む。炉石範囲は、掘り込んだ土坑範囲の壁面に押し当てるように配置されている。炉石は基盤層の頁岩・粘板岩が使用され、板状礫を横長に立てて四角形に配置している。炉内堆積土の赤化は明瞭だが、炉外へ流出した焼土のほうが明るい色調である。炉からの焼土流出状況から、複式炉の南東方向に建物出入口があり、入口と床面とは高低差が殆どないと考えられる。前庭部は建物内に収まらず、外に張り出している。また、前庭部にはピットが1個分布する。このピットは他の2号堅穴建物内ピットよりも小規模で、東北北部地域に多いとされる複式炉前庭部に伴う「特殊ピット」と考えられる。

〈重複関係〉建物内堆積土で確認できた重複関係はない。ただし、配置から1・3・4号堅穴建物との重複が想定される。本堅穴建物床面に堆積していた4層は南東部から壁外へと流出しているが、この流出土は4号堅穴建物に切られていることから、新旧関係は2号堅穴→4号堅穴となる。

〈遺物分布〉遺物量は少ないが、堆積土下部～床面でⅢD群新段階の土器が分布する。11（第16図掲載）の土器が本遺構堆積土上部（破片微量）と3号堅穴建物床面～堆積土下部（破片の95%）に分かれて出土し、遺構間接合する。このことから3号堅穴使用時～廃絶直後には、すでに2号堅穴建物の埋没が進行していたと考えられる。従って、2号堅穴→3号堅穴の新旧関係が考えられる。重複関

2 検出遺構



第 12 図 2号竪穴建物

第6表 2号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他	
竪穴部	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	2	1	炭素質堆積物 30% (西方向から流入)	
	2	2.5YR4/6	赤褐色	シルト	2	1	焼土 70%、10YR2/3 黒褐色土 20%、炭素質堆積物 5%	廃棄焼土
	3	10YR3/3	暗褐色	シルト	4	2	φ 0.5 ~ 1cm 炭化物 5%、炭素質堆積物 10%、こぶし大礫数点	
	4	10YR3/4	暗褐色	シルト	4	2	φ 0.5 ~ 1cm 炭化物 1%、炭素質堆積物 1%、こぶし大礫数点	
炉 1	1	7.5YR2/3	極暗褐色	シルト	3	2	φ 1cm 炭化物 3%	
	2	7.5YR4/3	褐色	シルト	4	2	φ 1cm 炭化物 1%	焼土層
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	4	2	焼土粒 3%	炉石設置痕

第7表 2号竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構成
Pit1	0.34 × 0.30	53.05	
Pit2	0.29 × 0.22	53.00	
Pit3	0.28 × 0.25	53.11	
Pit4	0.38 × 0.30	52.80	
Pit5	0.28 × 0.25	52.74	炉前底部内
Pit6	0.41 × 0.35	53.04	
Pit7	0.32 × 0.28	52.91	

係とまとめると、2号竪穴→3・4号竪穴である。

〈遺物〉Ⅲ D群土器、石器が出土した。

【縄文土器】10・11はⅢ D群土器で、逆U字形区画を特徴とする。10は口縁～胴部破片で、床面上から出土した。胴部上半にスガが付着している。11は微量の破片が堆積土上部の2層から、破片の95%が3号竪穴建物から出土している。

【石器】12は頁岩製剥片、13は磨石である。いずれも堆積土下部から出土した。

〈遺構の性格〉不明である。居住施設とするには床面積が狭い。岩手県一戸町御所野遺跡の成果から、炉付き小形竪穴建物について燻製小屋の可能性が指摘されており、本竪穴建物も類似的用途が想定される。

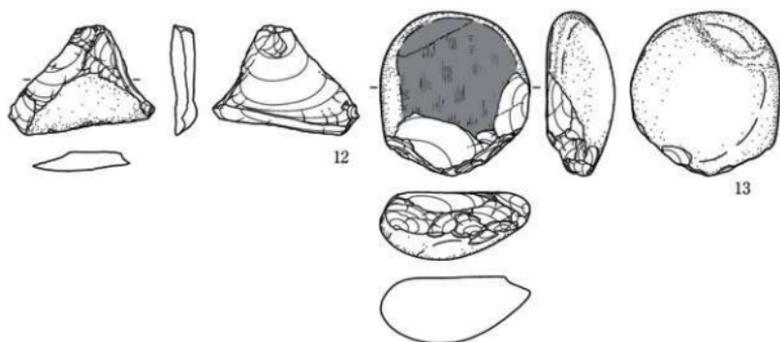
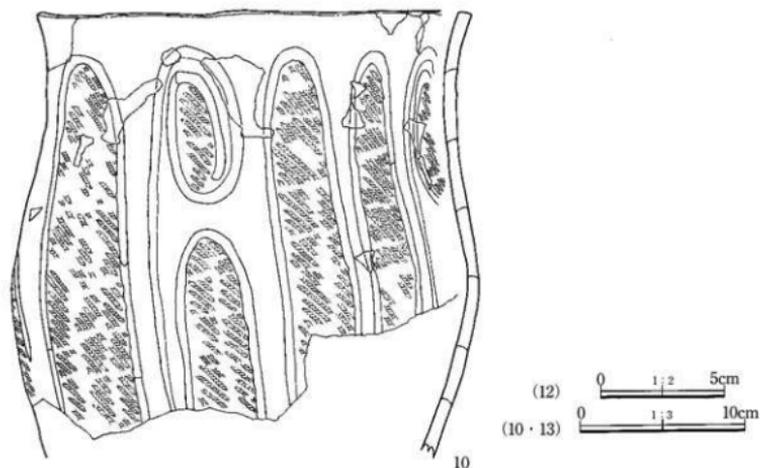
〈時期〉遺構の特徴と床面出土遺物から縄文時代中期後葉の大木9式土器期新段階である。

3号竪穴建物 (第14～17図、写真図版7・8・14・15)

〈検出状況〉I A5 f グリッド、X = 87060、Y = 89040付近に位置する。Ⅲ・Ⅳ層掘削時に平成26年度試掘調査で確認されたプランを検出した。

〈規模・形状〉残存規模は5.98×5.86mで平面形は不整形である。残存床面積は20.16㎡である。床面はV層まで掘り込まれ構築されている。複式炉前底部が建物外に張り出す。

〈堆積土〉2・5号竪穴建物との重複関係を堆積土からは確認できなかった。1～11層に区分した。11層が貼土、9層が壁際や壁溝に埋没初期に堆積する層、6層が廃棄焼土である。概ね西から東方向に向かって土砂が流入している。堆積土内に遺物が多く含まれていることから、建物廃絶後に廃棄穴として利用されたと考えられる。1・2層は炭素質堆積物量が多い。堆積中部の3～5層は

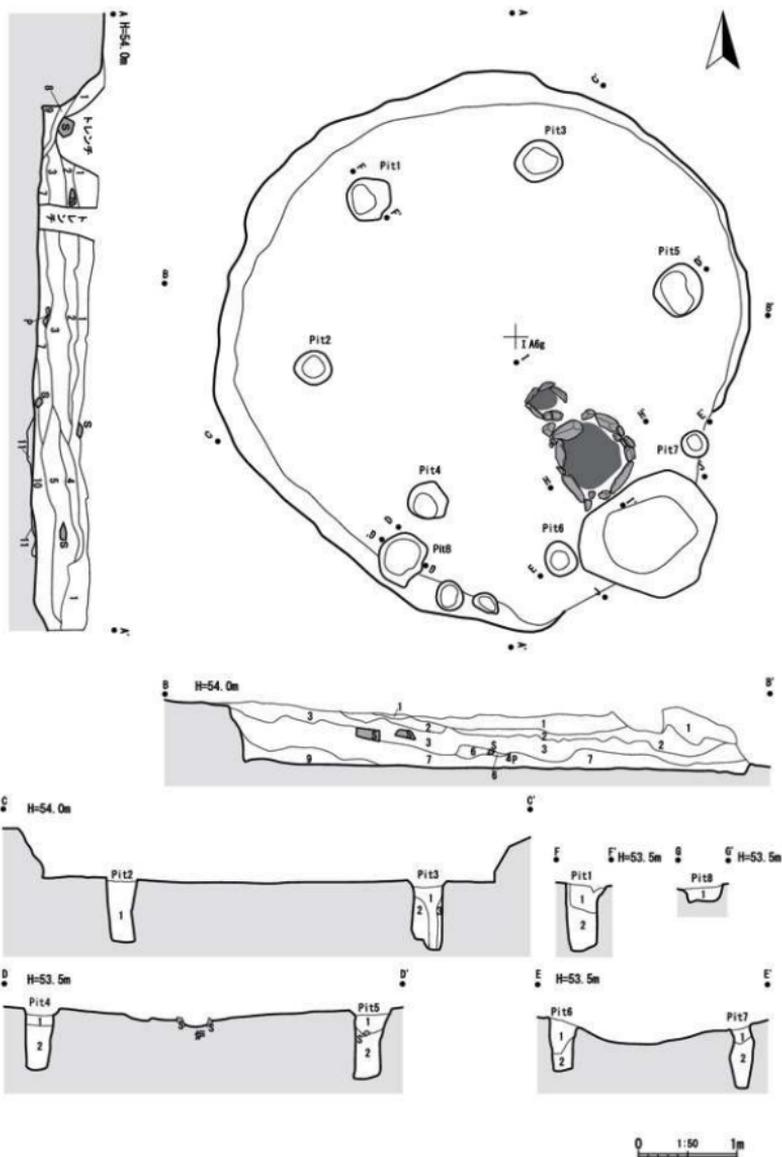


第13図 2号竪穴建物出土遺物

崖錐性堆積物が少なく、7～9層は多い。10層は9層に類似する地層で床面南半に分布する。遺物は各堆積層で出土するが、特に7・9層が多い。

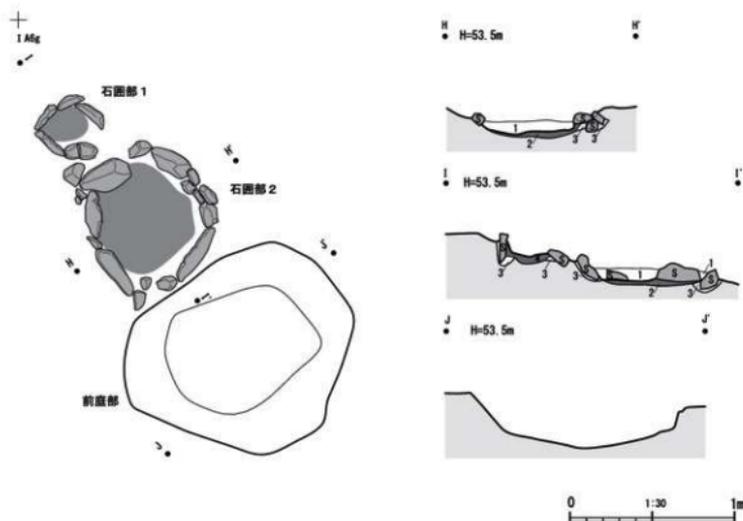
〈構成要素・付属施設〉構成要素はビット10個、付属施設は前庭部+石囲部+石囲部を有する複式炉1基がある。

〈ビット〉10個のうち、3個が建物内壁際に分布し浅い。それ以外の7個は主柱穴で、建物中央を囲むように配置される5個は大型で、複式炉前庭部の両脇にある2個は小型である。



第 14 図 3号竪穴建物 (1)

2 検出遺構



第15図 3号竪穴建物(2)

第8表 3号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色	調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
竪穴部	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	2	2	炭性性砂礫30% (西方向から流入)	
	2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	4	2	炭性性砂礫40% (人頭大礫数点含む)	
	3	10YR2/2	黒褐色	シルト	4	2	ϕ 1~5mm炭化物1%、炭性性砂礫3%	
	4	10YR3/1	黒褐色	シルト	4	2		
	5	10YR3/2	黒褐色	シルト	4	2	ϕ 1~5mm炭化物1%、炭性性砂礫5% (単大礫数点含む)	
	6	7.5YR3/2	黒褐色	シルト	3	2	焼土粒5%、黄褐色粘土10%	竪穴焼土
	7	10YR2/2	黒褐色	シルト	2	1	ϕ 1~10mm炭化物1%、炭性性砂礫10%、遺物多量	
	8	10YR3/3	暗褐色	シルト	2	1	炭性性砂礫20%	
	9	10YR3/2	黒褐色	シルト	5	1	黄褐色粘土10%、炭性性砂礫10%	
	10	10YR3/2	黒褐色	シルト	5	1	黄褐色粘土5%	9層類似
	11	10YR3/3	暗褐色	シルト	2	3		貼床土
竪1	1	7.5YR2/3	極暗褐色	シルト	2	1	ϕ 1cm炭化物1%、焼土粒20%	
	2	5YR3/2	暗赤褐色	シルト	2	4	炭化物粒5%	焼土層
	3	10YR3/3	暗褐色	シルト	2	2		設置痕
	4	5YR3/4	暗赤褐色	シルト	2	3	ϕ 1~2cm炭化物5%	焼土層
Pit1-7	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	2	1	炭化物粒1%	
	2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	4	2		
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	4	3		
Pit8	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	2	2		

第9表 3号竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構成
Pit1	0.48 × 0.45	52.58	主柱穴
Pit2	0.37 × 0.35	52.64	主柱穴
Pit3	0.43 × 0.40	52.57	主柱穴
Pit4	0.44 × 0.39	52.68	主柱穴
Pit5	0.51 × 0.50	52.56	主柱穴
Pit6	0.35 × 0.31	52.64	主柱穴
Pit7	0.30 × 0.27	52.51	主柱穴
Pit8	0.51 × 0.48	53.08	
Pit9	0.29 × 0.28	53.11	
Pit10	0.29 × 0.18	53.07	

〈炉1〉石囲部+石囲部+前庭部を有する複式炉である。2つの石囲部は北西部を石囲部1、南東部を石囲部2と呼称する。規模は、石囲部1:0.62×0.60m、石囲部2:1.30×1.22m、前庭部:1.80×2.22mである。石囲部1と石囲部2は掘りかた底面に比高差があり、石囲部1が高い。2箇所の石囲部は新旧関係を見い出せなかった。炉構築にあたっては石囲部全体を土坑状に掘り込む。炉石は、掘り込んだ土坑状範囲の壁面に押し当てるように配置されている。石囲部1・2とも炉石には基盤層の頁岩・粘板岩が使用され、板状礫を横長に立てて方形に配置している。石囲部1・2とも堆積土の赤化は明瞭である。前庭部には2号竪穴建物複式炉前庭部に見られるような特殊ピットは存在しない。

〈重複関係〉堆積土で判断できた重複関係はない。ただし、配置から2・5号竪穴建物との重複が想定される。

〈遺物分布〉遺物量は多く、堆積土から万遍なく出土するが、特に堆積土下部～床面で多い。遺物の大半はⅢD群土器で、堆積土上部に1点赤色顔料の塗布された浅鉢と考えられるⅢE群土器が出土している。

〈遺物〉ⅢD・ⅢE群土器、石器が出土した。

【縄文土器】11・14・17・18・20～23はⅢD群の深鉢、19はⅢE群土器浅鉢である。ⅢD群土器新段階は区画文帯をもち、区画が逆U字やH字状となり、磨消しで文様を描くことを特徴とする。本遺構出土土器は容量に関わらず口縁外反の器形が主体を占め、口縁内弯は少ない。

〈遺構の性格〉その規模から居住施設と考えられる。

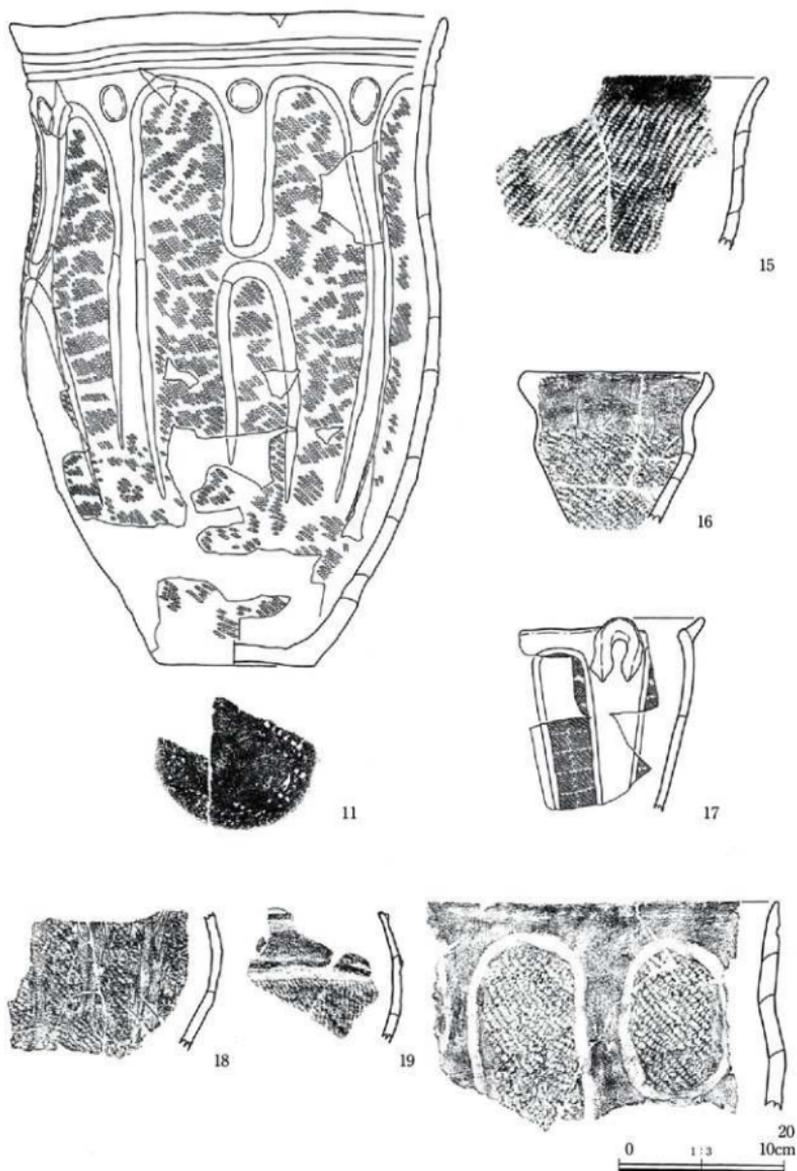
〈時期〉遺構の特徴と床面出土遺物から縄文時代中期後葉の大木9式土器期新段階である。

4号竪穴建物 (第18～21図、写真図版9・10・16)

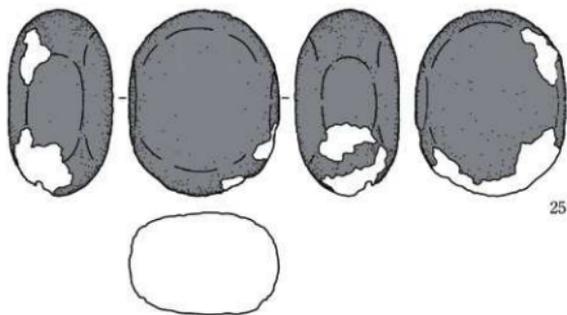
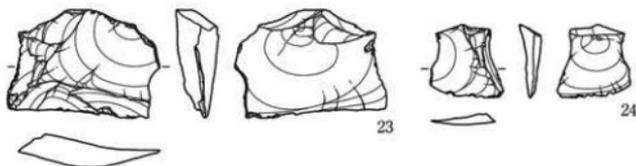
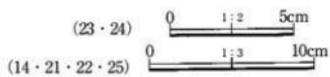
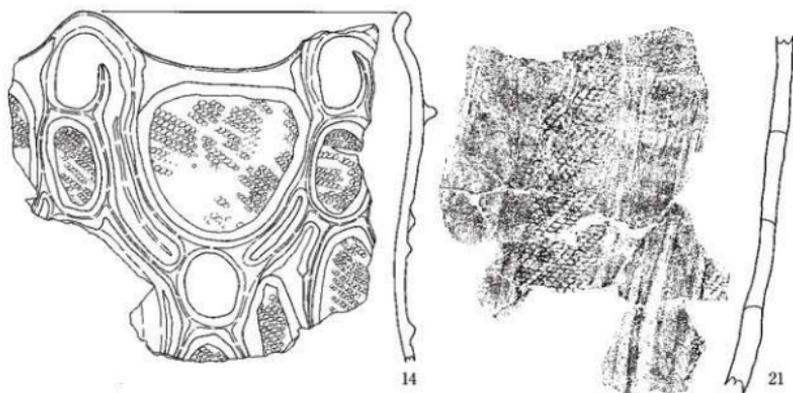
〈検出状況〉I A7fグリッド、X=-87070、Y=89042付近に位置する。Ⅲ・Ⅳ層掘削時に平成26年度試掘調査時のトレンチで確認されたプランを検出した。

〈規模・形状〉残存規模は3.65×3.46mで平面形は不整形である。残存床面積は8.16㎡である。床面はV層まで掘り込まれて構築されている。複式炉前庭部が建物外に張り出している。複式炉が2基あることから、本遺構は建物が2棟重複している可能性があると考え、北側にトレンチを複数設置して堆積状況を確認したが、重複する建物を見いだせなかった。

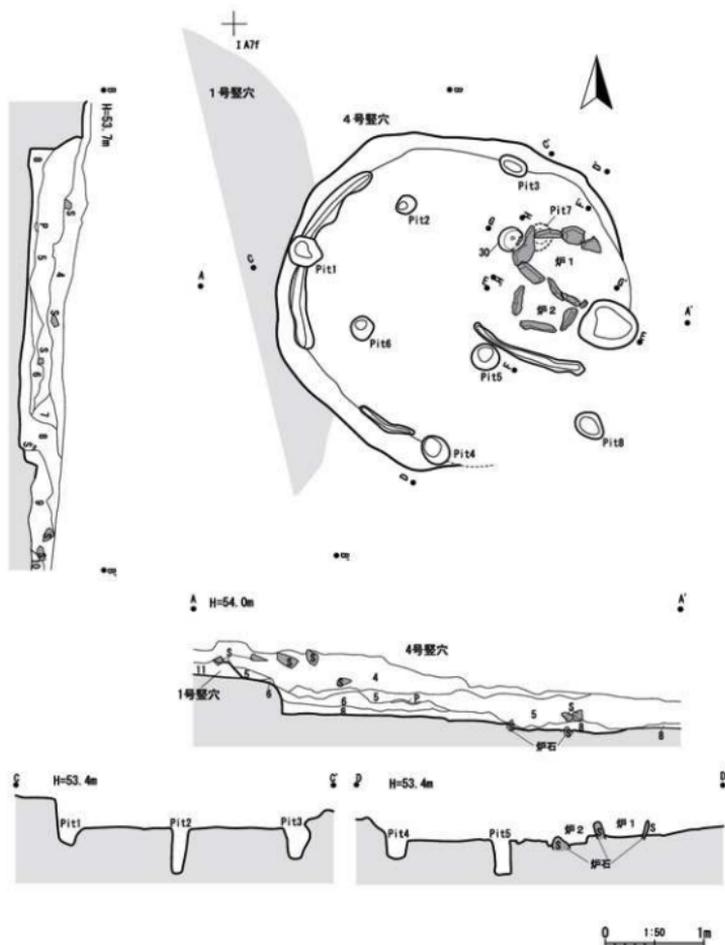
〈堆積土〉2・5号竪穴建物との重複関係を堆積土からは判断できなかった。1・4号竪穴建物の堆積を観察し、周辺部も含めて11層に区分した。11層が1号竪穴建物堆積土、10層が建物外の南部に堆積する層、5～9層が建物内堆積土、1～4層が1・4号建物全体を覆う層である。1号竪穴建物堆積の11層を本遺構5層が切っている。



第16図 2・3号壜穴建物出土遺物



第17図 3号竪穴建物出土遺物(2)

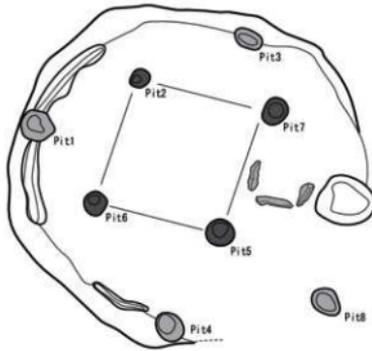


第18図 4号壁穴建物(1)

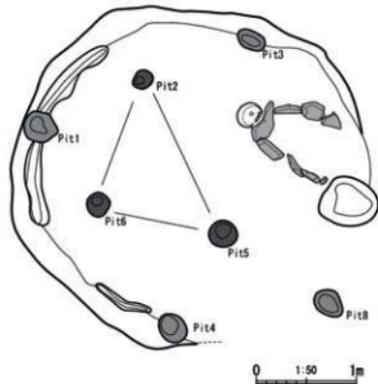
〈構成要素・付属施設〉構成要素はピット10個と壁溝、付属施設は複式炉2基があり、複式炉は北側を炉1（土器埋設部+石囲部）、南側を炉2（石囲部+前庭部）として報告する。

〈ピット〉10個のうち、3個が建物内壁際に分布し浅い。それ以外の7個は主柱穴で、建物中央を囲むように配置される5個は大形で、複式炉前庭部の両脇にある2個は小形である。ピットの配置と炉1・2の重複から、建物中央の4個が炉2機能時の主柱穴である。炉2を廃して炉1が機能する

炉1使用段階



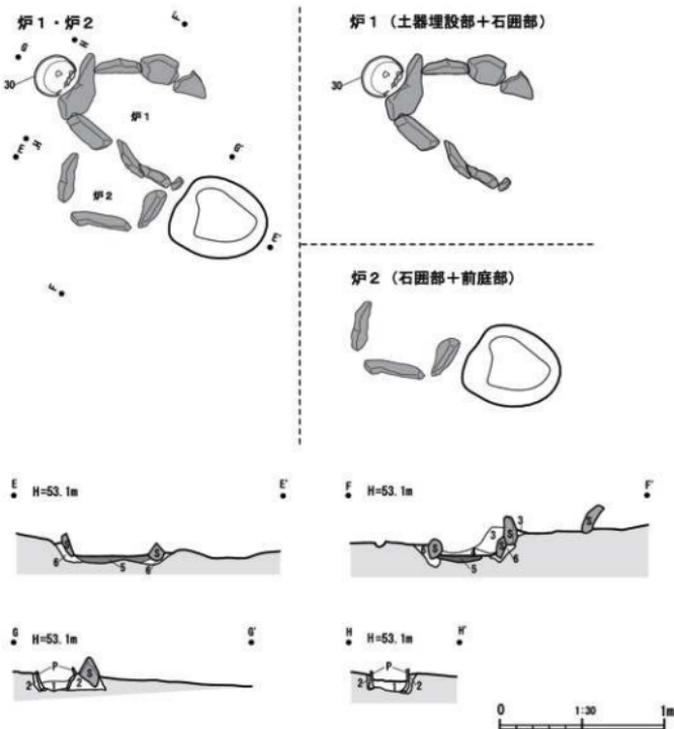
炉2使用段階



第19図 4号竪穴建物(2)

第10表 4号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色	調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
1・4号 竪穴	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	2	1	φ1~3cm炭維性礫20%	斜面上方からの流入土
	2	10YR2/2	黒褐色	シルト	3	1	φ1~3cm炭維性礫1%が水平堆積、炭化物粒3%	斜面上方からの流入土
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	4	3	φ1cm炭維性礫5%	斜面上方からの流入土
	4	10YR3/2	黒褐色	シルト	1	2	φ10~15cm炭維性礫20%、炭化物粒1%	斜面上方からの流入土
4号竪穴	5	10YR3/2	黒褐色	シルト	4	1	炭維性礫?	
	6	10YR2/3	黒褐色	シルト	3	2	炭維性礫?, 炭化物粒1%、遺物包含	
	7	10YR2/2	黒褐色	シルト	3	1	炭維性礫?, 炭化物粒1%、焼土粒1%	
	8	10YR2/3	黒褐色	シルト	3	1	φ1cm炭維性礫3%、黄褐色土粒10%	
	9	10YR3/2	黒褐色	シルト	3	1	φ10~15cm炭維性礫2点(斜位)	床面直上の堆積土
	10	10YR2/2	黒褐色	シルト	3	3	φ1~3cm炭維性礫1%	
4号竪穴 炉1・2	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	2	2	炭化物粒3%、焼土粒3%	
	2	10YR2/2	黒褐色	シルト	2	2	焼土粒1%	設置痕
	3	10YR2/3	黒褐色	シルト	2	3	炭化物粒1%、焼土粒1%	炉1の使用面は清掃されたか?
	4	10YR2/2	黒褐色	シルト	2	3	炭化物粒3%、焼土粒10%	
	5	5YR3/2	暗赤褐色	シルト	3	3	炭化物粒1%	
	6	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	3	2	焼土粒1%	設置痕



第20図 4号竪穴建物(3)

第11表 4号竪穴建物ビット計測表

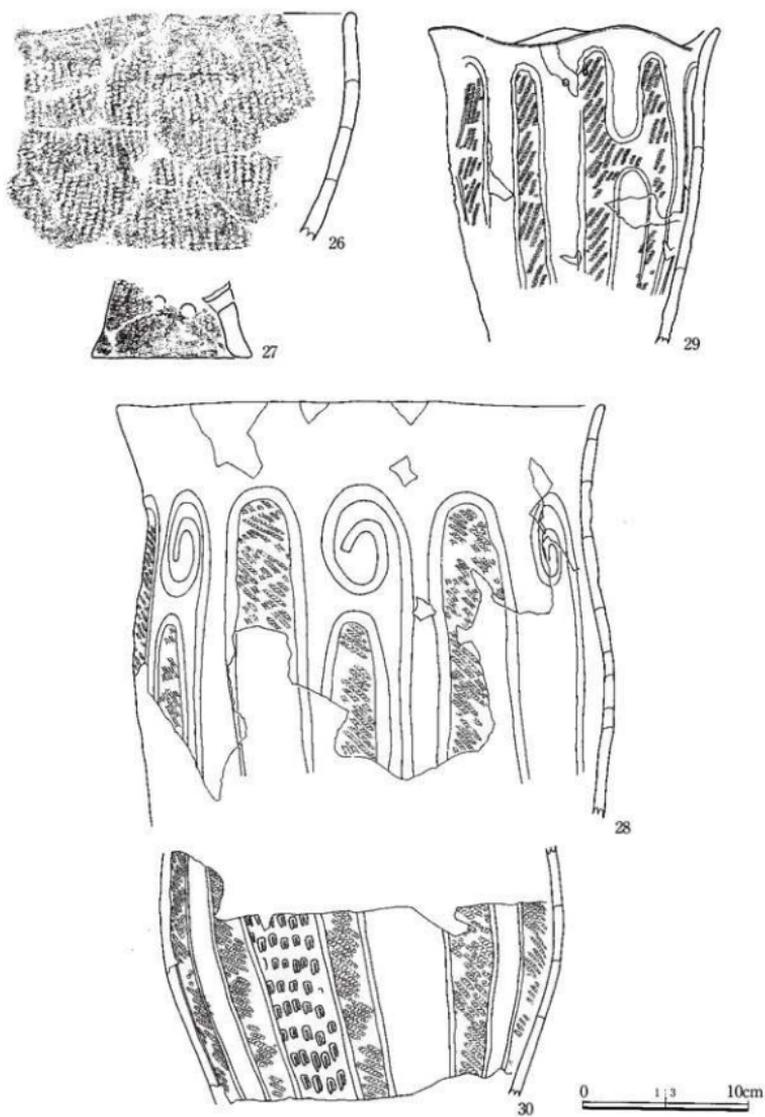
番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構成
Pit1	0.36 × 0.29	52.79	
Pit2	0.22 × 0.18	52.49	主柱穴
Pit3	0.31 × 0.18	52.65	
Pit4	0.32 × 0.27	52.65	
Pit5	0.30 × 0.28	52.48	主柱穴
Pit6	0.26 × 0.24	52.51	主柱穴
Pit7	0.29 × 0.25	52.53	主柱穴
Pit8	0.51 × 0.48	53.08	

ようになると、主柱穴1個が炉2の石囲部によって塞がれている。

〈炉1〉土器埋設部+石囲部の複式炉である。規模は土器埋設部0.46×0.40m、石囲部1.32×1.12mである。炉2よりも上位にあり、石囲部の南辺は炉1の炉石を再利用したと考えられる。断面観察では、炉1の炉石が炉2の上に設置されている(断面F・F')。炉1が本遺構の付属ではなく、別の建物に付属する可能性を想定し、建物北壁にトレンチを設置して堆積を確認したが見いだせなかった。従って炉

1は本遺構に付属し、炉2を造り変えたものと判断した。

〈炉2〉石囲部+前庭部を有する複式炉である。規模は石囲部1.02×0.70m、前庭部0.86×0.76mである。炉1よりも下位にあり、北側の炉石は抜き取られていた。それらは炉1構築時に再利用された可能性がある。



第21図 4号壺穴建物出土遺物

〈重複関係〉1号竪穴建物と重複し、これを切る。また、2号竪穴建物からの流出土を切る。このことから、新旧関係は1・2号竪穴→4号竪穴である。

〈遺物分布〉炉内とその周辺から出土している。

〈遺物〉ⅢD群土器が出土した。

【縄文土器】26～30はⅢD群土器で、26・28～30は深鉢、27は器台形土器である。ⅢD群土器新段階は区画文帯をもち、区画が逆U字やH字状を特徴とする。本遺構出土土器は口縁外反のものが主体を占め、口縁内弯は少ない。本遺構内出土土器では渦巻状のモチーフは認められない。28は破片の一部が2号竪穴建物堆積土上部、口縁～胴部の破片の大半が本遺構床面～堆積土下部出土である。これは4号竪穴建物使用時に2号竪穴建物が埋没過程にあったことを示しており、前記の重複関係(2号竪穴→4号竪穴)を支持する。30は土器埋設炉の炉体土器で、口縁部と底部を欠損する。LR縄文と刺突文を沈線で区画しており、焼成良好である。

〈遺構の性格〉不明である。規模から居住施設の可能性もあるが、居住施設とするには床面積が狭い。岩手県一戸町御所野遺跡の成果から、炉付き小型竪穴建物について燻製小屋の可能性が指摘されており、本竪穴建物も類似の用途が想定される。

〈時期〉遺構の特徴と床面出土遺物から縄文時代中期後葉の大木9式新段階である。

5号竪穴建物(第22・23図、写真図版11・17)

〈検出状況〉I A6g・I A6hグリッド、X=87064、Y=89048付近に位置する。3号竪穴建物の東側の調査区壁際で検出した。東側は調査区上段田面の縁にあたり、下段田面とは極端な比高差がある。宅地造成により、建物東半部は消失したと考えられる。

〈規模・形状〉調査区内残存規模は6.42×2.44mで、平面形は円形と考えられる。調査区内残存床面積は9.03㎡、平面形を円形と仮定した推定床面積は33.60㎡である。床面はV層まで掘り込まれて構築されている。

〈堆積土〉1～6層に区分した。5・6層は埋没初期に形成される三角堆積層、4層は広く床面を覆い、炭化物と焼土粒を多量に包含する。3層は焼土層である。2層と4層は焼土・炭化物包含量の差で分離した。焼土・炭化物の分布は典型的な火災建物の様相である。Pit 2は柱痕跡範囲に竪穴部の第2層が堆積している。竪穴部の堆積土と明確に分離できなかったため、Pit 2は火災後に柱部分が燃え残り、しばらくしてから自然と朽ちて柱上部に堆積していた2層の流入により埋没したと考えられる。1層は火災後に建物全体を覆うように堆積している。

〈構成要素〉ピット6個、壁溝がある。

〈ピット〉6個あり、そのうち3個は規模が大きい。この3個が主柱穴と考えられる。主柱穴は開口部径40～50cm、床面から深さ70～90cmを有する。Pit 1は自然堆積である。Pit 2の堆積は前述のごとく、火災後に燃え残った柱部が次第に朽ちて竪穴部第2層が流入している。Pit 3は内部が袋状に広がるが、抜取痕のような開口部が広いものではない。柱材が傾いたままでしばらく存在し、次第に朽ち果てた可能性がある。Pit 1～3の堆積状況から、火災後に燃え残った主柱穴が、Pit 3で傾きながらもしばらく存在し、次第に朽ちて自然埋没したと考えられる。

〈建物内溝〉壁溝が1条ある。

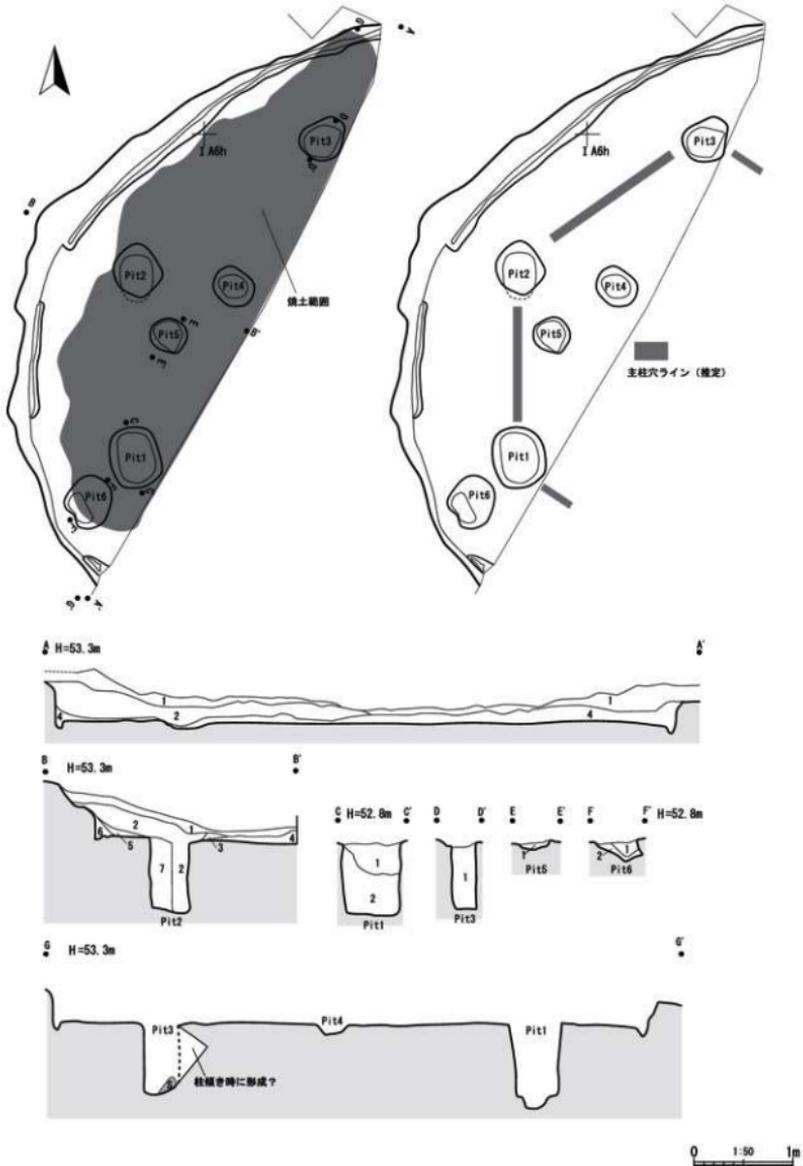
〈遺物分布〉堆積土内から微量出土する。

〈遺物〉ⅢD群土器と石器が出土した。

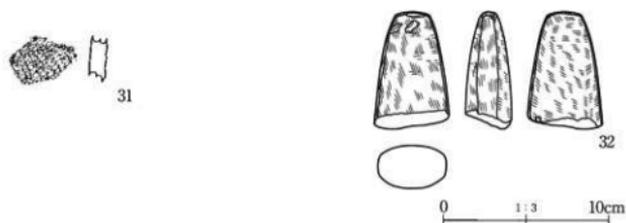
【縄文土器】31はⅢD群土器で、沈線による区画文をもつ。

【石器】32は磨製石斧で刃部を欠損する。

〈遺構の性格〉規模から居住施設と考えられる。



第22図 5号壱穴建物



第 23 図 5号竪穴建物出土遺物

第 12 表 5号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色	調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
竪穴部	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	4	1	φ 5cm炭維性礫 10%、φ 1cm炭化物 1%、焼土粒 3%	
	2	10YR2/3	黒褐色	シルト	4	1	焼土(火災?) 10%、炭化物板状 10%	
	3	5YR4/6	赤褐色	シルト	4	1		焼土層
	4	10YR2/2	黒褐色	シルト	4	1	厚さ 1 ~ 2cmの炭化材層が建物中央に面的に広がる	
	5	10YR3/2	黒褐色	シルト	4	2	φ 1 ~ 2cm炭維性礫 1%	
	6	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	4	2	φ 1 ~ 2cm炭維性礫 10%	
Pit1	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	2	1	炭化物粒 10%、焼土粒 10%	
	2	10YR3/3	暗褐色	シルト	4	1		
Pit2	2	10YR2/3	黒褐色	シルト	4	1		柱痕。火災後も残存し、2層が流入したと捉えた
	7	10YR2/2	黒褐色	シルト	4	3		
Pit3	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	4	1	炭化物粒 5%、焼土粒 30%	
Pit5	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	2	1	φ 1 ~ 2cm炭化物 5%、焼土粒 10%	
Pit6	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	3	1	炭化物粒 10%	
	2	10YR3/3	暗褐色	シルト	4	1	P1の2層に類似	

第 13 表 5号竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構成
Pit1	0.62 × 0.55	51.81	主柱穴
Pit2	0.57 × 0.52	51.94	主柱穴
Pit3	0.49 × 0.42	51.93	主柱穴
Pit4	0.45 × 0.36	52.50	
Pit5	0.39 × 0.38	52.52	
Pit6	0.52 × 0.50	52.37	

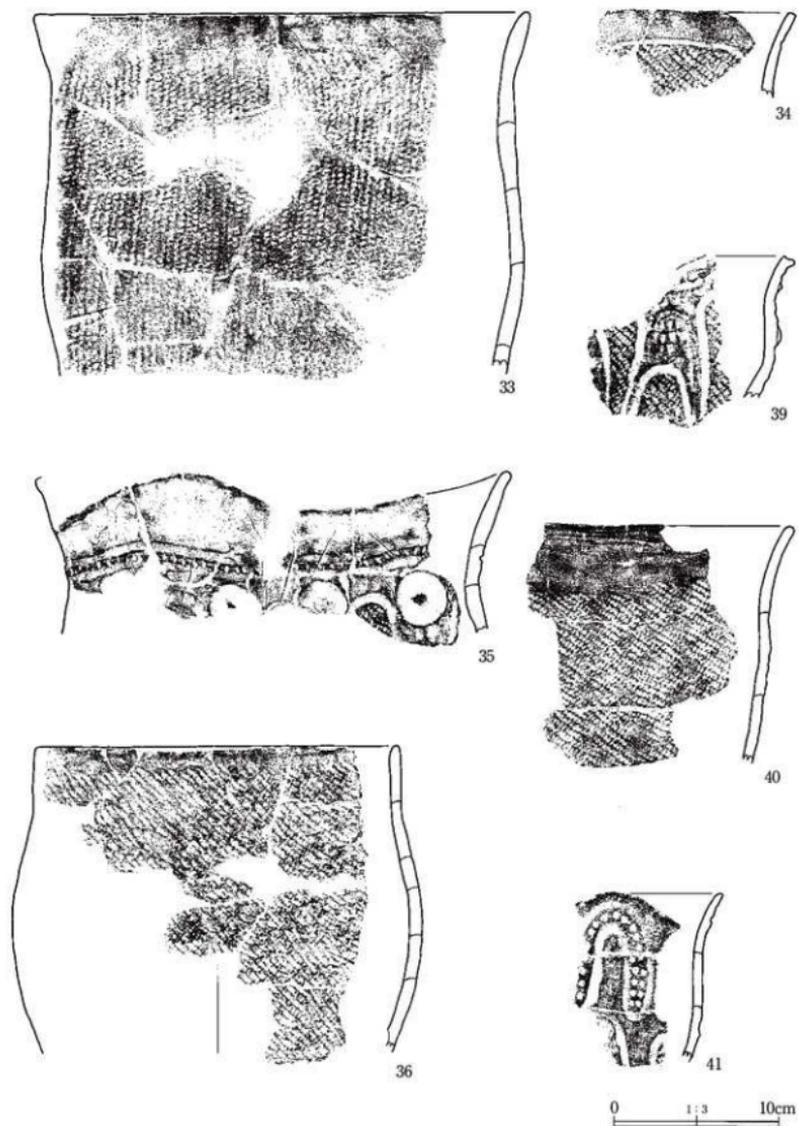
(時期) 遺構の特徴と出土遺物から縄文時代中期後葉の大木 9 式新段階である。

3 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器 (第24 ~ 28図、写真図版17 ~ 20)

33 ~ 68を図示した。I群土器は48、III群土器は33 ~ 47・49 ~ 68で、III群のうちIII D群土器は35・37・39 ~ 41・43 ~ 45・47・50・52 ~ 54・57・59・63 ~ 65・67・68、III E群土器は62である。

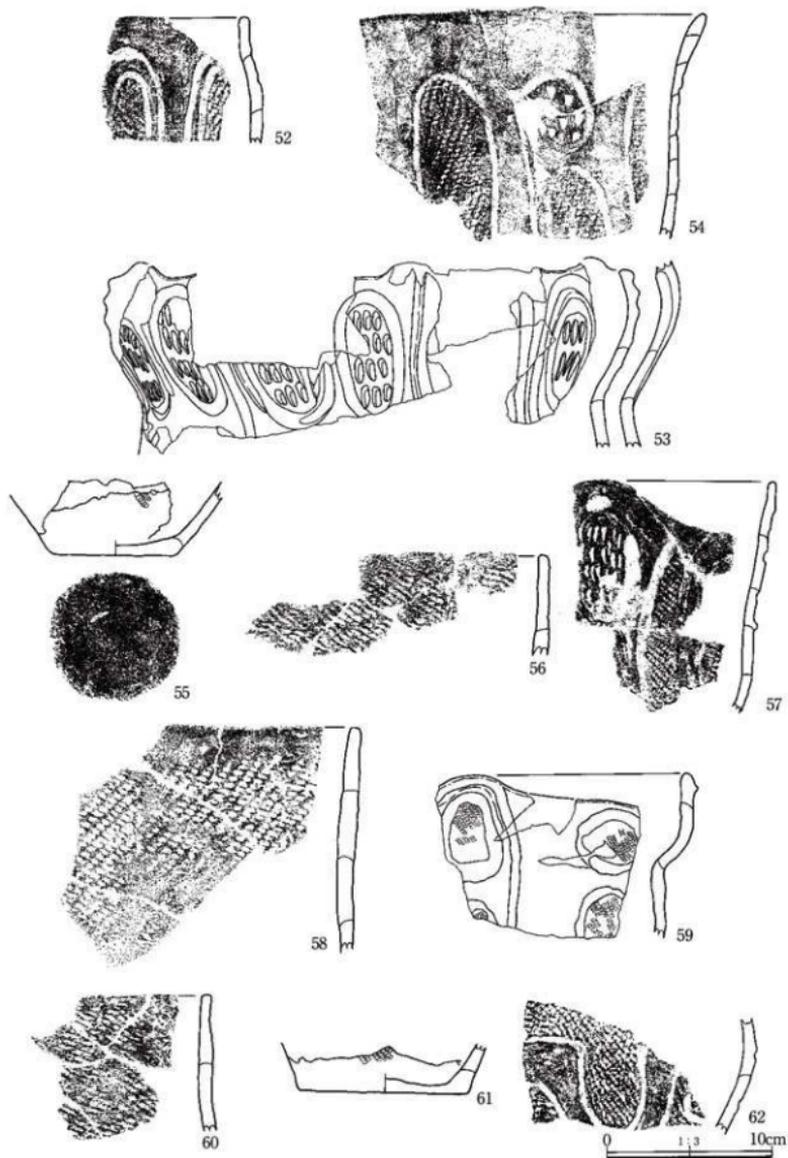
48は物見台式で貝殻縁文を施文する。III D群土器は沈線区画文様を磨消状手法で器面ナア調整を



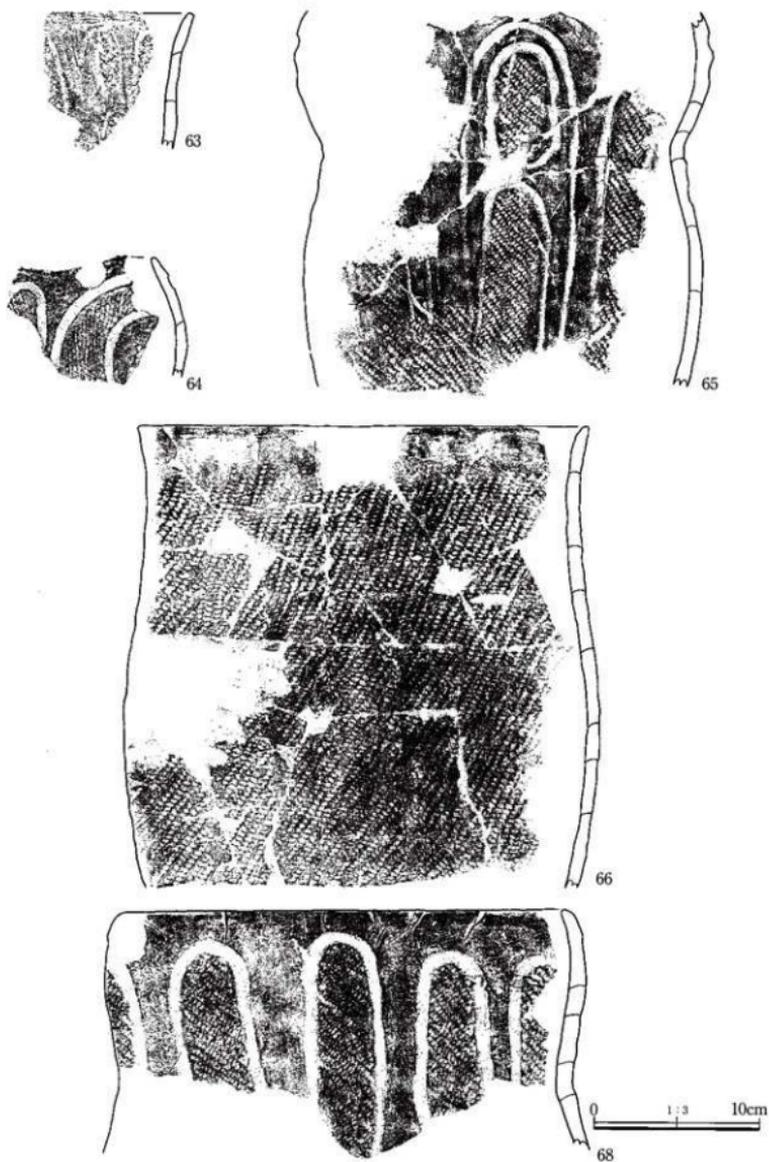
第24図 27年度遺構外出土遺物(1)



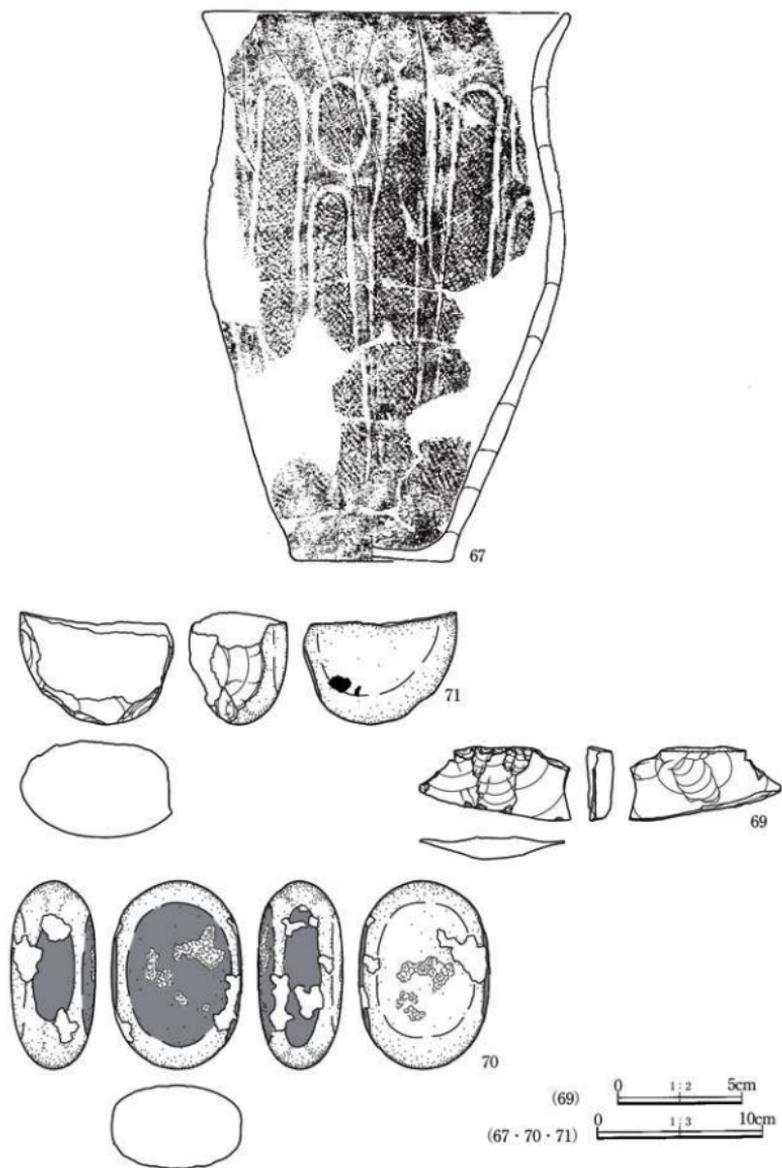
第25図 27年度遺構外出土遺物(2)



第26図 27年度遺構外出土遺物(3)



第27図 27年度遺構外出土遺物(4)



第28図 27年度遺構外出土遺物(5)

第14表 土器観察表(平成27年度)

層位 出土地点	層位	器種	残存部位	主要特徴・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	高さ cm	胎土	分類	備考
				外面	内面							
1 1号室	3層・P17	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ→北側区画→器面ナア	ナア ミガキ		(27.1)	[20.6]	砂粒多量	器D新		
2 1号室	埴輪土上部	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ→北側区画→器面ナア	ナア				砂粒多量、較径大	器D新		
3 1号室	14・17・18層、床面	深鉢	口縁~胴部	8単位流状口縁、LRタテ、斜突→北側区画(流U字、円形)→器面ナア	ナア		(27.0)	[25.9]	砂粒多量、較径大	器D新		
4 1号室	3・11層、床面	深鉢	口縁~胴部	平縁、Lタテ・斜→→口唇部器面ナア	ナア		(28.4)	[17.85]	砂粒多量、較径大 白色砂粒大	器D 器D新と同胎土		
5 1号室	11層、床面	深鉢	胴部~底部	胴部~底部	ナア	新代灰		10.0	[6.60]	砂粒多量、較径大	器D 器D新と同胎土	
6 1号室	トレナチ内	深鉢	胴部~底部	胴部~底部	ナア			7.0	[2.2]	砂粒多量、較径小	器D 器D新と同胎土	
7 1号室	11層、床面	深鉢	胴部~底部	LRタテ	ナア	新代灰		8.0	[11.6]	砂粒多量、較径大	器D 器D新と同胎土	
8 1号室	11層、床面	深鉢	口縁~胴部	8単位流状口縁、LRタテ→北側区画(口縁基部部に流急文、流U字、円形)→器面ナア	ナア		(25.5)	[24.35]	砂粒多量、較径大	器D新	上部にスズ、コブナー工器埋設の跡体土部分?	
10 2号室	床面	深鉢	口縁~胴部	平縁、口唇部角隅状、LRタテ→北側区画(流U字、流急文)→器面ナア	ナア		(26.85)	[27.3]	砂粒多量、較径小	器D新	胴部にスズ付着	
2号室	埴輪土上部	深鉢	口縁~底部	平縁、LRタテ→北側区画(日字状)、円文→器面ナア	ナア		26.4	9.2	39.95	砂粒多量、較径小	器D新	2号室埴輪土断片数点 3号床面断片55%
3号室	3・4・6層、床面	深鉢	口縁~胴部	8単位流状口縁、LRタテ→流急文(流急)、流急区画(流円形)→器面ナア	ナア			[21.3]	砂粒多量、較径大	器D新		
14 3号室	埴輪下部	深鉢	口縁~胴部	平縁、RLタテ→口唇部器面ナア	ナア				砂粒多量、較径小	器D 器D新と同胎土		
15 3号室	埴輪土	深鉢	胴部	平縁、RLタテ→口唇部器面ナア	ナア				砂粒多量、較径小	器D		
16 3号室	床面	深鉢	口縁~胴部	平縁、RLヨコ→口唇部器面ナア	ナア		11.0	[9.2]	砂粒多量、較径小	器D	器D新と同胎土	
17 3号室	床面	深鉢	口縁~胴部	平縁、口唇部突起粘付文、LRタテ→北側区画(流U字)→器面ナア	ナア			[11.3]	砂粒多量、較径小	器D新		
18 3号室	埴輪土	深鉢	胴部	LR?タテ→器面ナア	ナア				砂粒多量、較径五 極小	器D~ 器E		
19 3号室	埴輪土上部	浅鉢	胴部	赤色顔料塗布、LRタテ→器面区画→器面ナア	ナア				砂粒多量、較径五 極小	器E		
20 3号室	埴輪土	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ→北側区画(円形)→器面ナア	ナア				砂粒多量、較径小	器D新		
21 3号室	埴輪土、床面	深鉢	胴部	RLRタテ→北側区画→器面ナア	ナア				砂粒多量、較径大	器D新		
22 3号室	埴輪土中部	深鉢	口縁	平縁、単部周文→流急→器面ナア	ナア				砂粒多量、較径小	器D新		
26 4号室	埴輪土	深鉢	口縁~胴部	平縁、RLR斜→口唇部器面ナア	ナア				砂粒多量、較径小、 白色砂粒多量	器D新		
27 4号室	埴輪土	器台	胴部~底部	単部粘集体1個→円形通かし孔4個以上	ナア		(9.8)	[3.7]	砂粒多量、較径小	器D新		

第14表 土器観察表(平成27年度)

観測 位置	出土地点	層位	器種	発祥部位	主な刻痕・特徴		底面	口縁 cm	底径 cm	胎土	分類	備考
					外面	内面						
2号型	地積土上部	28	深鉢	口縁~脚部	平縁、LRタテ→北縁区画(造U字・8単位渦巻状)→器面ナテ	ナテ	29.6	[52]	砂粒多量、粒径大	ⅢD新	2号型埴土上部破片散見 +4号型埴土~地積土で破片少量	
												床面
4号型	床面						17.6	[153]	砂粒多量、粒径小	ⅢD新	焼成良	
4号型	地積土			脚部	LRタテ、斜突→北縁区画→器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
4号型	床面、土器埋没部			脚部	LRタテ→沈濁→器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径大	ⅢD新		
5号型	地積土			脚部	LRタテ→沈濁→器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径大	ⅢD新		
33	I A7e	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、車輪跡全体1単位巻き、口縁部器面ナテ	ナテ	30.0	[221]	砂粒多量、粒径小	ⅢD新	1号型穴を覆う層出土	
34	I A6f	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	口縁部角頂状、平縁、LRタテ→沈濁区画→器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径小	ⅢD新	2・3号型穴を覆う層出土	
35	I A6g	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	4単位波状口縁、LRタテ、斜突別、並行波線→沈濁区画(渦巻状)→器面ナテ	ナテ	(28.8)	[97]	砂粒多量、粒径小	ⅢD新	4号型穴を覆う層出土	
36	I A7e	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、LRタテ	ナテ	(22.0)	[187]	砂粒多量、粒径大	ⅢD新	1号型穴を覆う層出土	
37	I A6f	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、RLRタテ→北縁区画(円形?)→器面ナテ	ナテ	(30.0)	[91]	砂粒多量、粒径大	ⅢD新	2・3号型穴を覆う層出土	
38	I A7e	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、RLタテ	ナテ	(21.6)	[70]	砂粒多量、粒径大	ⅢD	1号型穴を覆う層出土	
39	I A7e	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、LRタテ、斜突→隆帯+北縁区画→器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径小	ⅢD新	1号型穴を覆う層出土	
40	I A7e	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、LRタテ→口縁器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径大	ⅢD新	1号型穴を覆う層出土	
41	I A7f	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、LRタテ→北縁区画(造U字状)、円形斜突 北縁→器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径小	ⅢD新	1号型穴を覆う層出土	
42	I A8d	Ⅲ	深鉢	底部		ナテ	10.0	[30]	砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
43	I A8d	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	4単位波状口縁、RLRタテ→北縁区画(造U字状)→器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
44	I A8d	Ⅲ	深鉢	口縁~底部	平縁、RLRタテ→北縁区画(造U字)→器面ナテ	ナテ	(12.0)	(5.4)	10.1	砂粒多量、粒径小	ⅢD新	
45	I A8d	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、LRタテ→器面ナテ	ナテ	(18.0)	[154]	砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
46	I A9c	Ⅲ	深鉢	脚部~底部	LRコ→器面ナテ?	ナテ		9.5	[90]	砂粒多量、粒径大	ⅢD	
47	上段円面	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	平縁、LRタテ→北縁区画→器面ナテ	ナテ			砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
48	II A1c	Ⅲ	深鉢	口縁~脚部	貝殻埋没文、貝殻波文	ナテ			砂粒多量、粒径大	I	早期中壺~底半	
49	I A8d	Ⅲ	深鉢	脚部~底部	LRタテ→器面ナテ	ナテ		6.0	[60]	砂粒多量、粒径小	ⅢD新	

第14表 土器観察表(平成27年度)

標記 出土地点	層位	高 種	残存部位	主立形態・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	高さ cm	胎土	分類	備 考
				内 面	外 面							
50	上段田面	深鉢	胴部~底部	LRタテ→沈瀬区画→器面ナテ			(7.0)	[5.5]		砂粒多量、粒径小	Ⅲ D新	
51	I A7f	深鉢	胴部~底部				8.0	[5.6]		砂粒多量、粒径小	Ⅲ D~ Ⅲ E	4号壺穴を置う層出土
52	I A8e	深鉢	口縁~胴部	平鉢、RLタテ、ヨコ→二重沈瀬区画→器面ナテ						砂粒多量、粒径小	Ⅲ D新	1号壺穴を置う層出土
53	I A7e	深鉢	口縁~胴部	※単位波状口縁、削突→沈瀬区画→器面ナテ			(31.8)	[11.4]		砂粒多量、粒径大	Ⅲ D新	1号壺穴を置う層出土
54	I A9f	深鉢	口縁~胴部	平鉢、RLRタテ→沈瀬区画→器面ナテ						砂粒多量、粒径小	Ⅲ D新	
55	I A9f	深鉢	胴部~底部	LRタテ			7.3	[4.5]		砂粒多量、粒径小	Ⅲ D~ Ⅲ E	
56	I A9f	深鉢	口縁~胴部	平鉢、Lタテ						砂粒多量、粒径小	Ⅲ D~ Ⅲ E	
57	I A9f	深鉢	口縁~胴部	波状口縁、LRタテ→沈瀬区画、爪形削突→残帯区画→器面ナテ						砂粒多量、粒径小	Ⅲ D新	
58	I A9f	深鉢	口縁~胴部	平鉢、RLタテ						砂粒多量、粒径小	Ⅲ D~ Ⅲ E	
59	I A9f	深鉢	口縁~胴部	波状口縁、LRタテ→沈瀬・残帯区画→器面ナテ					[10.1]	砂粒多量、粒径大、 赤色砂粒有	Ⅲ D新	
60	I A9f	深鉢	口縁~胴部	平鉢、Lタテ→器面ナテ?						砂粒多量、粒径小	Ⅲ D~ Ⅲ E	
61	I A8f・ 9f	深鉢	底部	LRタテ			10.0	[3.1]		砂粒多量、粒径小	Ⅲ D~ Ⅲ E	
62	I A8f	深鉢	胴部	LRタテ→沈瀬区画→器面ナテ						砂粒多量、粒径小	Ⅲ E	
63	I A5g	深鉢	口縁~胴部	平鉢、LRタテ→沈瀬区画→器面ナテ						砂粒多量、粒径小	Ⅲ D新	3号壺穴を置う層出土
64	I A6h	深鉢	口縁~胴部	波状口縁、Lタテ→沈瀬区画→器面ナテ						砂粒多量、粒径大	Ⅲ E	5号壺穴を置う層出土
65	I A7e	深鉢	口縁~胴部	※単位波状口縁、LRタテ→沈瀬区画→器面ナテ					[22.0]	砂粒多量、粒径大	Ⅲ D新	1号壺穴を置う層出土
66	I A8f	深鉢	口縁~胴部	平鉢、RLタテ→口縁器面ナテ			(27.4)	[28.2]		砂粒多量、粒径大	Ⅲ D~ Ⅲ E	
67	I A9f	深鉢	口縁~底部	平鉢、LRタテ→沈瀬区画(透U字状、H字状)→器面ナテ			(22.85)	9.3	33.5	砂粒多量、粒径大	Ⅲ D新	
68	I A8e	深鉢	口縁~胴部	平鉢、LRタテ→沈瀬区画(透U字状)→器面ナテ			(26.6)		[14.7]	砂粒多量、粒径大	Ⅲ D新	

第15表 石器類調査(平成27年度)

発掘 出土地点	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	産地	備考
9	1号壜 埋積土上部	削器	頁岩	7.06	4.57	1.68	47.30	北上山地 古生代	へう状
12	2号壜 埋積土下部	削片	頁岩	3.35	4.42	0.78	7.50	北上山地 古生代	
13	2号壜 床面	磨石	砂岩	10.01	9.08	4.13	548.40	北上山地 古生代	
23	3号壜 埋積土中部	削片	頁岩	3.31	4.61	1.28	13.80	北上山地 古生代	
24	3号壜 埋積土上部	削片	頁岩	2.22	2.21	0.65	1.80	北上山地 古生代	
25	3号壜 埋積土	磨石	花崗閃緑岩	11.41	9.11	6.30	976.40	北上山地 中生代白堊紀	
32	5号壜 PI埋積土	磨石石斧 磨石	花崗閃緑岩	7.16	4.51	2.79	133.70	北上山地 中生代白堊紀	刃部欠損
69	I A7e IV	削片	頁岩	2.26	4.59	0.79	6.50	北上山地 古生代	1号壜穴を覆う埋積層出土
70	I A5g IV	敲磨器	閃緑岩	11.47	7.90	5.11	782.70	北上山地 中生代白堊紀	3号壜穴を覆う埋積層出土
71	I A8f IV	磨石	ひん岩	6.85	9.28	5.93	473.70	北上山地 中生代白堊紀	

行う段階の土器で、文様帯が縦位に展開し、逆U字状やH字状の沈線文様が施文される。ⅢE群土器の62は文様が横位に展開する。

(2) 石器(第29図、写真図版20)

69は頁岩製横長削片で末端がヒンジフラクチャーとなる。70は敲磨器で、扁平亜円礫の正裏面中央に敲打痕が残る。71は磨石である。

V 平成28・29年度調査

1 概 要

平成28年度は350㎡、平成29年度は1,142㎡を調査した。検出遺構は竪穴建物8棟、土坑1基、焼土1基、埋設土器1基である。これらは縄文時代中期後葉に帰属し、平成27年度調査区と同様、出土土器はⅢD群～ⅢE群が主体である。

出土遺物は、縄文土器（早期、中期後葉、後期前葉）大コンテナ5箱、石鏃、剥片、磨石、石皿磨製石斧等で大コンテナ1箱である。

2 検 出 遺 構

(1) 竪 穴 建 物

8棟の調査を行った。帰属時期は縄文時代中期後葉～末である。

6号竪穴建物（第29～33図、写真図版23・24・33～36）

〈検出状況〉I A3e・3f・4e・4fグリッド、X=-87052、Y=89040付近に位置する。重機によるⅢ層掘削時にⅣ層面で弧状のプランを検出した。サブトレンチを設定して確認をしたところ、平坦な面と壁の一部が確認できたため、SI21として登録した。平成27年度の調査区境で確認されており、工事との関係で、西側半分の調査を先に行い、東側半分は準備が整い次第調査を行った。断面階で1・2層の立ち上がりと同調的な暗褐色のプランが確認でき、2棟が重複している可能性が想定された。そこで、東側の精査をする際に、1棟か2棟かの確認を行ったところ、明瞭な床面の差が確認できたため、当初精査した古い段階を6号竪穴建物a（SI21a）、内側の新しい段階の竪穴住居を6号竪穴建物b（SI21b）とした。6号竪穴建物bの床面で炉を確認している。

6号竪穴建物b

〈規模・形状〉東側は過年度調査区へ広がっている。残存規模は5.26×5.00mで、確認できた平面形は円形もしくは多角形基調である。残存床面積は18.31㎡である。床面はⅤ層まで掘り込まれて構築されている。

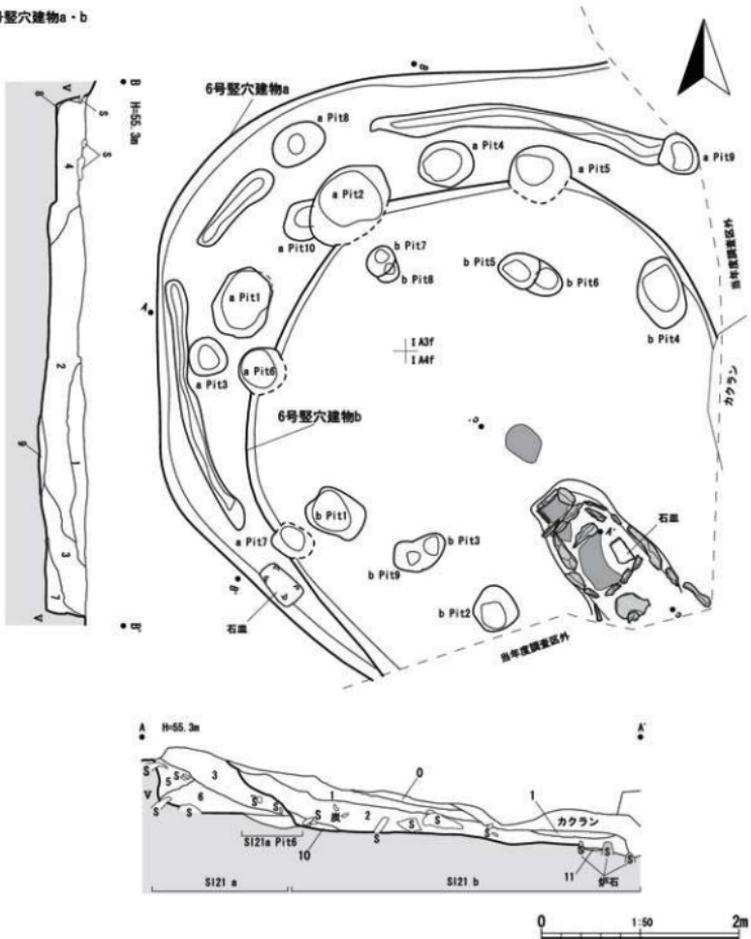
〈堆積土〉4層に区分した。10層は壁際に三角形に堆積する初期の堆積層である。最初の段階では認識できなかった堆積層である。0～2層は礫を含むⅢ層起源の堆積土でレンズ状の堆積状況を呈し、自然堆積の可能性が高い。

〈構成要素〉ピット9個、炉1基を有する。

〈ピット〉炉の延長線上にbPit 7・8があり、そのラインを中心に対称的に配置されている。少なくともbPit 1とbPit 4が支柱穴の可能性が高い。

〈炉1〉石囲部+石囲部+石囲部+前庭部を有する複式炉である。北から順に石囲部1、石囲部2、石囲部3、前庭部と呼称する。規模は、石囲部1:0.30×0.39m、石囲部2:0.26×0.62m、石囲部3:0.65×0.83m、前庭部:(0.85)×(0.93)mである。前庭部の南側はカクランにより消失したと考えられる。石囲部1と石囲部2・3は掘形底面に比高差があり、石囲部1のほうが高い。石囲部1には焼土層が2枚あり、下位の焼土層は石囲部2に及んでいない。これを根拠とすると、石囲部2は石囲部1の再区画によって生じたと考えられる。7～9層を6層で埋め立ててから炉石を設置して石囲部1が形成されている。石囲部1の使用によって5層が形成される。炉構築にあたっては石囲部全体を土坑状に掘り込む。炉石は、掘り込んだ土坑状範囲の壁面に押し当てるように配置されている。石

6号竪穴建物a・b

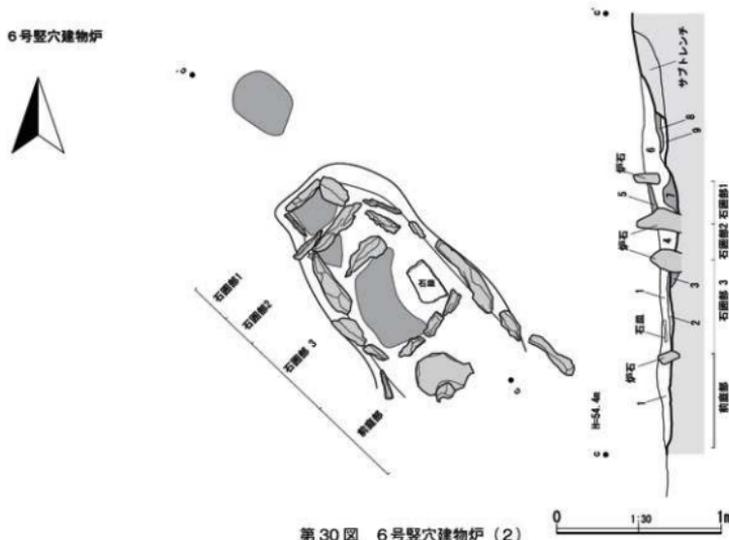


第29図 6号竪穴建物(1)

囲部1・2とも炉石には基盤層の頁岩・粘板岩が使用され、板状礫を横長に立てて方形に配置している。石囲部堆積土の赤化は明瞭である。前庭部には2号竪穴建物複式炉前庭部で確認された特殊ピットは認められない。

第16表 6号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他	
竪穴 b	0	10YR3/2 黒褐色	シルト	0	2			
	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	0	2	炭化物粒 3～5%・小礫含む。		
	2	10YR3/2 ～3/3 黒褐色～暗褐色	シルト	3	2	炭化物粒 1～2%・橙色粒 1～2%・φ 5～10cmの礫多く含む(Ⅱ層起源の崖線性堆積物層)		
	10	10YR3/3 暗褐色	シルト	4	2	炭化物粒 1%・φ 5～15cmの礫含む		
	11	10YR2/3 黒褐色	シルト	4	2	炭化物 5～7%含む(炉堆積土)		
竪穴 b・Pit1	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	5	4	10YR4/3 におい黄褐色土ブロック 1%		
竪穴 b・Pit2	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	5	4	炭(φ 1～2mm) 1%・小礫 10%		
竪穴 b・Pit3	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	5	4	炭(φ 1～3mm) 3%		
竪穴 b・Pit4	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	5	4	-		
竪穴 b・Pit5	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	5	4	炭(φ 1～10mm) 3%		
竪穴 b・Pit6	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	5	4	10YR4/3 におい黄褐色土ブロック 1%		
竪穴 b・Pit7	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	5	4	小礫 3%		
竪穴 b・Pit8	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	5	4	10YR4/3 におい黄褐色土ブロック 3%・小礫 1%		
竪穴 b・Pit9	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	5	4	10YR4/3 におい黄褐色土ブロック 3%・炭(φ 1～2mm) 1%・小礫 1%		
竪穴 a	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	4	2	炭化物粒 1～2%・φ 10cm前後の礫多く含む(Ⅱ層上部? 起源の崖線性堆積物層)		
	4	10YR2/2 黒褐色	シルト	3	2	炭化物粒 1%・φ 5～10cm中心の礫含む(Ⅱ層起源の崖線性堆積物層)		
	5	10YR4/4 褐色	シルト	4	3	黒褐色シルトブロック 10～15%・礫を多く含む(地山流入土層もしくは壁崩落土層)		
	6	10YR2/3 黒褐色	シルト	3	3	φ 2～5cmの礫多く含む(崖線性堆積物層)		
	7	10YR2/3 黒褐色	シルト	3	3	暗褐色シルトブロック 5%・φ 3～5cmの礫含む(Ⅱ層上部起源)		
	8	2.5Y4/3 オリーブ褐色	シルト	4	3	φ 1～2cm中心の礫含む(Ⅳ～Ⅴ層起源。地山流入土層)		
	9	10YR4/3 におい黄褐色	シルト	4	1	黒褐色シルト小ブロック 10～15%・φ 1～2cm中心の礫を多く含む(人為的)		
	竪穴 a・Pit1	1	10YR4/3 におい黄褐色	シルト	-	-	V層小ブロック 7～10%・礫含む。	
	竪穴 a・Pit2	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-	V層小ブロック 3～5%・礫含む。	
竪穴 a・Pit3	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	5	4	炭(φ 1～3mm) 1%		
	2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	5	4	-		
竪穴 a・Pit14	1	10YR3/3 と 10YR4/2	暗灰褐色と灰黄褐色の混合	シルト	5	4	-	
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	5	4	-		
竪穴 a・Pit5	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	5	4	炭(φ 1mm) 1%		
竪穴 a・Pit6	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	5	4	炭(φ 1～3mm) 3%		
竪穴 a・Pit7	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	5	4	小礫 10%		
竪穴 a・Pit8	1	-	-	-	-	-		
竪穴 a・Pit9	1	-	-	-	-	-		
竪穴 a・Pit10	1	-	-	-	-	-		
竪	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	5	2	炭化物粒(φ 5～10mm) 3%。(前庭部～西面部 3までを覆う層)		
	2	2.5Y2/1 黒色	シルト	5	4	(炭化物層) 下位が焼け面 炭化物 80%		
	3	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	5	2	(焼土層) 炭化物粒(φ 5～10mm) 1%。(1層に似る)		
	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	5	2			
	5	5YR4/4 におい赤褐色	シルト	5	4	(焼土層) 炭化物(φ 5～10mm) 10%		
	6	10YR4/3 におい黄褐色	粘土	5	4	(粘土:古い卵を埋めた土) 炭化物(φ 5mm) 3%		
	7	5YR2/4 極暗赤褐色	粘土	5	4	炭化物(φ 5～10mm) 20% (8層に類似)		
	8	5YR3/3 暗赤褐色	粘土	5	4		7層類似	
	9	10YR2/1 黒色	シルト	0	1	(炭化物層) 炭化物が粘土と混合しベースト状となる		



第17表 6号a竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構 成
Pit1	0.73 × 0.56	54.08	
Pit2	0.94 × 0.48	54.00	
Pit3	0.41 × 0.40	53.99	
Pit4	0.57 × 0.48	54.02	
Pit5	0.64 × 0.58	53.94	
Pit6	0.50 × 0.45	53.95	
Pit7	0.41 × 0.32	54.00	
Pit8	0.56 × 0.36	54.27	
Pit9	0.44 × 0.37	54.18	
Pit10	0.47 × 0.35	54.18	

第18表 6号b竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構 成
Pit1	0.61 × 0.47	53.81	
Pit2	0.47 × 0.46	53.79	
Pit3	0.40 × 0.32	53.84	
Pit4	0.71 × 0.43	53.70	
Pit5	0.43 × 0.38	53.80	
Pit6	0.39 × 0.37	53.87	
Pit7	0.33 × 0.26	53.97	
Pit8	0.26 × (0.19)	53.93	
Pit9	0.37 × 0.30	53.91	

〈重複関係〉前述の通りで、6号竪穴建物aを切る。

〈遺物分布〉全体的に遺物量が少なく、その大半は埋土上位から出土している。

〈遺物〉ⅢD・ⅢE群土器、敲磨器、磨石、磨製石斧などが出土した。

【縄文土器】6号建物内出土資料として図示した72～84のうち、79～83のⅢE群が本建物範囲に纏まる。27年度調査区3号竪穴建物堆積土からⅢE群土器が出土しており、遺構配置関係から本建物帰属資料の可能性が考えられる。

【石器】6号建物内出土資料として図示した86～95のうち、本建物範囲から敲石 (89)、磨石 (90・91)、石皿 (92～94) が出土している。

〈遺構の性格〉複式炉を伴い、床面積も十分な広さがあることから居住施設と考えられる。

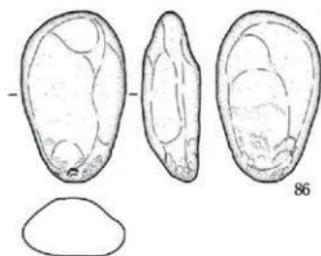
〈時期〉ⅢE群の存在から、縄文時代中期末の大本木10式期である。



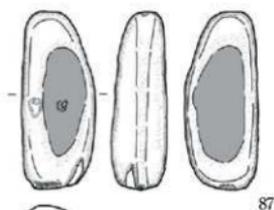
第31図 6号竪穴建物出土遺物(1)



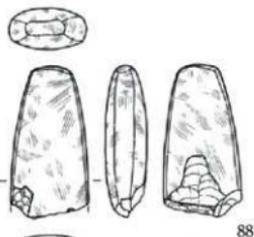
84



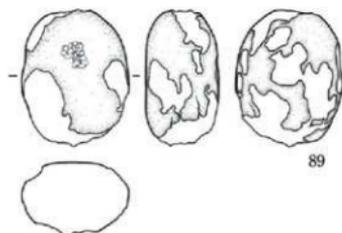
86



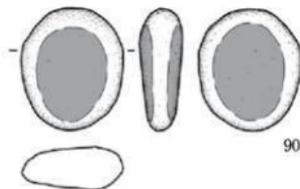
87



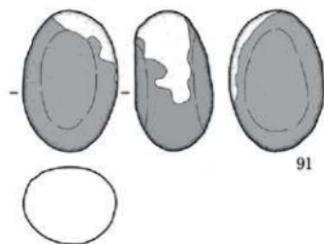
88



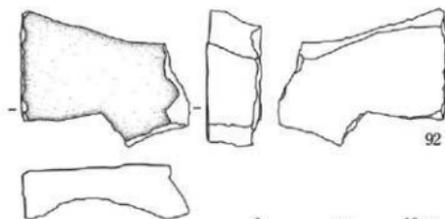
89



90



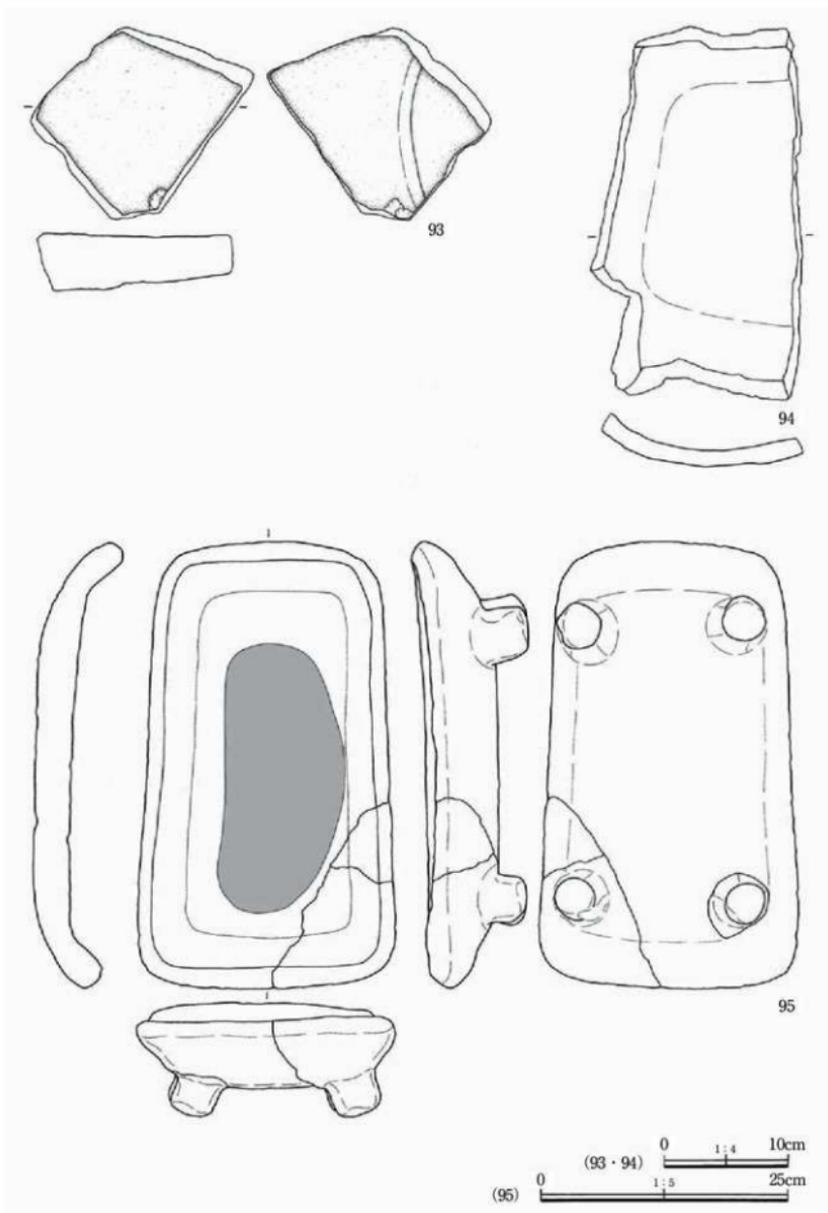
91



92

0 1:3 10cm

第32図 6号竪穴建物出土遺物(2)



第33図 6号竪穴建物出土遺物(3)

6号竪穴建物a

〈規模・形状〉残存規模は6.37×(3.96)mで平面形は多角形基調である。残存床面積は9.26㎡である。

床面はV層まで掘り込まれて構築されている。

〈堆積土〉7層に区分した。7・8層は三角形に堆積する埋没過程初期段階の壁際の堆積層である。

6層は礫を多く含むⅢ層起源の堆積土である。5層はにぶい黄褐色～褐色粘土質土でプランの北側で確認できる。竪穴がある程度埋没した過程で、壁を含む地山の流入土と考えられる。3・4層は礫を含むⅢ層起源の堆積土でレンズ状の堆積状況を呈し、自然堆積の可能性が高い。

〈構成要素〉ピット10個、壁溝を有する。

〈ピット〉周溝に近接して確認されている。規模や位置からaPit 1・aPit 2・aPit 5・aPit 7が柱穴となる可能性が高い。

〈重複関係〉前述の通りで、6号竪穴建物bに切られる。

〈遺物分布〉全体的に遺物量が少なく、その大半は埋土上位から出土している。

〈遺物〉ⅢD・ⅢE群土器、敲磨器、磨石、磨製石斧などが出土した。

【縄文土器】6号建物内出土資料として図示した72～84のうち、78のⅢD群が出土している。

【石器】6号建物内出土資料として図示した86～95のうち、本建物範囲から磨製石斧(88)、石皿(95)が出土している。95は四脚石皿で、皿部が長方形である。建物壁に裏返しの状態出土した。

〈遺構の性格〉床面積も十分な広さがあることから居住施設の可能性がある。

〈時期〉ⅢE群主体の6号竪穴建物bに切られていることと、ⅢD群土器の出土から、縄文時代中期後葉の大木9式期である。

7号竪穴建物(第34・37図、写真図版25・37)

〈検出状況〉IA5d・IA5eグリッド、X=87060、Y=89036付近に位置する。IV層上面で炉と考えられる方形の礫の分布を確認するとともに、炭化物の混在が確認できる黒褐色のプランを確認したため、SI22として登録したが、壁が確認できず、明瞭な柱穴も確認できなかったため、炉とした。その後、IV層を数cm掘り下げたところ、炉を中心に5個の柱穴が確認できたため、改めて竪穴建物とした。

〈規模・形状〉石囲炉と炉を囲う5個の柱穴で構成される。壁が確認できなかったため、詳細な規模や形状は不明であるが、検出時の炭化物の範囲を参考すると径4m前後と考えられる。

〈堆積土〉炉内の堆積土は黒褐色シルトの単層である。

〈構成要素〉ピット5個、石囲炉1基を有する。

〈ピット〉炉を中心に5個確認した。

〈炉1〉石囲炉である。他の竪穴建物のような掘り込みは確認できなかった。また、炉内に明瞭な赤変している部分は確認できなかったが、全体的に炭化物粒が分布している。

〈重複遺構〉9号竪穴建物跡と重複するが、本遺構の残存状態が悪く、新旧関係を把握できなかった。

〈遺物分布〉炉周辺でⅢD・ⅢE群土器が出土した。

【縄文土器】96～98を図示した。沈線区画文が多用される。

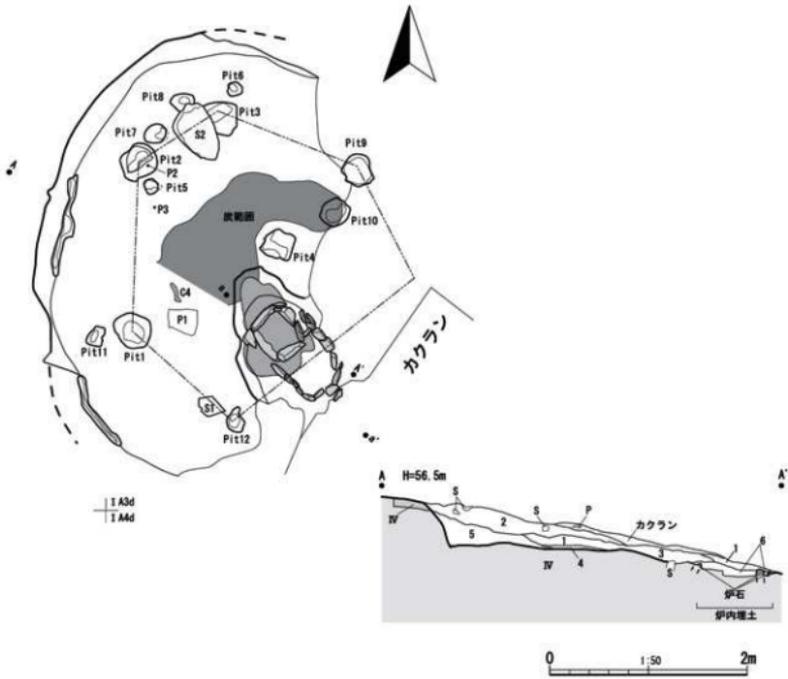
〈遺構の性格〉炉と柱穴の分布から十分な広さがあり、居住施設と考えられる。

〈時期〉出土遺物から、縄文時代中期後葉～末の大木9～10式期である。

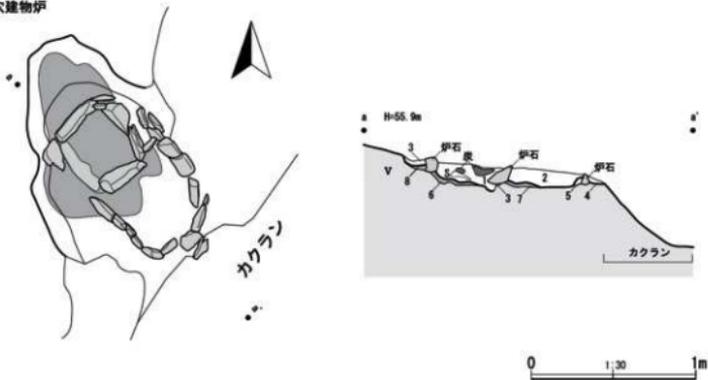
8号竪穴建物(第35～38図、写真図版26・37～40)

〈検出状況〉IA3c・3dグリッド、X=87052、Y=89032付近に位置する。IV～V層上面で炉の一部を検出するとともに、炭化物の混在が確認できる黒褐色のプランを確認したため、竪穴として登録

8号竪穴建物



8号竪穴建物炉



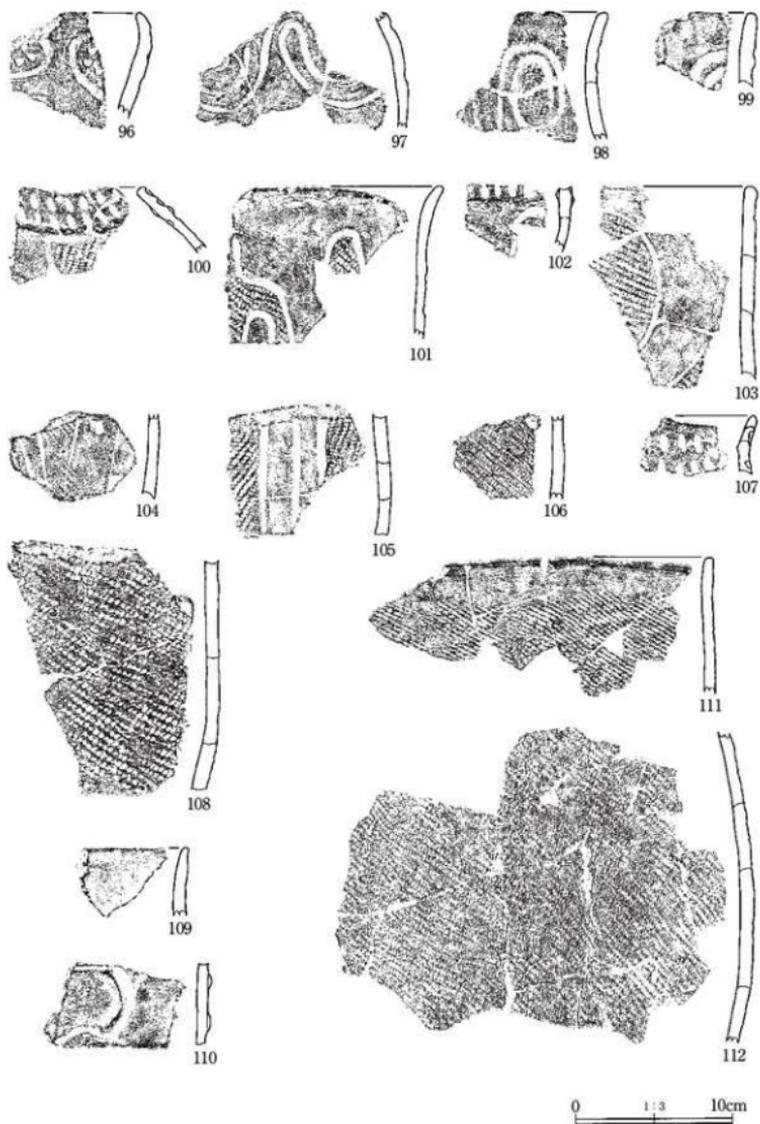
第35図 8号竪穴建物

第21表 8号竪穴建物土層観察表

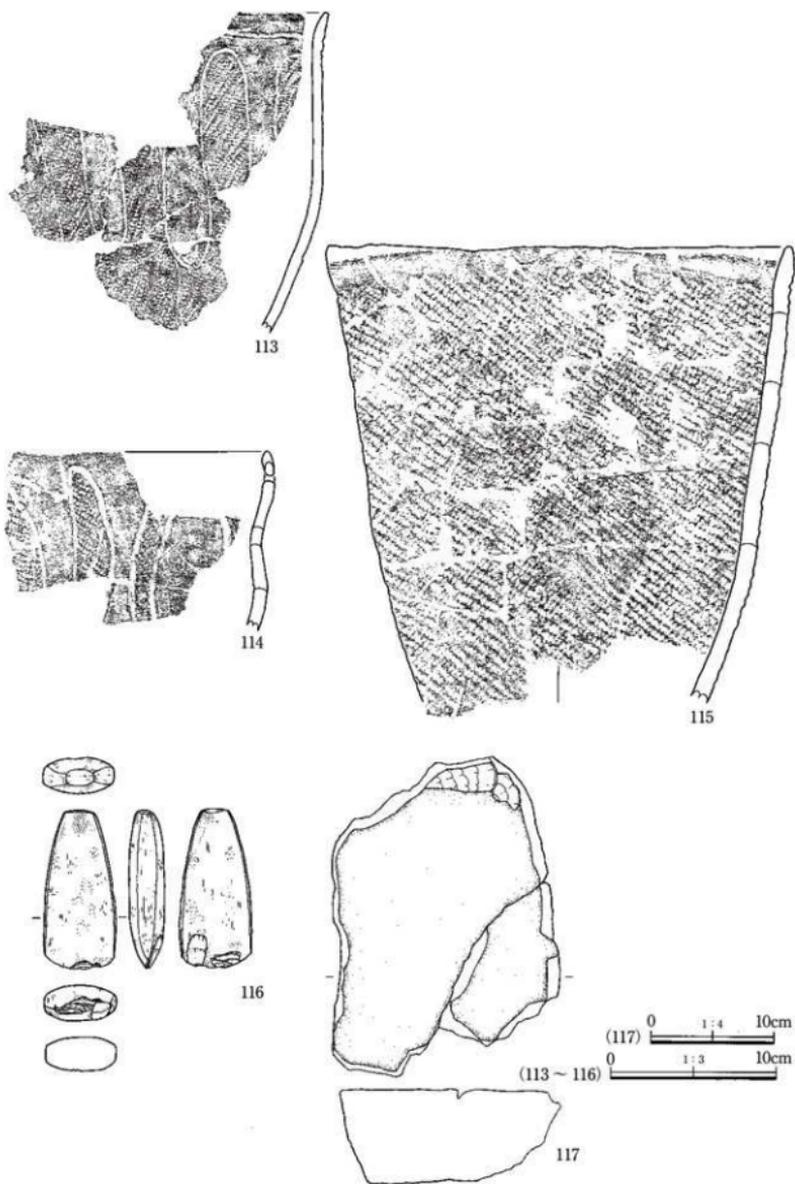
遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
竪穴部	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	3	2	炭化物粒5～7%含む。	
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	4	3	φ5～7cmの礫5～7%・炭化物粒2～3%含む。	
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	4	2	焼土塊3～5%・炭化物粒5～7%（部分的に材有）・φ3～5cmの礫含む（人為堆積か）	
	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	3	2	炭化物粒1～2%含む。	
	5	10YR3/3 暗褐色	シルト	4	3	炭化物粒1～2%・φ2～5cmの礫7～10%・地山（V層）塊3～5%含む	
	6	10YR2/2 黒褐色	シルト	3	2	炭化物粒5～7%・焼土粒2～3%含む（伊内原積土層）	
Pit1	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-	地山小ブロック7～10%含む。	主柱穴
Pit2	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	-	-	地山小ブロック2～3%・小礫含む。	主柱穴
Pit3	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	-	-	地山小ブロック2～3%含む。	主柱穴
Pit4	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-	地山小ブロック10%・炭化物粒2～3%含む。	
Pit5	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	-	-		
Pit6	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	-	-		
Pit7	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	-	-		
Pit8	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	-	-		
Pit9	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	-	-		主柱穴
Pit10	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	-	-		
Pit11	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-		主柱穴
Pit12	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-	炭化物粒含む。	主柱穴
Pit13	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-		Pit1より古い
周溝	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	0	3		
竪	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	2	3	炭化物20～30%・小礫含む。	
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	2	3	炭化物2～3%・φ2～5cmの礫含む（1層とは炭化物の量が違う）	
	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	2	3	炭化物粒3～5%・焼土ブロック2～3%含む。	
	4	10YR2/3 黒褐色	シルト	3	2		
	5	10YR2/2 黒褐色	シルト	4	2	にぶい黄褐色シルトブロック5%含む（伊石の掘方埋土）	
	6	7.5YR4/4 褐色	シルト	3	3	（V層起源の被熱層）	焼土層
	7	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	2	2	（V層起源の被熱層）	焼土層
	8	7.5YR4/4 褐色	シルト	3	3	（V層起源の被熱層）	焼土層

第22表 8号竪穴建物ビット計測表

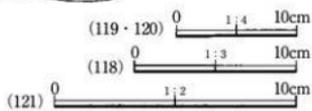
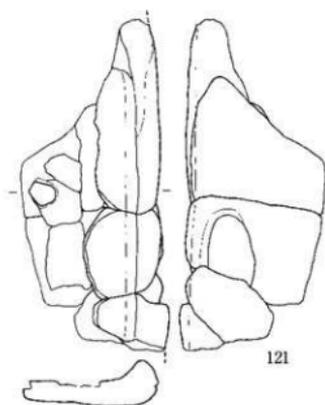
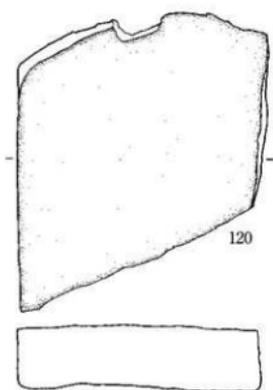
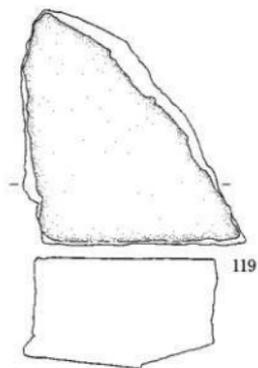
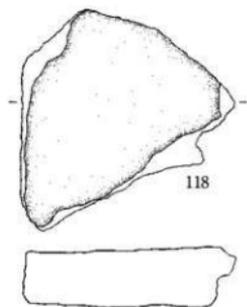
番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構 成
Pit1	0.40 × 0.35	55.36	主柱穴
Pit2	0.40 × 0.35	55.35	主柱穴
Pit3	0.41 × 0.37	55.40	主柱穴
Pit4	0.37 × 0.32	55.47	
Pit5	0.16 × 0.14	55.50	
Pit6	0.16 × 0.15	55.66	
Pit7	0.23 × 0.19	55.67	
Pit8	0.24 × 0.19	55.79	
Pit9	0.34 × 0.32	55.46	主柱穴
Pit10	0.31 × 0.27	55.64	
Pit11	0.23 × 0.17	55.66	
Pit12	0.26 × 0.17	55.43	主柱穴



第36図 7号竪穴建物、8号竪穴建物出土遺物(1)

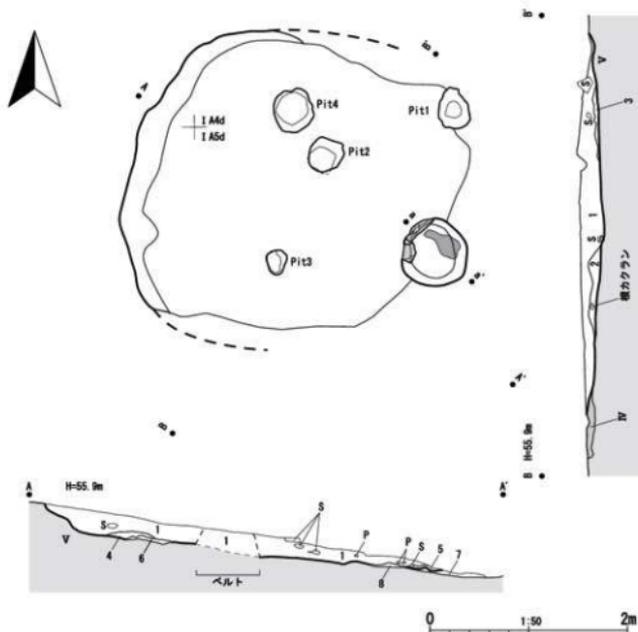


第37図 8号竪穴建物出土遺物(2)



第38図 8号竪穴建物出土遺物(3)

9号竪穴建物



第39図 9号竪穴建物(1)

した。

〈規模・形状〉東側は消失している。残存規模は3.96×3.90mで平面形は残存する部分から判断すると円形もしくは多角形を呈するものと考えられる。残存床面積は9.57㎡である。床面はⅤ層まで掘り込まれて構築されている。

〈堆積土〉5層に区分した。Ⅲ層起源の堆積土主体で、斜面上方からの堆積状況を呈し、炉周辺には炭化材が多く確認できる。

〈構成要素〉ピット12個、壁溝、炉1基を有する。ピットは主柱穴と考えられるものの他、斜面上方北側に小ピットが点在している。壁溝は西側の壁際で確認できる。

〈ピット〉12個確認し、炉を中心としたPit 1～3・9の主柱穴の配置が想定される。また、前述の柱穴よりは小規模で対応する柱穴が確認できなかったが、Pit12も主柱穴を構成するものと考えられる。

〈炉1〉複式炉である。南東側は消失している。炉構築にあたっては炉範囲全体を土坑状に浅く掘り込んでいる。炉石は閃緑岩やホルンフェルスが使用され、口の字状に配置し、さらの南東側にコの字状に配置し、2つの石組部を構築している。口の字状の石組部を中心に底面が赤化しているが、全体的に変化が弱い。

〈重複関係〉1号土坑と近接するが、堆積土からの新旧関係は確認できなかった。

〈遺物〉ⅢD・ⅢE群土器、磨製石斧、石皿など出土した。

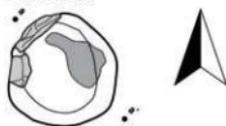
第23表 9号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他	
竪穴部	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	0	2	地山ブロック2~3%・炭化物粒1~2%・φ5~20cm(10cm前後中心)の礫含む(Ⅲ層上部起源の崖線性堆積物)	
	2	10YR3/3	暗褐色	シルト	2	2	黒褐色シルトブロック7~10%・炭化物粒3~5%・φ2~3cmの礫含む	
	3	10YR2/3	黒褐色	シルト	2	2	炭化物粒10%・焼土粒1~2%含む(炭化物の多い層)	
	4	10YR2/2.5	黒褐色	シルト	3	2	炭化物粒(一部材)7~10%含む(炭化物の多い層。3層に類似する)	
	5	10YR2/3	黒褐色	シルト	2	2	橙色粒1%含む。礫含む。	
	6	10YR3/3	暗褐色	シルト	2	2	黒褐色シルトブロック3~5%含む(掘りすぎ?)	
	7	10YR3/4	暗褐色	シルト	2	3	黄褐色小ブロック2%・炭化物粒1~2%含む(Ⅲ層下部か、掘りすぎか)	
	8	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	2	3		掘りすぎ?
Pit1	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	0	2	小礫含む。	
Pit2	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	—	—	—	
Pit3	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	—	—	炭化物粒・焼土粒1%含む。	
Pit4	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	—	—	炭化物粒・小礫含む。	
炉	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	0	2	焼土粒2~3%・炭化物粒1~2%含む。	
	2	10YR4/4	褐色	シルト	0	3	焼土粒1%・炭化物粒1~2%含む。	
	3	10YR4/4	褐色	シルト	0	2	礫含む。	

第24表 9号竪穴建物ビット計測表

番号	開口直径(m)	底面標高(m)	構成
Pit1	0.43 × 0.31	55.06	
Pit2	0.39 × 0.34	54.93	
Pit3	0.25 × 0.21	55.15	
Pit4	0.46 × 0.42	54.79	

9号竪穴建物炉



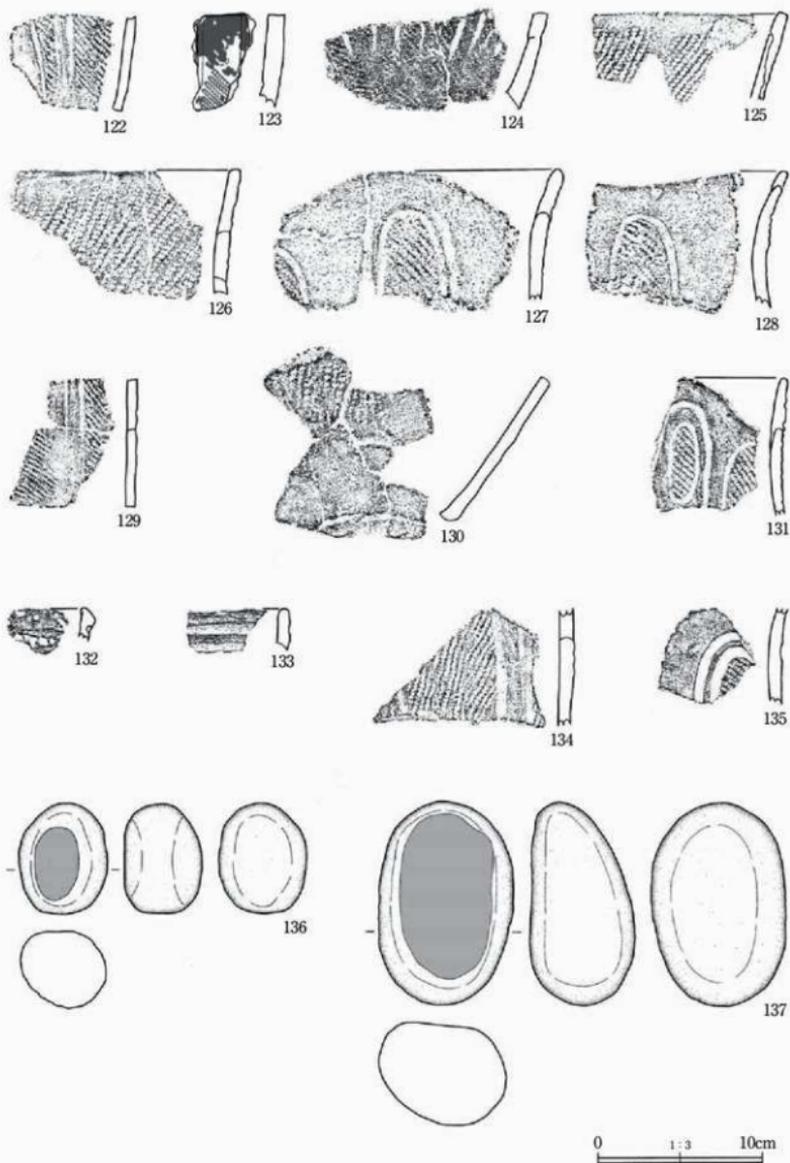
第40図 9号竪穴建物(2)

【縄文土器】99~115を図示した。ⅢD群(99~102・104・105・107・109・110・113・114)が主体で、ⅢE群(103)が堆積土から微量出土している。

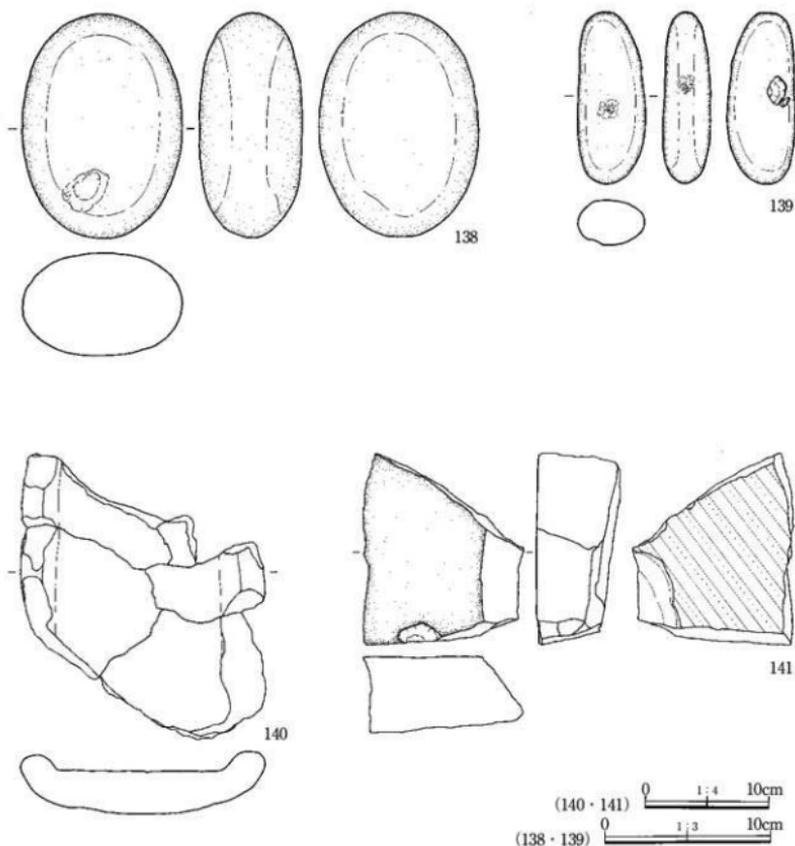
【石器】床面出土の磨製石斧(116)、床面及び炉石転用の石皿(117~121)、
 〈遺構の性格〉複式炉を伴い、床面積も十分な広さがあることから居住施設と考えられる。
 〈時期〉ⅢD群を主体とする出土遺物から縄文時代中期後葉の大木9式期である。

9号竪穴建物(第39~42図、写真図版27・41・42)

〈検出状況〉I A4c・4d・5c・5dグリッド、X=-87056、Y=89032付近に位置する。Ⅳ~Ⅴ層面で炭化物の混在が確認でき、土器の出土する黒褐色のプランとして確認した。
 〈規模・形状〉東側は消失している。残存規模は3.68×3.35mで平面形は西壁しか残存しないため、



第41図 9号竪穴建物出土遺物(1)

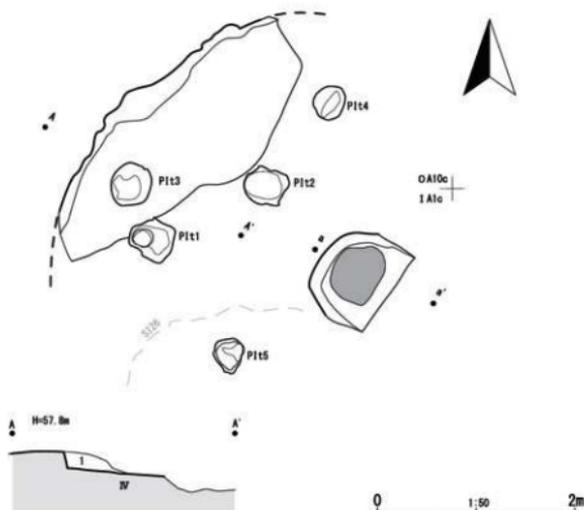


第42図 9号竪穴建物出土遺物(2)

- 不明である。残存床面積は7.70㎡である。床面はV層まで掘り込まれて構築されている。
 〈堆積土〉7層に区分した。主にⅢ層起源の堆積土で構成される。全体的に礫の混入が多く、特に1層には最大20cmの礫が確認できる。西側には、床面付近に炭化物の多い堆積土(3・4層)が確認される。斜面下方には貼床層と考えられる堆積土(7層)が確認できる。
 〈構成要素〉ピット4個、炉1基を有する。
 〈ピット〉斜面下方にあたる東側では確認できないため、柱配置の検討ができなかった。
 〈炉1〉石囲炉である。炉構築にあたっては炉石設置範囲をやや深く、炉範囲全体を土坑状に浅く掘り込んでいた。炉石は円形状に配置されていたものと考えられるが、残存しているのは西側の一部である。炉底面の赤化は弱く、断面図に反映できないほど残存状態が悪い。
 〈重複関係〉7号竪穴建物と重複するが、7号竪穴建物の残存状態が悪く新旧関係を把握できなかった。

2 検出遺構

10号竪穴建物



第43図 10号竪穴建物(1)

第25表 10号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
10号竪穴	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	4	2	橙色粒1%・小礫含む。	
Pit1	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-	-	
Pit2	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-	-	
Pit3	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-	炭化物粒含む。	
Pit4	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	-	-	-	
Pit5	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	-	-	-	
10号竪穴炉	1	7.5YR2/3 暗褐色	シルト	3	2		

〈遺物分布〉7号竪穴建物との境で有縁石皿(140)が出土した。

〈遺物〉ⅢD～ⅢE群土器、磨石、敲石、石皿出土した。

【縄文土器】122～135を図示した。ⅢD群(122～124・127～135)主体である。

【石器】磨石(136・137)、台石(138)、敲石(139)、石皿(140・141)を図示した。

〈遺構の性格〉石囲炉を伴い、床面積も十分な広さがあることから居住施設と考えられる。

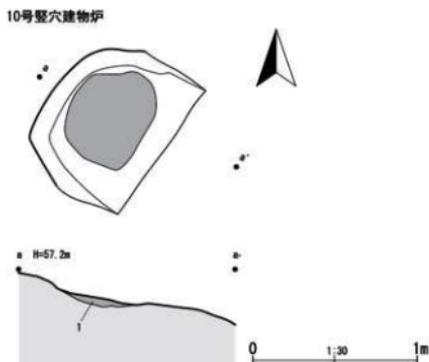
〈時期〉ⅢD群を主体とする出土遺物から縄文時代中期後葉の大木9式期である。

10号竪穴建物(第43・44・46・47図、写真図版28・43・44)

〈検出状況〉O A10c・I A1cグリッド、X=-87040、Y=89028付近に位置する。1号焼土の南西側

第26表 10号竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構成
Pit1	0.48 × 0.46	57.09	
Pit2	0.46 × 0.39	57.13	
Pit3	0.46 × 0.41	57.34	
Pit4	0.36 × 0.31	57.06	
Pit5	0.36 × 0.30	56.81	



第44図 10号竪穴建物(2)

に土器の集中する箇所があり、その周囲の検出作業を行っていたところ、斜面下方にあたる南側で残存状態の非常に悪い焼土を確認した。竪穴住居を想定してベルトを設定して掘り下げを行ったところ、遺物が確認できた部分で床面と壁の一部を確認したため、SI25として登録した。

〈規模・形状〉大部分が消失している。残存規模は3.35×3.23mで平面形は一部しか残存しないため不明である。残存床面積は6.91㎡である。床面はV層まで掘り込まれて構築されている。

〈堆積土〉礫を含む黒褐色シルトの単層である。

〈構成要素〉ピット5個、炉1基を有する。

〈ピット〉あまり深いものではないため、判然としないが、Pit1とPit4が炉を軸に対照的な位置にあり、主柱穴の可能性がある。

〈炉1〉浅い土坑状の掘り込みの底面に焼土を確認したため、炉と判断した。炉石は確認できなかったが、炉の形状から石囲炉もしくは複式炉と考えられる。

〈重複関係〉プラン内では11号竪穴建物と重複しているが、どちらも残存状態が悪いため、新旧関係を把握できなかった。

〈遺物分布〉わずかに確認できた斜面上方でまとまって土器が出土した。

〈遺物〉ⅢD～ⅢE群土器が出土した。

【縄文土器】142～147を図示した。ⅢD群(145)とⅢD～ⅢE群(142～144・146・147)に分けられる。146は6号・10号竪穴建物で破片がそれぞれ出土し、遺構間接合する。

〈遺構の性格〉残存状態が悪いため、正確な床面積を確認できないが、炉及び炉を中心とした柱穴が確認できることから居住施設の可能性がある。

〈時期〉ⅢD・ⅢE群を主体とする出土遺物から縄文時代中期後葉の大木9～10式期である。

11号竪穴建物(第45・47図、写真図版29・44)

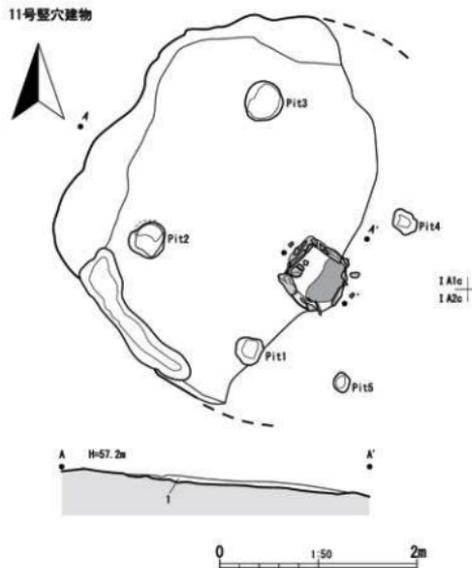
〈検出状況〉I A1c・2cグリッド、X = -87044、Y = 89028付近に位置する。SI25のプラン確認中にそ

- の南西側で炉と考えられる円形の礫の配置と、黒褐色のプランが確認できたため、堅穴住居を想定して掘り下げを行ったところ、床面と炉を確認したため、SI26として登録した。
- 〈規模・形状〉南東側は消失している。残存規模は4.05×3.03mで平面形は残存範囲から多角形状を呈するものと考えられる。残存床面積は7.01㎡である。床面はV層まで掘り込まれて構築されている。
- 〈堆積土〉礫を含む黒褐色シルトの単層である。
- 〈構成要素〉ピット5個、壁溝、炉1基を有する。ピットは主柱穴と考えられるものの他、炉の斜面下方に1個確認できる。周溝は西側の壁際に確認できる。
- 〈ピット〉炉を囲うように5個確認し、炉を中心としたPit1～4の主柱穴の配置が想定される。
- 〈炉1〉確認できたのは方形形状の石組部である。炉の南東側が消失しているため、石囲炉か前庭部が伴う複式炉かの判断はできなかった。炉全体を掘り込み、壁際に炉石を設置している。炉石は板状礫を横長に立てて方形形状に設置している。炉底面の赤化は弱い。
- 〈重複関係〉プラン内では10号堅穴建物と重複しているが、どちらも残存状態が悪いため、新旧関係を把握できなかった。
- 〈遺物分布〉少量であるが、遺構堆積土から土器片が出土している。層高がないため、出土状況の傾向を把握するには至らなかった。
- 〈遺物〉ⅢD群土器が出土した。
- 【縄文土器】ⅢD群(148・149)が床面から出土した。
- 〈遺構の性格〉残存状態が悪いため、正確な床面積を確認できないが、炉及び炉を中心とした柱穴が確認できることから居住施設の可能性がある。
- 〈時期〉ⅢD群を主体とする出土遺物から縄文時代中期後葉の大木9式期である。

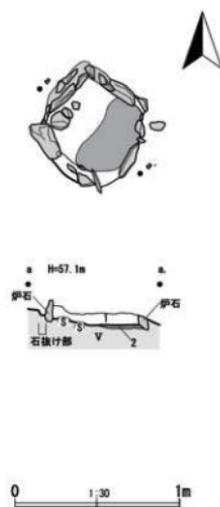
12号堅穴建物(第47・48図、写真図版30・44)

- 〈検出状況〉I A6d・7dグリッド、X=-87064、Y=89032付近に位置する。1号埋設土器の掘形の確認のため、たち割りを行ったところ、V層面で平坦な面が確認できたことと、炭化材を含む炭化物の集中する箇所を確認した。堅穴の存在を想定して掘り下げを行ったところ、ベルトの南西側で炉を確認したため、SI27として登録した。
- 〈規模・形状〉南東側の大部分が消失している。残存規模は4.15×2.33mで、平面形は一部しか残存しないため不明である。残存床面積は4.23㎡である。床面はV層である。
- 〈堆積土〉2層に区分した。上部に焼土ブロックを含む暗褐色シルトが部分的に確認できるが、大部分は炭化物を含むⅢ層起源の黒褐色シルト主体で構成される。
- 〈構成要素〉ピット3個、炉1基を有する。ピットは炉を囲うように分布している。
- 〈ピット〉炉を囲うように分布しているが、残存状況が悪く、柱配置は不明と言わざるをえない。
- 〈炉1〉石囲炉である。炉構築にあたっては炉石設置範囲をやや深く、炉範囲全体を土坑状に浅く掘り込んでいる。炉石は円形状に配置されていたものと考えられるが、南西側の炉石は確認できなかった。炉底面の赤化は弱い。
- 〈重複関係〉1号埋設土器に切られる。
- 〈遺物分布〉当初堅穴と認識していなかったため、プラン内の遺物をグリッドで取り上げを行っており、その中に本遺構に帰属する遺物が含まれている可能性が高い。その他には遺構埋土から土器小片が出土している。
- 〈遺物〉石皿が出土した。

11号竪穴建物



11号竪穴建物炉



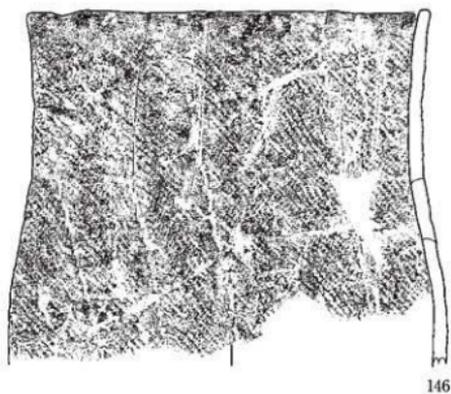
第45図 11号竪穴建物

第27表 11号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色調		土性	粘性	締まり	混入物	その他
竪穴部	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	2	3	φ5~10cmの礫含む。	
Pit1	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	-	-	地山ブロック3~5%含む。	
Pit2	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	-	-	地山ブロック2~3%含む。	
Pit3	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	-	-	礫含む。	
Pit4	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	-	-	礫含む。	
Pit5	1	10YR2/3	黒褐色	シルト	-	-	-	
周溝	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	-	-	礫含む。	
加	1	7.5YR2/2	黒褐色	シルト	2	3	地山ブロック3%含む。	
	2	5YR2/4	極暗褐色	シルト	2	3	上面に炭化物点在。	焼土層

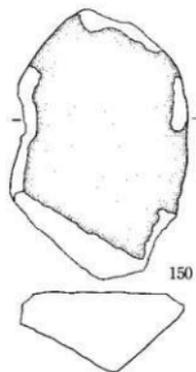
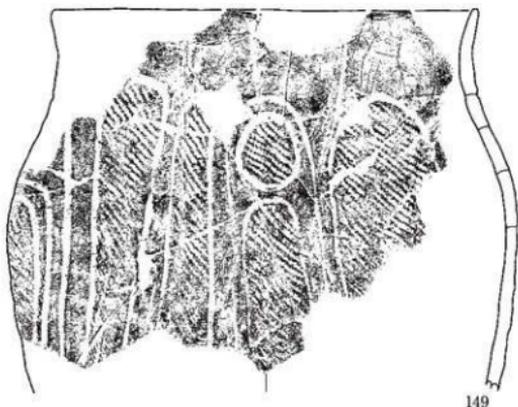
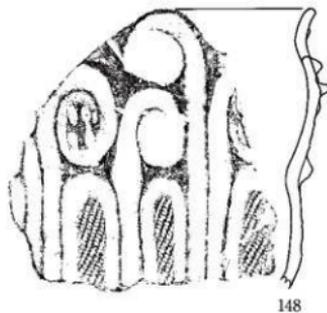
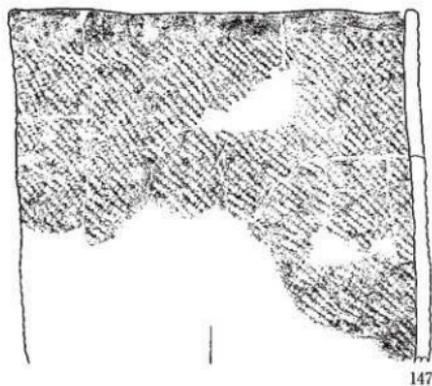
第28表 11号竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構成
Pit1	0.29 × 0.27	56.70	
Pit2	0.39 × 0.33	56.58	
Pit3	0.41 × 0.38	56.83	
Pit4	0.28 × 0.21	56.62	
Pit5	0.21 × 0.17	56.72	



0 1:3 10cm

第46図 10号竪穴建物出土遺物(1)



(150) 0 1:4 10cm

(147 ~ 149) 0 1:3 10cm

10号竪穴 = 47

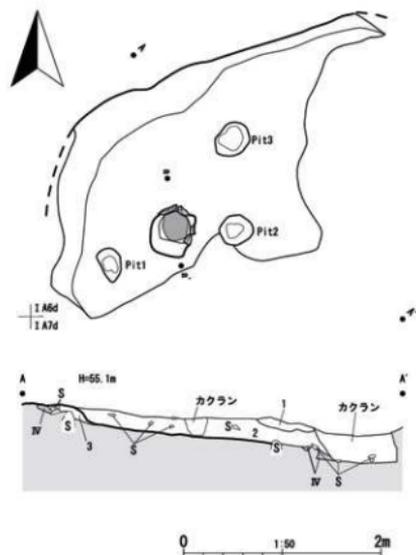
11号竪穴 = 148・149

12号竪穴 = 150

第47図 10号竪穴建物出土遺物(2)、11・12号竪穴建物出土遺物

2 検出遺構

12号竪穴建物



12号竪穴建物炉



第48図 12号竪穴建物

第29表 12号竪穴建物土層観察表

遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
竪穴部	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	0	3	焼土ブロック 15～20%・小礫含む。	
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	3	2	炭化物粒 1～2%・小礫含む(Ⅲ層下部起源の堆積土)	
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	2	3	礫含む(Ⅲ層下部自然堆積層:遺構埋土ではない)	
炉	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	0	2	炭化物 7～10%含む	
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	3	3	炭化物粒 1%含む(炉石抜き取り痕か)	
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	3	2	—	
	4	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	0	2	焼土粒 2～3%・炭化物粒 1%含む。	焼土層
	5	10YR3/2 黒褐色	シルト	2	2	—	

第30表 12号竪穴建物ピット計測表

番号	開口部径 (m)	底面標高 (m)	構成
Pit1	0.35 × 0.22	54.63	
Pit2	0.34 × 0.30	54.47	
Pit3	0.39 × 0.30	54.54	

1号埋設土器



第49図 1号埋設土器遺構

第31表 1号埋設土器土層観察表

遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
1号埋設土器	I	5YR3/6 暗赤褐色	シルト	4	2	-	焼土層

【石器】石皿（150）が炉石に転用されている。

〈遺構の性格〉石囲炉を伴い、床面積も十分な広さがあることから居住施設の可能性がある。

〈時期〉重複関係と炉形態から縄文時代中期後葉である。

(2) 埋設土器

1号埋設土器（第49・51図、写真図版31・45）

〈検出状況〉I A6d グリッド、X = -87064、Y = 89032付近に位置する。玉砂利を含むⅢ層除去後のⅢ層中で土器を確認し、埋設土器（153）として登録した。堅穴等の遺構に伴う可能性を想定して、周囲の掘削を行ったが、堅穴等の根拠となる痕跡を確認できなかった。

〈規模・形状〉規模は0.34×0.28mである。153は胴部～底部が残存しており、RL縄文を地文とする。明瞭な掘形が確認できなかった。

〈堆積土〉Ⅲ層下部起源の暗褐色シルト層主体で、小石・砂利を含むものの、炭化物や焼土などの混入物はほとんど確認できない。

〈重複関係〉12号堅穴建物を切る。

〈時期〉重複関係と土器胎土の特徴から縄文時代中期後葉～末の大木9～10式期である。

(3) 土坑

1号土坑（第50・51図、写真図版31・45）

〈検出状況〉I A2c・3cグリッド、X = -87048、Y = 89028付近に位置する。Ⅳ層面で地山ブロックの混入する黒褐色のプランとして確認した。

2 検出遺構

- 〈規模・形状〉規模は2.00×1.72mで平面形は北側に張り出しのある方形基調である。
- 〈堆積土〉3層に区分した。斜面上方の壁際に黒褐色シルトの堆積が確認できるものの、上部の黒褐色シルトと下部の暗褐色シルトに分けられる。全体的に混入物が多く、人為堆積の可能性が高い。
- 〈重複関係〉なし。
- 〈遺物分布〉斜面下方の下部を中心に堆積している2層から縄文土器が出土している。
- 〈遺物〉ⅢE群土器(151)が出土した。
- 〈時期〉縄文時代の堆積土である。堆積土出土遺物から縄文時代中期後葉～末の大木10式期の可能性があるが、詳細は不明である。

(4) 焼 土

1号焼土遺構(第50図、写真図版31)

- 〈検出状況〉O A10cグリッド、X = -87038、Y = 89029付近に位置する。表土層除去後のIV層面で暗褐色焼土の広がりを確認し、SL01とした。
- 〈規模・形状〉確認できた規模は0.28×0.23mで、隅丸形状を呈する。
- 〈堆積土〉IV層が赤変し、暗褐色を呈する。
- 〈重複関係〉10号竪穴建物を切る。
- 〈遺物〉なし。
- 〈時期〉遺構の分布等から縄文時代中期の遺構の可能性が高いが、遺物が伴わないため、詳細な時期を特定するに至らなかった。

3 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器(第51～56図、写真図版45～49)

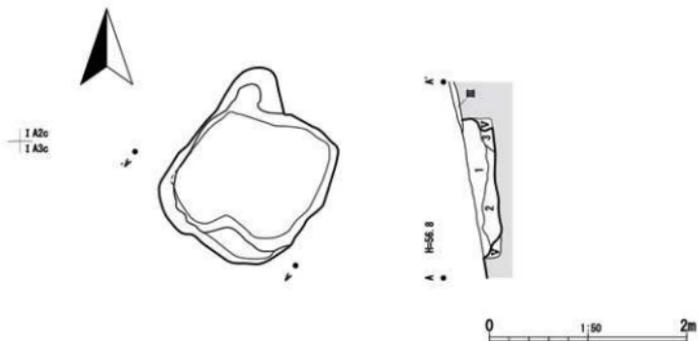
152・154～196を図示した。主にⅢ層出土である。ⅢD～ⅢE群は152・154～157・162・170～172・182・188・192・194、ⅢD群古は159、ⅢD群新は158・169・183～185・189～191・193・195・196、ⅢE群は160・161・163・168・186・187、ⅣA群は173～181、ⅣC群は164、ⅤC～ⅤD群は165～167である。

ⅢD群を主体とするため、ⅢD～ⅢE群とした試料の大半がⅢD群期に帰属する可能性がある。

(2) 石器・素材礫(第56図、写真図版49・50)

197～200を図示し、201～205を写真掲載した。197はホルンフェルスの棒状石器素材礫で、敲石、磨製石斧等の素材と成り得る。198は磨製石斧、198はひん岩製の敲石で、素材端部に擦れたような敲打や磨減痕があること、100g程度の軽量であることから、トチ剥き石の可能性が考えられる。200は石製円盤である。201～205は写真掲載で敲石あるいは磨石である。

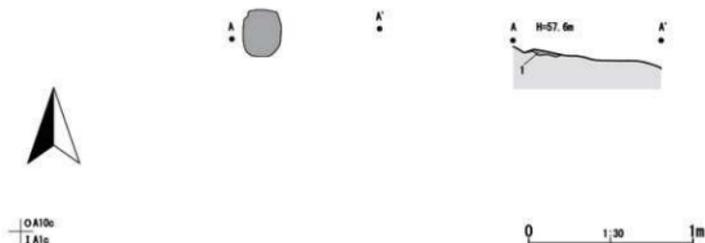
1号土坑



第32表 1号土坑土層観察表

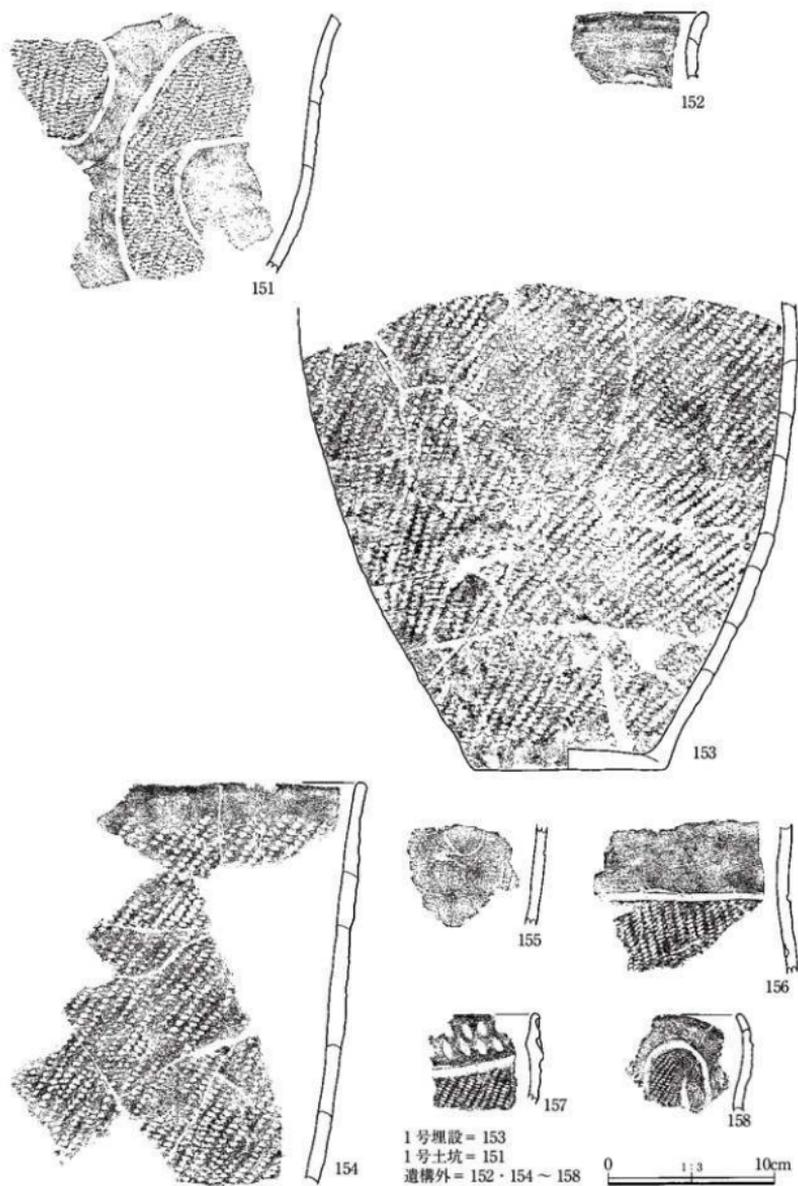
遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
1号土坑	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	3	2	地山ブロック10%・地山小ブロック2%・小礫(φ2~3cm)含む。	
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	5	3	黒褐色シルトブロック3~5%含む。 中央付近では焼土ブロック・礫・土器が確認できる。	
	3	10YR2/3 黒褐色	シルト	4	2	ブロック状に見られる。	

1号焼土

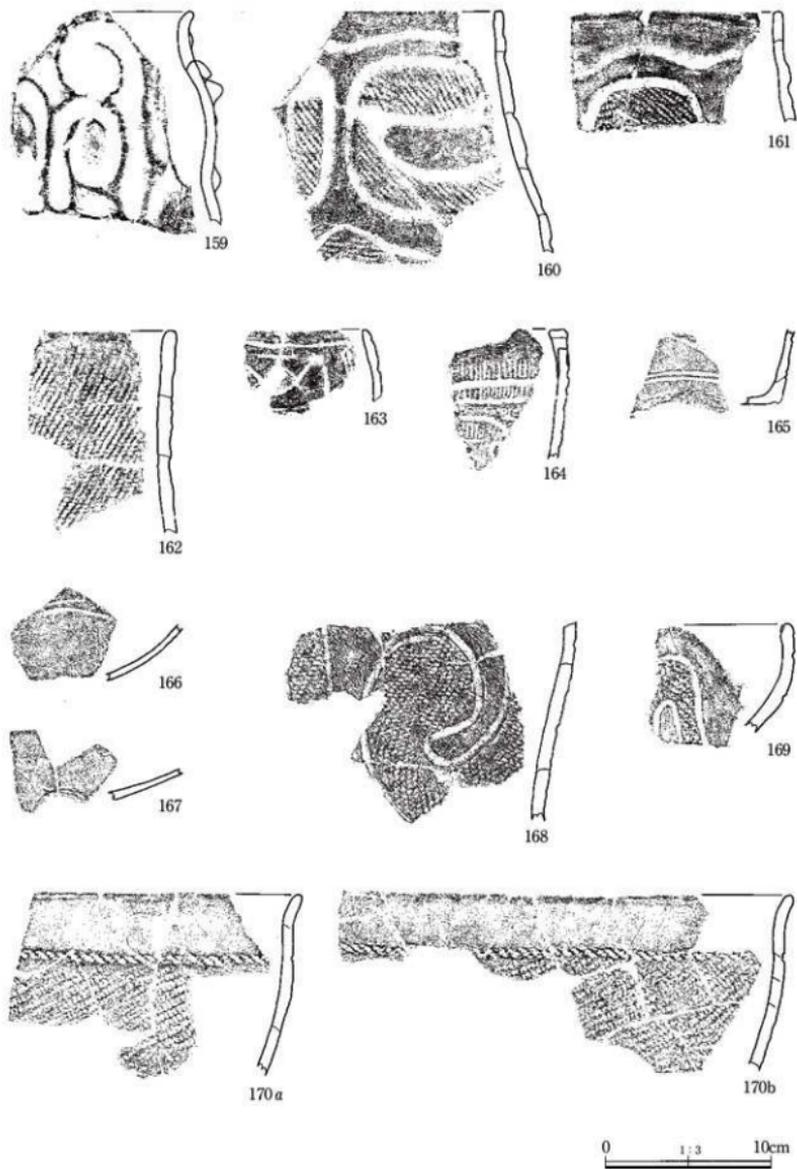


第33表 1号焼土遺構土層観察表

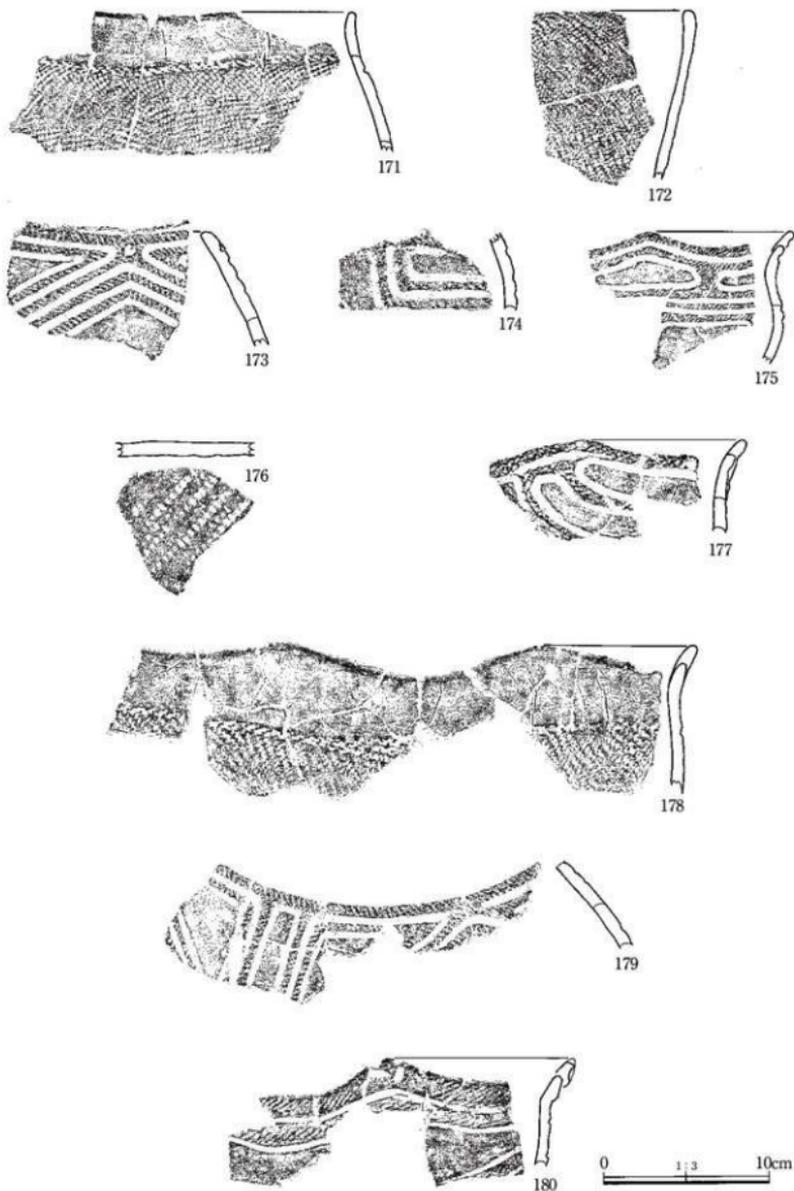
遺構名	層位	色調	土性	粘性	締まり	混入物	その他
1号焼土	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	3	2	φ5cmの礫少量、φ0.5~1cmの礫5~7%含む。	



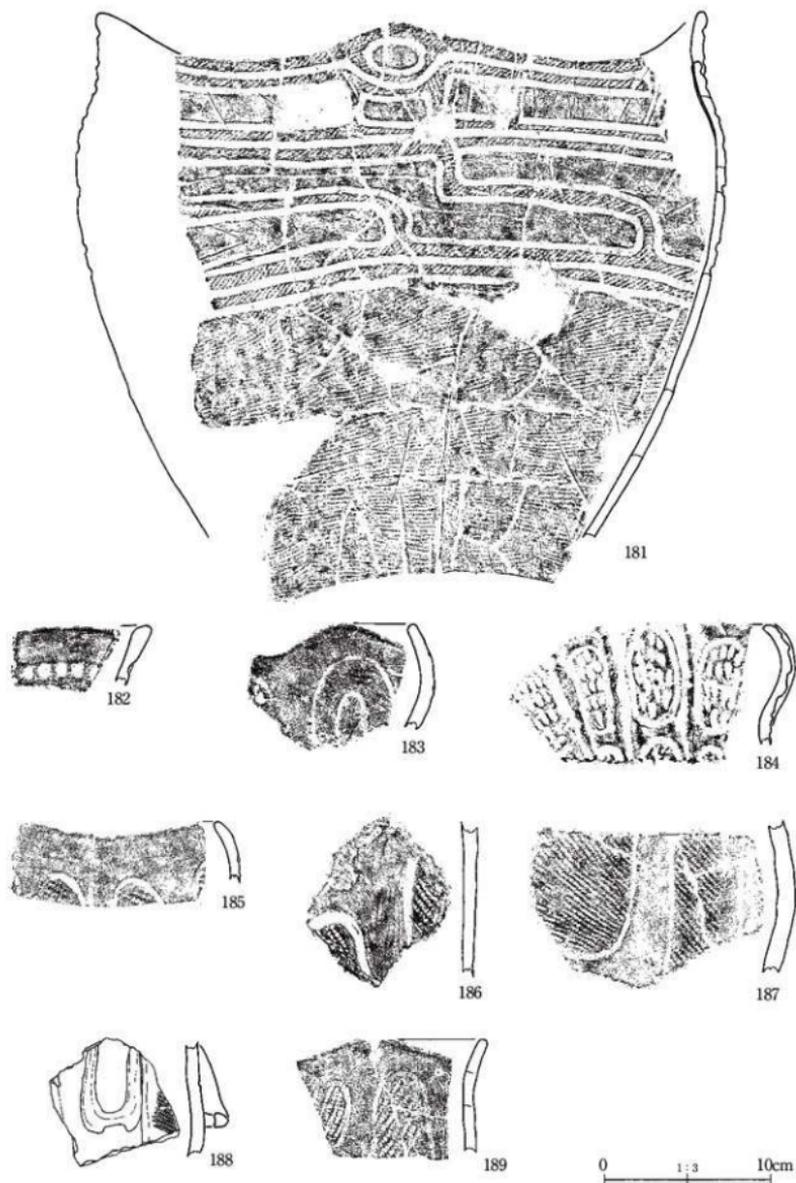
第51図 1号埋設土器、1号土坑、28・29年度遺構外出土遺物(1)



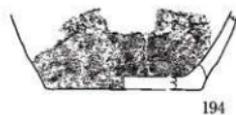
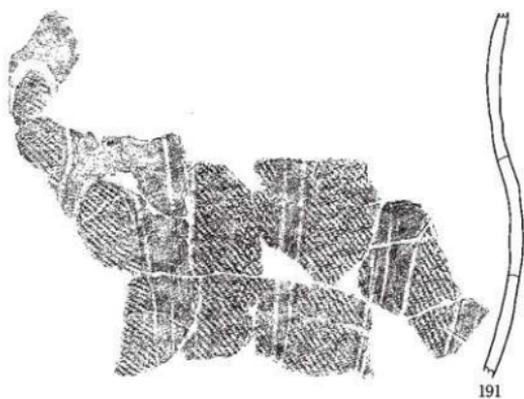
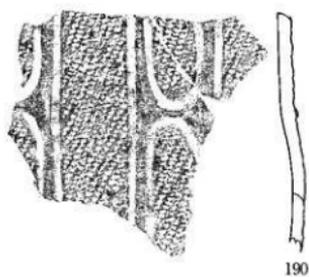
第52図 28・29年度遺構外出土遺物(2)



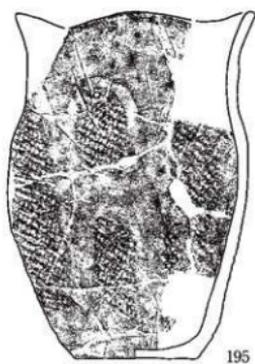
第 53 図 28・29 年度遺構外出土遺物 (3)



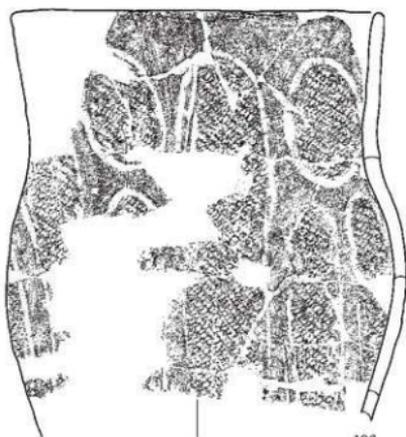
第54図 28・29年度遺構外出土遺物(4)



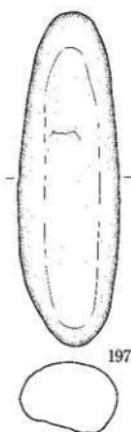
第 55 図 28・29 年度遺構外出土遺物 (5)



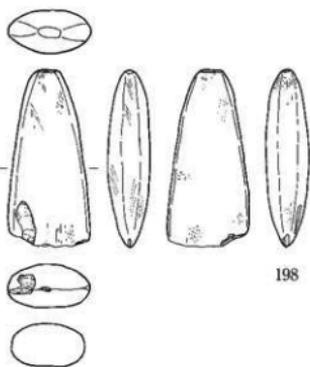
195



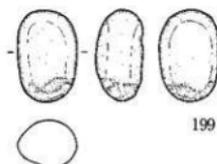
196



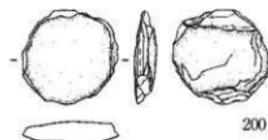
197



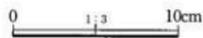
198



199



200



第56図 28・29年度遺構外出土遺物(6)

第34表 土器観察表(平成28・29年度)

掲載 出土地点	層位	器種	残存部位	主な調査・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 xm	胎土	時期	備考
				外面	内面							
72	6号室	深鉢	胴部	新英文→沈線区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径大	ⅢD新		
73	6号室	深鉢	胴部	LRタテ→沈線区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量	ⅢD新		
74	6号室	深鉢	口縁~胴部	RLタテ	ナテ				砂粒多量、粒径大	ⅢD	ⅢD新と同胎土	
75	6号室	深鉢	胴部	LRタテ	ナテ				砂粒多量、粒径大、白色砂粒大	ⅢD	ⅢD新と同胎土	
76	6号室	深鉢	口縁	RLタテ→沈線区画→器面ミガキ	ナテ				砂粒少量	ⅢD新		
77	6号室	深鉢	胴部	新英文、LRタテ→沈線区画→器面ミガキ	ナテ		(60)	(49)	砂粒少量	ⅢD新		
78	6号室a	深鉢	口縁~胴部	平縁、器面平縁、沈線区画	ナテ				砂粒少量	ⅢD新		
79	6号室b	深鉢	口縁~胴部	LRタテ→沈線区画→器面ナテ	ナテ				砂粒少量	ⅢD新		
80	6号室b	如内、中前高部 埴輪土	口縁~胴部	平縁、RLタテ	ナテ				砂粒多量、粒径大	ⅢD新		
81	6号室b	灰皿、柳付瓦	口縁~胴部	波状口縁、LRタテ→沈線区画(アルファベット文)→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢE	81・82同一個体	
82	6号室	埴輪土下部	口縁~胴部	波状口縁、LRタテ→沈線区画(アルファベット文)→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢE	81・82同一個体	
83	6号室b	埴輪土下部	胴部	LRタテ→沈線区画(アルファベット文)→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢE	83・84同一個体	
84	6号室b	灰皿、中内	口縁~胴部	平縁、LRタテ→沈線区画(渦巻状)→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢE	83・84同一個体	
96	7号室	埴輪土	口縁~胴部	波状口縁、新英文→沈線区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
97	7号室	埴輪土	口縁~胴部	平縁→沈線区画(波状)	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢE		
98	7号室	検出面	口縁~胴部	平縁、RLタテ→沈線区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径大	ⅢD新		
99	8号室	埴輪土	口縁~胴部	平縁、沈線区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径大	ⅢD新		
100	8号室	埴輪土	口縁~胴部	新英文、RLタテ・隆線	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
101	8号室	埴輪土	口縁~胴部	平縁、LRタテ→沈線区画→器面ミガキ	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
102	8号室	埴輪土	胴部	新英文、沈線区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢD新		
103	8号室	埴輪土	口縁~胴部	平縁、LRタテ→沈線区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	ⅢE		

第34表 土器観察表(平成28・29年度)

表型-型穴建物

掲載 出土地点	層位	器種	残存部位	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 xm	胎土	時期	備考
				外面	内面							
104 8号壺	州壺土	深鉢	胴部	L タテ→沈堀区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新		
105 8号壺	州壺土	深鉢	胴部	RL タテ→沈堀区画→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新		
106 8号壺	州壺土	深鉢	胴部	LR タテ	ナテ				砂粒多量、粒径大	Ⅲ D-Ⅲ E		
107 8号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	平縁、朝穴文→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新		
108 8号壺	州壺土	深鉢	胴部	LR タテ	ナテ				砂粒多量、粒径大	Ⅲ D-Ⅲ E		
109 8号壺	州壺土	深鉢	胴部	RL タテ→沈堀区画・平縁	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新		
110 8号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	平縁、LR タテ→口縁器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径大	Ⅲ D 新		
111 8号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	平縁、LR タテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D-Ⅲ E		
112 8号壺	宋面	深鉢	胴部	LR タテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D-Ⅲ E		
113 8号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	平縁、RL タテ→沈堀区画(逆U字状?)→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新		
114 8号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	波状口縁、LR タテ→沈堀区画(逆U字)→器面ナテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新		
115 8号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	平縁、LR タテ→器面ナテ	ナテ		(28.0)		砂粒多量、粒径大	Ⅲ D-Ⅲ E		
122 9号壺	州壺土	深鉢	胴部	LR タテ→沈堀区画→器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	Ⅲ D 新		
123 9号壺	州壺土	深鉢	胴部	LR タテ→沈堀区画→赤色断片散布	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新	赤色断片散布	
124 9号壺	州壺土下部	深鉢	胴部	LR タテ→沈堀区画	ナテ				砂粒多量、粒径大	Ⅲ D 新		
125 9号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	平縁、RL タテ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D-Ⅲ E		
126 9号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	平縁、RL ヨコ	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D-Ⅲ E		
127 9号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	波状口縁、LR タテ→沈堀区画(逆U字)	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D-Ⅲ E		
128 9号壺	州壺土	深鉢	口縁~胴部	波状口縁、LR タテ→沈堀区画(逆U字)	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新	127・128同一個体	
129 9号壺	州壺土	深鉢	胴部	LR タテ→沈堀区画	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新	127・128同一個体	
130 9号壺	州壺土、Pt04	深鉢	胴部~底部	r タテ(単輪筋条体1期)	ナテ				砂粒多量、粒径小	Ⅲ D 新		

第34表 土器観察表(平成28・29年度)

掲載 出土地点	層位	器種	残存部位	主な調整・特徴		底部	口径 cm	底径 cm	器高 xm	胎土	時期	備考
				外面	内面							
131 9号室	州羅土	深鉢	胴部~底部	波状口縁、LRタテ→北瀬区画(楕円) →器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
132 9号室	1層	深鉢	口縁	斬突文	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
133 9号室	1層	深鉢	口縁	沈澱→器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
134 9号室	1層	深鉢	胴部	RLタテ→北瀬区画	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
135 9号室	州羅土	深鉢	胴部	LRタテ→北瀬区画(楕円) →器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
142 10号室	州羅土	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ→器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD~ⅢE		
143 10号室	州羅土	深鉢	胴部	LRタテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD~ⅢE		
144 10号室	州羅土	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD~ⅢE		
145 10号室	州羅土	深鉢	胴部	斬突文、北瀬区画→器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
146 6・10号室	州羅土	深鉢	口縁~胴部	平縁、結節凹転文タテ	ナテ	244	[21.7]		砂粒少量、粒径大	ⅢD~ⅢE		
147 10号室	州羅土	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ→口縁器面ナテ	ナテ	247	[21.5]		砂粒少量、粒径大	ⅢD~ⅢE		
148 11号室	床面	深鉢	口縁~胴部	波状口縁、RLタテ→北瀬区画(滴急状、長楕円)	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
149 11号室	床面	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ→北瀬区画(逆U字状、楕円)	ナテ		[24.2]		砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
151 1号土坑	州羅土	深鉢	胴部	RLタテ→北瀬区画→器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		
152 IA6d	Ⅲ	深鉢	口縁	平縁、器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢE		
153 1号埋設土器	Ⅲ	深鉢	胴部~底部	RLタテ	ナテ		11.7	[28.4]	砂粒少量、粒径大	ⅢD~ⅢE		
154 IA6d	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、RLタテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD~ⅢE		
155 IA3c	Ⅲ	深鉢	胴部	RLタテ、北瀬区画	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD~ⅢE		
156 IA3c	Ⅲ	深鉢	胴部	RLタテ→北瀬区画→器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径大	ⅢD~ⅢE		
157 IA3d	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、斬突文、RLタテ→北瀬区画→器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径大	ⅢD~ⅢE		
158 IA4b	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	波状口縁、RLタテ→北瀬区画→器面ナテ	ナテ				砂粒少量、粒径小	ⅢD新		

第34表 土器観察表(平成28・29年度)

※ 量→型/次/種物

掲載 縄文 出土地点	層位	器種	残存部位	主な調整・特徴		口径 cm	底径 cm	器高 xm	胎土	時期	備考
				外面	内面						
159 IA4b	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	液状口縁、RLタテ、渦巻状流紋	ナデ				砂粒多量、軟径大	ⅢD古	
160 IA4b	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ・ナメ→沈線区画(アルファベット文) →器面ナデ	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢE	160・161同一個体
161 IA4b	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRタテ→沈線区画(アルファベット文)→器面 ナデ	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢE	160・161同一個体
162 IA4b	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、RLタテ	ナデ				砂粒多量、軟径大	ⅢD~ⅢE	
163 IA4g	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、沈線区画→器面摩耗	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢE	
164 IA4g	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	口縁部突起、縦位細流紋→丸沈線区画	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢC	
165 IA4g	Ⅲ	鉢?	胴部~底部	並行流紋	ナデ				砂粒微量、軟径小	ⅢC~ⅢD	
166 IA4g	Ⅲ	浅鉢	胴部~底部	LR?、並行流紋	ナデ				砂粒微量、軟径小	ⅢC~ⅢD	
167 IA4g	Ⅲ	浅鉢	胴部~底部	器面ナデ	ナデ				砂粒微量、軟径小	ⅢC~ⅢD	
168 IA5b	Ⅲ	深鉢	胴部	液状口縁、LR、RLヨコ→沈線区画(アルファベット文)→ 器面ナデ	ナデ				砂粒多量、軟径大	ⅢE	
169 IA5b	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	LRタテ→沈線区画	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢD新	
170a IA4g・5g	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRヨコ、横圧痕	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢD~ⅢE	
170b IA4g・5g	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRヨコ、横圧痕	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢD~ⅢE	
171 IA5g	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、LRヨコ、横圧痕	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢD~ⅢE	
172 IA5g	Ⅲ	深鉢	胴部~底部	LRタテ	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢD~ⅢE	
173 IA5g	Ⅲ	深鉢	胴部~底部	RLタテ・ヨコ→沈線区画・刺状文→器面ミガキ	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢA	
174 IA5g	Ⅲ	深鉢	胴部	沈線区画	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢA	
175 IA5g	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	液状口縁、LRヨコ→沈線区画	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢA	
176 IA5g	Ⅲ	深鉢	底部		ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢA	
177 IA5g	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	液状口縁、LRヨコ→沈線区画	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢA	
178 IA5g	Ⅲ	深鉢	口縁~胴部	平縁、RLRヨコ→、横圧痕RLR	ナデ				砂粒少量、軟径小	ⅢA	

第34表 土器観察表(平成28・29年度)

母胎	出土地点	層位	器種	残存部位	主な調整・特徴		口径 cm	底径 cm	器高 xm	胎土	時期	備考
					外面	内面						
179	IA4g・5g	Ⅱ・Ⅲ	酒杯	胴部	LR タテ→沈堀区画	ナテ				砂粒少量、軟径小	ⅣA	
180	IA5g	Ⅲ	酒杯	口縁~胴部	流状口縁、Lヨコ→沈堀区画	ナテ				砂粒少量、軟径小	ⅣA	
181	IA4g・5g	Ⅲ	酒杯	口縁~胴部	流状口縁、LRヨコ→沈堀区画	ナテ	(36.0)		[33.0]	砂粒少量、軟径小	ⅣA	
182	IA6g	Ⅲ	酒杯	口縁	刺突文	ナテ				砂粒大量、軟径大	ⅢD~ⅢE	
183	IA6g	Ⅲ	酒杯	口縁~胴部	流状口縁、沈堀区画、器面磨耗	ナテ				砂粒大量、軟径小	ⅢD新	
184	IA6c	Ⅲ	酒杯	口縁~胴部	刺突文→沈堀区画(楕円)・隆起区画	ナテ				砂粒大量、軟径小	ⅢD新	
185	IA6d	Ⅲ	酒杯	口縁~胴部	LR タテ→沈堀区画→器面ナテ	ナテ				砂粒大量、軟径小	ⅢD新	
186	IA6d	Ⅲ	酒杯	胴部	LR タテ→沈堀区画→器面ナテ	ナテ				砂粒大量、軟径大	ⅢE	
187	IA7b・7c	Ⅱ・Ⅲ	酒杯	胴部	LR タテ→沈堀区画→器面ナテ	ナテ				砂粒大量、軟径大	ⅢE	
188	IA7c	Ⅲ	酒杯	胴部	LR タテ→沈堀区画→把手	ナテ				砂粒大量、軟径小	ⅢD~ⅢE	
189	IA7c	Ⅲ	酒杯	口縁	RL タテ→沈堀区画→器面ナテ	ナテ				砂粒大量、軟径小	ⅢD新	
190	IA7c	Ⅲ	酒杯	胴部	RLR タテ→沈堀区画(楕円)	ナテ				砂粒大量、軟径大	ⅢD新	
191	IA7d	Ⅲ	酒杯	胴部	LR タテ→沈堀区画(流U字状)→器面ナテ	ナテ				砂粒大量、軟径小	ⅢD新	
192	IA7c・7d	Ⅲ	酒杯	胴部~底部	LR タテ	ナテ		90	[15.9]	砂粒大量、軟径大	ⅢD~ⅢE	
193	IA8c	Ⅲ	酒杯	胴部~底部	LR タテ→沈堀区画(流U字状)→器面ナテ	ナテ		53	[5.4]	砂粒大量、軟径小	ⅢD新	
194	IA8c	Ⅲ	酒杯	胴部~底部	RL タテ→器面ナテ	ナテ		(9.4)	[4.8]	砂粒大量、軟径小	ⅢD~ⅢE	
195	IA8c	Ⅲ	酒杯	口縁~底部	流状口縁、LR タテ→沈堀区画(流U字状)→器面ナテ	ナテ	(14.4)	72	21.2	砂粒大量、軟径小	ⅢD新	
196	IA6d・8c	Ⅱ・Ⅲ	酒杯	口縁~胴部	平縁、LR タテ→沈堀区画(楕円・流U字状)→器面ナテ	ナテ	22.5		[30.9]	砂粒大量、軟径大	ⅢD新	

第35表 石器・石製品観察表(平成28・29年度)

※壁・彫穴植物

掲載	出土地点	部位	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重量		産地	備考
								g	g		
85	6号壺	2周	石皿	閃緑岩				240.60		北上山地	写真掲載
86	6号壺	海積土	敲石	砂岩	10.30	6.20	3.50	283.50		北上山地	
87	6号壺	検出層	敲石	閃緑岩	10.80	4.40	3.40	255.85		北上山地	端部敲打痕
88	6号壺a	P106埋積土	磨製石斧	ひん岩	9.20	4.70	2.50	176.61		北上山地	刃部欠損
89	6号壺b	中内	敲石	花崗閃緑岩	8.30	6.50	4.40	330.26		北上山地	表面剥落
90	6号壺b	埋積土下部	磨石	砂岩	7.40	6.15	2.60	164.35		北上山地	
91	6号壺b	埋積土	磨石	砂岩	11.50	16.60	4.70	300.60		北上山地	端部敲打痕?
92	6号壺b	埋積土	石皿	閃緑岩	8.30	10.20	3.30	328.17		北上山地	
93	6号壺b	埋積土下部	石皿	閃緑岩	11.50	18.10	4.70	1536.48		北上山地	
94	6号壺b	埋積土下部	石皿	閃緑岩	30.10	17.00	4.40	1597.15		北上山地	
95	6号壺a	床面	石皿	花崗岩	45.80	25.90	11.70	6250.00		北上山地	
116	8号壺	床面	磨製石斧	ホルンフェルス	9.60	4.40	2.60	150.37		北上山地	刃部敲痕
117	8号壺	知石籠	石皿	閃緑岩	26.20	18.40	7.80	6000.00		北上山地	卵石に転用
118	8号壺	床面	石皿	閃緑岩	13.70	13.30	3.70	849.83		北上山地	
119	8号壺	床面	石皿	閃緑岩	19.60	18.65	9.20	4500.00		北上山地	
120	8号壺	床面	石皿	閃緑岩	25.00	20.70	5.80	4150.00		北上山地	
121	8号壺	知石籠	石皿	ホルンフェルス	34.60	15.20	6.10	1996.85		北上山地	破片多数
136	9号壺	海積土	磨石	花崗閃緑岩	6.80	5.40	4.75	243.70		北上山地	
137	9号壺	埋積土	磨石	花崗閃緑岩	12.40	8.20	6.30	951.43		北上山地	
138	9号壺	埋積土下部	台石	閃緑岩	13.60	9.60	6.20	1262.72		北上山地	

第35表 石器・石製品観察表（平成28・29年度）

※ 写真撮影済

掲載	出土地点	層位	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重量		産地	備考
								g	g		
139	9号壺	礎上内	緑石	花崗岩	10.30	4.10	2.90	188.71		北上山塊	表面中央線打直
140	9号壺	地盤上	石皿	花崗岩	23.30	19.80	5.10	1672.55		北上山塊	全面赤化
141	9号壺	I層	石皿	閃緑岩	15.50	13.10	6.80	1857.28		北上山塊	
150	12号壺	砂石層	石皿	ホルンフェルス	22.00	14.40	6.00	2476.40		北上山塊	
197	1A2c	III層	棒状鏝	ホルンフェルス	20.30	6.00	4.50	830.19		北上山塊	石器素材種
198	1A3d	IV層	磨製石斧	ひん岩	10.80	5.00	2.00	204.80		北上山塊	刃部破損
199	1A4e	II～III層	緑石	砂岩	6.50	3.55	2.80	80.96		北上山塊	トナボキ石
200	1A5g	III層	石製印版	ホルンフェルス	5.70	5.80	1.30	51.88		北上山塊	
201	0A4g	II～III層	緑石	砂岩	9.70	7.60	7.05	740.97		北上山塊	写真掲載
202	1A5e	IV層	緑石?	砂岩	10.50	6.80	5.40	558.90		北上山塊	写真掲載
203	1A6b	III層	磨石?	閃緑岩	6.35	5.20	3.00	155.97		北上山塊	写真掲載
204	1A7d	III層	緑石?	閃緑岩	10.80	7.40	4.90	645.30		北上山塊	写真掲載
205	1A8c	III層	緑石	閃緑岩	9.10	6.60	3.50	323.58		北上山塊	写真掲載

VI 自然科学分析

1. 小白浜遺跡から出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究舎）

(1) はじめに

小白浜遺跡は釜石市唐丹町小白浜の小白浜港から約500m内陸にある縄文時代中期後葉の集落である。これらの竪穴建物の炉内焼土には若干の炭化物が確認された。そこで当時の植物質食料などの利用状況を把握する目的でこれら炭化種実の調査をおこなった。今回分析に供した試料は4建物5試料で、堆積物は0.5mm目の篩で水洗し、残渣から肉眼及び実体顕微鏡で同定可能な炭化種実を選別同定した。

(2) 同定結果及び考察

本遺跡の竪穴建物炉内焼土から出土した炭化種実同定結果を表1にまとめた。分類群はオニグルミ、クリ、トチノキ、シロザ近似種、不明炭化種実を出土し、クリが多くトチノキはやや多く、オニグルミ、シロザ近似種はわずかであった。

表1 小白浜遺跡出土炭化種実

分類群	部位 / 処理態	遺構地点	1号炉穴	2号炉穴	3号炉穴	4号炉穴 炉1	4号炉穴 炉2
オニグルミ	炭化内果皮破片		701.2g	901.3g	2508.1g	1889.4g	373.1g
クリ	炭化内果皮破片		9	—	1	—	—
	炭化果皮破片長さ10mm以下		2	—	—	—	—
	炭化果皮破片長さ5mm以下		12	123	25	5	—
トチノキ	炭化種子破片		3	5	1	—	—
	炭化種皮破片長さ10mm以下		—	—	—	1	—
	炭化種皮破片長さ5mm以下		7	13	17	2	2
シロザ近似種	炭化種子		—	3	—	—	—
不明	炭化種実		2	—	—	—	1

以下に出土した炭化種実の形態記載をおこなう。

オニグルミ：炭化した内果皮の小破片を出土した。内果皮は不規則な曲面で構成され、細胞構造が柔組織のみで単一である。

クリ：炭化した果皮破片、子葉破片を出土した。果皮は縦方向に規則的な筋があり、縦方向に割れやすい。また果実下半部の大きな基部は低い丘状の突起が密に並び境目は筋で明瞭に分かれる。子葉は完形であれば頂部が細いまるみを帯びた三角形であるが本遺跡では頂部の破片とその他の部分の小さな破片を出土した。子葉表面には波状のやや細かいしわが縦方向にある。

トチノキ：炭化した種皮破片を出土した。種皮は堅くやや薄く下半部は光沢がない木質のへそで上半部はやや光沢があり指紋状や流理状、微細な網状の模様がある。

シロザ近似種：炭化した種子を出土した。丸く扁平な種子は一端にへこんだへそがあり、そこから中央に向かって筋がはいる。表面はやや光沢があり、中心に収束する筋状の模様が見える場合がある。不明炭化種実：破片状で特徴がないが均質な構造をもち、ときに脂肪が溶けたような泡状の物質が付着する。堅果類のいずれかの子葉破片と考えられるが特徴がない。

本遺跡の炉内焼土から出土した炭化種実はいずれも10mm以下の大変小さい破片であったが、全ての建物からクリが出土し日常に利用されていたと考えられ、出土傾向がほぼ利用頻度を示している可能性がある。したがって縄文中期後葉頃、岩手県沿岸部ではクリを主に利用し、トチノキやオニグ

1. 小白浜遺跡から出土した炭化種実

ルミを伴っていたと考えられ、本遺跡の分析結果は当時の人々の植物利用の一端を示す分析結果と言える。クリは縄文時代を通して、特に東北地方では主要な資源植物として果実や木材が利用されてきた。東北南部ではあるが同時期頃の縄文中期後半の福島県飯野町和台遺跡では住居跡と見られる円形土坑底部に祭祀土器とともに集積した炭化クリが確認され、わずかにトチノキとオニグルミを含んでいた(吉川 2003) ことからクリの重要性がわかる。

引用文献

吉川純子. 2003. 183号住居跡出土炭化種実の同定分析. 「和台遺跡」. 飯野町教育委員会・福島県東北建設事務所編. 733-741.



図版 1 小白浜遺跡出土の炭化種実

1. オニグルミ、炭化内果皮破片 (SI01) 2. クリ、炭化果皮破片境目 (SI01) 3. クリ、炭化果皮破片内側 (SI03) 4. クリ、炭化子葉頂部 (SI02) 5. トチノキ、炭化種皮破片 (SI03) 6. シロザ近似種、炭化種子 (SI02) スケールは 1mm

2. 分析結果所見

分析について、所見を記す。

(1) 出土炭化種実について

未水洗の焼土サンプルの洗浄、試料抽出、鑑定を依頼した。サンプル量は1kg前後を目標としたが、多量の焼土サンプルを採取できた炉とできなかった炉がある。2・3・4号竪穴建物では採取可能な焼土量が多く、オニグルミ、クリ、トチノキ等が確認された。特に2号竪穴建物では900gの土壌から、他の建物よりもはるかに多くのクリが検出された。居住施設としての床面積を持たない2号竪穴建物は、燻製小屋の可能性をIV章で指摘した。堅果類の加工・処理施設であった可能性も想定される。

(米田)

Ⅶ 総 括

1 調査成果概要

平成 27 年度（2015 年度）調査成果はⅣ章記載のとおりである。調査区は 1,000㎡、検出遺構は竪穴建物 5 棟である。すべて縄文時代中期後半でこのうち 3 棟は複式炉を有する。出土遺物は、縄文土器、磨石、剥片である。縄文土器は大半が中期であるが、早期の貝殻文系土器が 1 点出土している。

平成 28・29 年度（2016・2017 年度）調査成果はⅤ章記載のとおりである。調査区は 2 ヶ年計 1,492㎡、検出遺構は竪穴建物 8 棟、埋設土器 1 基、土坑 1 基、焼土 1 基である。すべて縄文時代中期後半である。出土遺物は、縄文土器、磨石、剥片である。縄文土器は、大半が中期であるが、後期と晩期の土器が微量出土している。

2 遺 構

(1) 竪 穴 建 物

縄文時代中期後葉に位置づけられる。伴出土器はⅢD～ⅢE 群主体で、土器型式では大木 9～10 式期に該当する。大木 9 式期は複式炉の出現期にあたり、本遺跡では 2・3・4・6・8 号竪穴建物が複式炉を有する。1 号竪穴建物は平面形が不整楕円形で、建物中央部に石囲炉をもち、大木 9 式古段階までの様相を色濃く残す。Ⅳ章での検討から、2 号竪穴→3・4 号建物の新旧関係が明らかになっており、成果をまとめると 1 号竪穴（大木 9 式新段階）→2 号竪穴（大木 9 式新段階）→3・4 号竪穴（大木 9 式新段階）が想定される。4 号竪穴は 6 号竪穴方向から土砂や遺物が流入する位置にあり、堆積土から出土した大木 10 式土器は、6 号竪穴に帰属する可能性がある。

6 号竪穴 b は大木 10 式土器が一定量床面から出土しており、10 式期の廃絶と考えられる。

本遺跡は、釜石市教育委員会による 1 次調査（釜石市教委 2006）で、縄文早期・前期の土器や弥生土器も出土しており、縄文早期以降、連続と人々の生活痕跡が認められる遺跡と判明しているが、今回の調査成果はそれを補強する資料が蓄積され、特に縄文時代中期の集落の様相が明らかとなった。

3 出 土 遺 物

(1) 縄 文 土 器

I 群（早期中葉）の物見台式土器が 1 点出土している。その他はⅢ群（中期）の大木 9～10 式土器である。ⅢC 群とした大木 9 式古段階の土器は微量出土している。主体はⅢD 群の大木 9 式新段階である。ⅢE 群とした大木 10 式土器は、6 号竪穴 b の床面のほか、4・7・8 号竪穴建物の堆積土上部と遺構外から出土している。縄文後期のⅣ群は、初頭～前葉の十腰内 I 式のⅣA 群が複数個体遺構外で出土している。また、後葉の瘤付土器が出土している。縄文晩期のⅤ群は、後葉～末の大洞 A～A' 式が出土している。

(2) 石 器

石器数量は少ない。基盤層の珪質岩石や粘板岩は石囲炉の炉石に利用されているが、石器石材としては利用されていない。頁岩製剥片石器、ひん岩製磨製石斧、閃緑岩製石皿などが出土しているが、これらの石材は集落範囲内では産出せず、集落外から持ち込まれたと考えられる。搬入石材に依存し

た石器製作状況は、本遺跡が石材の欠乏地域に位置することを示す。しかし、通常剥片石器として利用される鎌、スクレーパー類、錐などの道具が、海獣骨・海産資源の利用による骨角器や貝製品によって賄われている可能性が高く、遠隔地への石材採取を頻繁に行う必要がなかったと考えられる。本遺跡と類似の立地条件にあり、唐丹湾内に位置する屋形遺跡では、縄文時代中期～後期の厚い貝層が検出されており、クジラ骨や貝類が大量に出土している一方で、剥片石器数は少なく、石製利器の器種も少ないことが確認されている。このことから唐丹湾岸の縄文人は豊富な海産資源を背景とした小骨角器・貝製品製作を行うことで、石製利器の製作が相対的に低調であったと評価される。

参考文献

- 〔岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2019「田屋遺跡」岩手県文化振興事業団発掘調査報告書第704集
釜石市教育委員会 2006「小白浜遺跡」釜石市埋蔵文化財調査報告書第9集



遺跡遠景（東→）：写真中央が唐丹湾小白浜地区



遺跡遠景（東→）：写真中央上部が平成27年度調査区、中央が小白浜集落



調査区全景 (西→)



基本層序 (北→)



調査区上段部完掘 (南東→)



調査区下段部検出 (南→)

写真図版2 調査区全景、基本層序、調査区完掘



調査区上段部近景 (南東→)



1・2・4号竪穴建物跡 (南→)



2・3号竪穴建物跡 (東→)



1・2・3・4号竪穴建物跡 (東→)



3・5号竪穴建物跡 (南→)



近景 (南→)



建物内断面 (西→)



建物内断面 (南→)



建物内断面拡大 (南→)



建物内断面拡大 (南→)

写真図版 4 1号竪穴建物 (1)



遺物出土状況 (東→)



遺物出土状況 (東→)



遺物出土状況 (東→)



遺物出土状況 (北→)



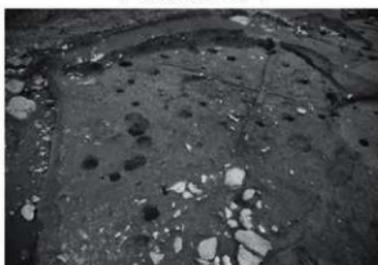
炉1 (南→)



炉1 焼土層断面 (南→)



炉範圍堀形 (東→)



1号竪穴建物跡堀形 (南→)



遺物出土状況 (東→)



床面近景 (東→)



堀形 (東→)



炉1石固部近景 (東→)



炉1石固部堀形 (東→)



遺物出土状況 (南東→)



跡遺物出土状況 (南東→)



埴形 (南→)



Pit 1 断面 (西→)



Pit 4 断面 (南→)



建物断面 (西→)



建物断面 (南→)



堆積土遺物出土状況 (東→)



P 6 断面 (南→)



炉 1 検出 (南東→)



炉 1 近景 (南東→)



炉 1 断面 (南東→)



炉 1 埴形 (南東→)



炉2構築後近景 (東→)



炉1構築後近景 (東→)



堀形 (東→)



建物断面 (西→)



建物断面 (南→)



炉1・2近景(東→)



炉2土器埋設部断面(南西→)



炉2断面(北→)



炉2堀形(東→)



炉1近景(東→)



炉1断面(西→)



炉1断面(北→)



炉1・2堀形(東→)



近景 (南西→)



堆積土内焼土・炭化物範囲 (南西→)



堀形 (南→)



建物断面 (南→)



建物断面 (西→)



写真図版 12 1号竖穴建物出土遺物(1)



9



10



12

11 Ⅱ 2・3号竖穴出土



13



14



15



16



17



18



19



20



22



21



23



24



25

写真図版 14 3号豎穴建物出土遺物



26



27



28



29



30



31

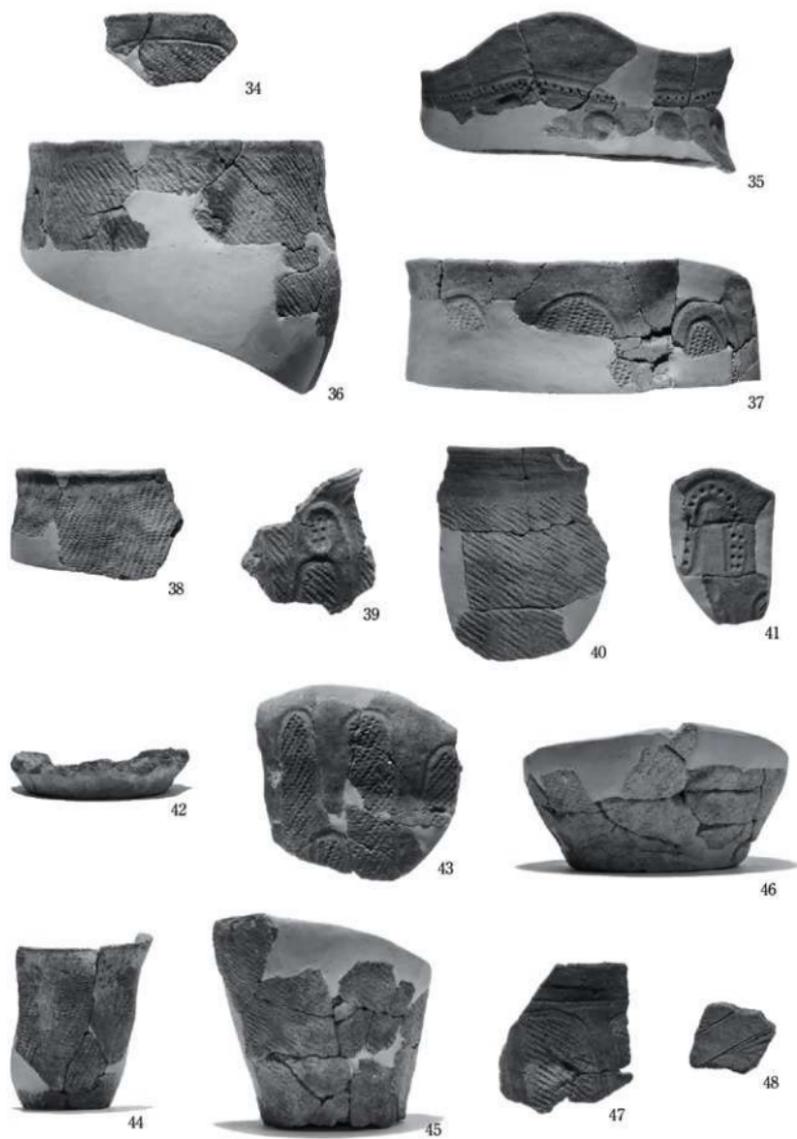


32



33

写真図版 15 4・5号竪穴建物、27年度遺構外出土遺物(1)



写真図版 16 27 年度遺構外出土遺物 (2)



49



50



51



52



53



54



55



57



58



56



59



60



61



62



65



63



64



66



67



70



68



69



71

写真図版 18 27年度遺構外出土遺物(4)



遺跡遠景（東→）：写真中央左上部が唐丹湾小白浜地区



遺跡遠景（南→）：写真ほぼ中央部が平成29年度調査区、中央下部が小白浜地区



調査区全景 (北→)



調査区遠景 (西→)



調査区遠景 (北→)



調査区遠景 (西→)



調査区遠景 (北→)



竖穴建物 a・b 近景 (南東→)



断面 (西→)



断面 (南西→)



竖穴建物 a 遺物出土状況 (南東→)



竖穴建物 a 遺物出土状況 (石皿) (南東→)



複式炉 近景 (南東→)



複式炉 近景 (北西→)



複式炉 断面 (北東→)



複式炉 断面 (北東→)



複式炉 断面 (北東→)



炉 近景 (南→)



炉 近景 (南→)



近景 (南東→)



断面 (南西→)



遺物出土状況 (南東→)



複式炉 近景 (南東→)



複式炉 断面 (南西→)



近景 (南東→)



断面 (南西→)



炭化物範囲状況 (南→)



炉近景 (南東→)



炉断面 (南西→)



近景 (南東→)



断面 (南西→)



遺物出土状況 (南東→)



炉近景 (南東→)



炉断面 (南西→)



近景 (南東→)



断面 (南西→)



遺物出土状況 (南→)



炉 近景 (南西→)



炉壘形 近景 (南西→)



近景 (南西→)



断面 (南西→)



炉 近景 (南→)



炉 断面 (西→)



炉 堀形 (南→)



1号埋設土器 検出 (南西→)



1号埋設土器 近景 (南西→)



1号埋設土器 断面 (南西→)



1号埋設土器堀形 近景 (南西→)



1号土坑 近景 (南東→)



1号土坑 断面 (北東→)



1号焼土 検出 (S→)



1号焼土 断面 (S→)



MT 11 完掘 (北東→)



MT 12 完掘 (南→)



調査区北東裾部 終了 (南西→)



調査区北東部 終了 (南西→)



調査区北部 終了 (西→)



調査区南部 終了 (北東→)

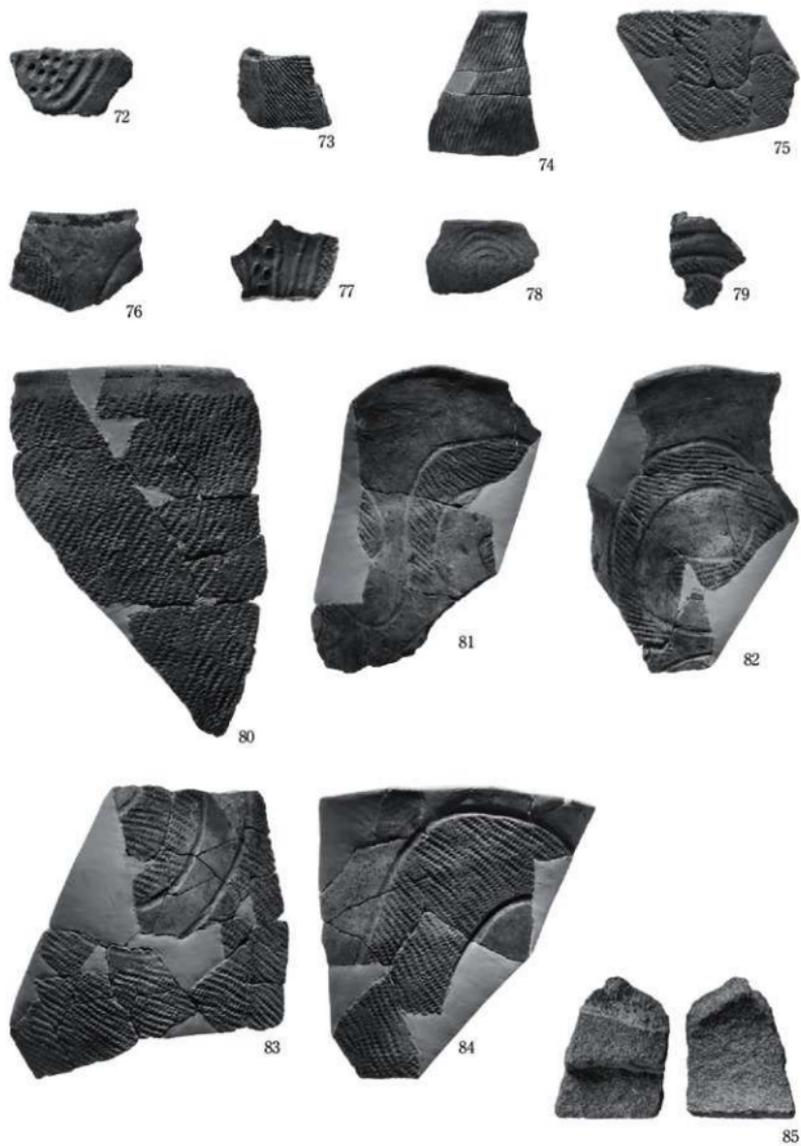


作業状況 (北→)



作業状況 (南→)

写真図版 30 調査区内完掘状況、作業状況



写真图版 31 6号竖穴建物出土遺物(1)



86



87



88



89



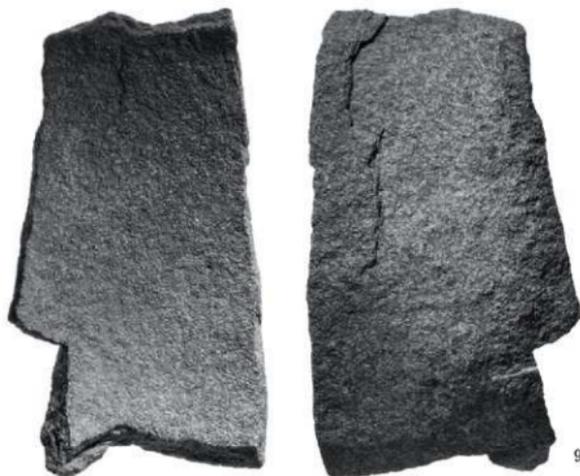
90



91



92

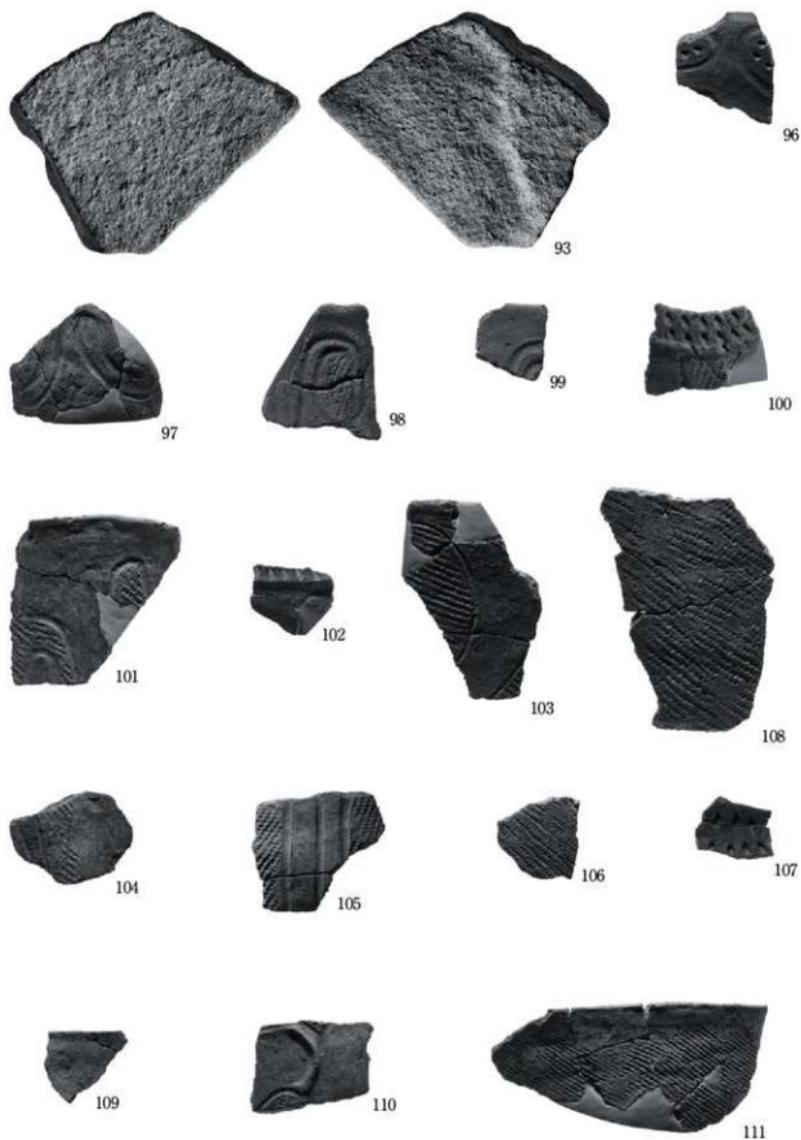


94

写真図版 32 6号竖穴建物出土遺物(2)



95



写真図版 34 6号豎穴建物(4)、7号豎穴建物、8号豎穴建物出土遺物(1)



112



113



114



115



116



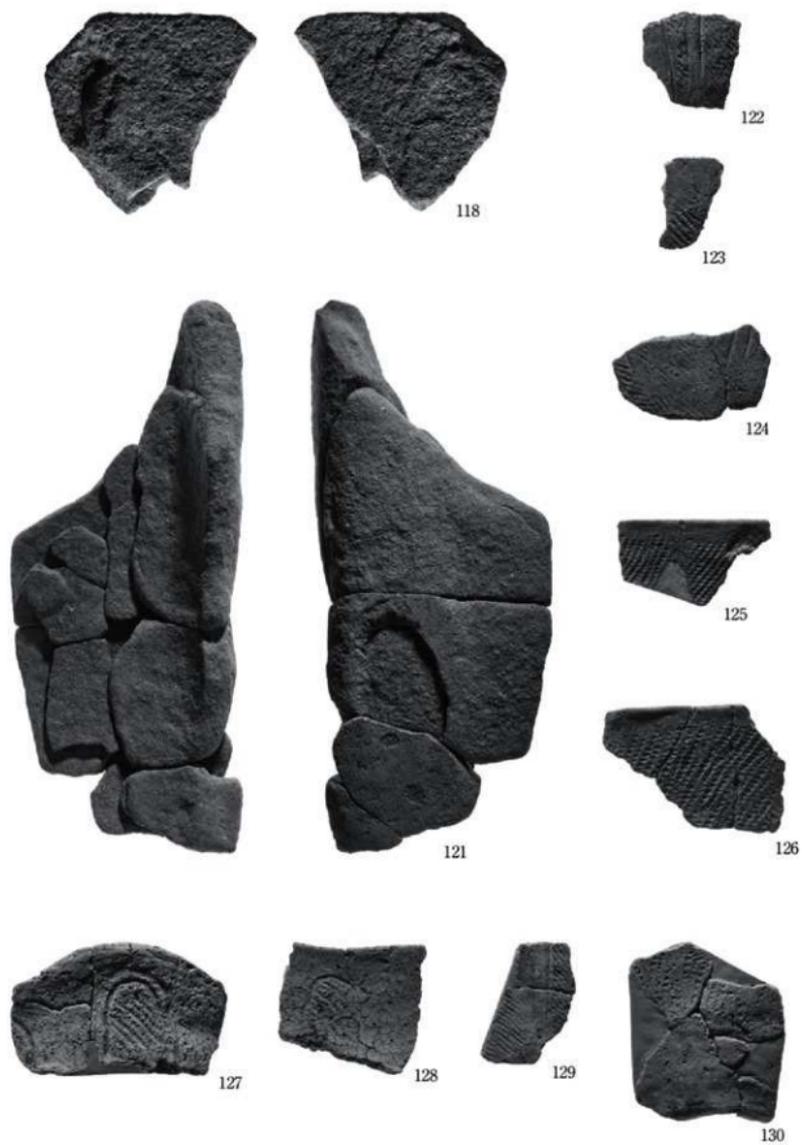
117



119



120



写真図版 37 8号竖穴建物(4)、9号竖穴建物出土遺物(1)



131



132



133



134



135



136



137



139



138



141



140



142



143



145



146



144



147



148



149



151



152



150



154



155



156



157



158



159



160



153



161



162



163



164



165



167



168



169



166



171



170a



170b



172



写真図版 42 28・29 年度遺構外出土遺物 (3)



190



191



195



192



196



193



194



197



198



199



200



201



202



203



204



205



206



207



208

報告書抄録

ふりがな	こじらはまいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	小白浜遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第705集							
編著者名	米田 寛							
編集機関	公益財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2019年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
こじらばいせき 小白浜遺跡	こじらばいせき 釜石市唐丹町字小白浜 385 ほか	03211	MG 92-0133	39 度 12 分 39 秒	141 度 51 分 51 秒	2016.04.16 ～ 2017.05.29	2,492㎡	三陸沿岸道路 建設事業
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小白浜遺跡	集落跡	縄文	堅穴建物 埋設土器 土坑 焼土	13 棟 1 基 1 基 1 基	縄文土器（早期・中期・後期・ 晩期） 石器（石鏃、潤片、磨製石斧、 磨石、敲石、石皿ほか）		縄文時代中期後葉の集 落で、複式炉を伴う堅穴 建物が複数確認された。	
要 約	小白浜遺跡は、釜石市唐丹湾を望む丘陵地に位置する集落遺跡である。遺構は、縄文時代中期後葉の堅穴建物が目つき、建物内に複式炉が設置される時期が主体である。調査範囲は宅地・水田造成により削平が進んでおり、造成を免れた斜面地を中心に遺構・遺物が残存する。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第705集

小白浜遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成31年2月15日

発行 平成31年2月28日

編集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185

電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所

〒026-0301 岩手県釜石市縄住居町第13地割1-4

電話 (0193) 28-4731

(公財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電話 (019) 654-2235

印刷 有限会社セーコー印刷

〒020-0877 岩手県盛岡市下ノ橋町2番23号

電話 (019) 351-3606